薄紅色の花びらの下で

南瓜姫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

薄紅色の花びらの下で

【Ｎコード】

Ｎ５５０６Ｉ

【作者名】

南瓜姫

【あらすじ】

牧場物語ルーンファクトリー２の二次創作小説です。

一　アルヴァーナへの漂流者（前書き）

気がつくと薄紅色の花の樹の下に立っていた。ハラハラと舞い散るそれは、美しくそして儚げだった。

一　アルヴァーナへの漂流者

一　アルヴァーナへの漂流者

ゼークス帝国の野望が潰えてから数年、世界はひと時の平穏を取り戻していた。そんな折、ノーラッド王国の辺境の町、アルヴァーナに一人の青年が流れ着く。

――この町にこなくてはならない気がする――

青年が一人、一本の樹の下で立ち止まった。

「きれいだ」

はらはらと散る薄紅色の花に見とれている青年に、一人の少女が声をかけた。

「見ない顔だね。旅の人？」

「はい」

声をかけられて、青年はそちらを見た。自分より年下であろう可愛らしい娘が、大きくクリクリとした瞳で、人懐こい笑顔を自分に向けている。

「ここへは観光に来たの？」

「いや、気がついたらここに立っていて。この花がきれいだったから見とれていた」

そう答えた青年は、臆面もなく話しかけてくる少女に戸惑った。

「ああ、この樹はね、セレッソって言うの。私も好きよ、この花」

少女はニッコリと微笑んだ。

「私はマナっていうの。貴方は？」

「カイル」

「そう、カイル。カイルはこれからどうするの？」

「どうしよう……」
マナはカイルを観た。ぼさぼさの赤い髪で、くたびれたリュックを背負い、身体も薄汚れているようだ。でも、その優しげな瞳と柔和な表情に、この人は悪い人ではなさそうと判断した。
「行くあてがないのね。……ねえ、良ければ、この町にある牧場を使ってみない？」
「牧場？」
「ええ、前の牧場主がいなくなってから空き家になっているの。カイルが牧場をしてくれれば、町の人も喜ぶと思うわ」
屈託のない笑顔を見せるマナの提案に、カイルはありがたく思った。なぜなら、彼は名前以外、自分が何者なのか思い出せなかったのだ。当然、帰る場所もなく、食べていく術もない。
「やってみようかな」
「よし、決まりね！　着いてきて」
マナは手を後ろに組んで楽しそうに歩きだす。カイルはそんなマナの後を追った。

牧場は、木々がうっそうと茂る小道を抜けたところにあった。
「ここよ」
マナが指差したのは、主のいなくなった牧場である。畑と思われる場所は雑草だらけ、家はぼろいが、なんとか雨風はしのげそうだ。
「どう、やっていけそう？」
心配そうに上目遣いで見つめるマナを、カイルは一笑に付した。
「上出来だよ。中を見せてもらえる？」
「ええ、着いてきて」
マナはカイルを中へ案内した。家の中はうっすらとほこりをかぶっているものの、家財道具は揃っており、なんとか住めそうである。
「掃除をすれば良いだけだ。ありがとう、マナ」
すると、マナが棚からはたきを取り出し、カイルに手渡した。

「マナ？」
マナは自分もほうきとちりとりを持ったまま、にこっと笑った。
「さっさと掃除しましょ。今晩、眠れないでしょ？」
「ありがとう」
礼を口にすると、カイルも顔をほころばせた。

二時間かけて、二人は部屋の掃除を終えることができた。
「助かったよ。今夜はベッドで眠れそうだ」
カイルの言葉に、マナはクスクスと笑う。
「カイル、夕飯を食べるあてはないでしょ？」
「まあ」
頭をかきつつ返答に困っているカイルに、マナは、可愛い人と笑みを洩らす。
「じゃあ、うちに来て。大した物は作れないけど、ご馳走するわ」
「助かるよ。何から何まですすまない」
カイルが謝ると、マナは何てことないわよと言いながら、カイルの目の前に人差し指を立てた。
「でもね、うちに来てもびっくりしないでね」
「え？」
カイルはマナが何を言っているのかさっぱりわからない。マナの家って何か驚くようなからくりでもあるのかと、頭にふっと恐ろしいものがよぎる。マナはそんなカイルの考えを知ってか知らずか、淡々と話を続ける。
「父さんがいるの。癖のある人だけど悪い人じゃないから」
「わかった」
なんだ、マナの父さんか。どんな怪物を飼っているんだろうかと、想像した自分が恥ずかしい。マナの父さんってどんな人なのだろうと思いながら、カイルはマナと彼女の家に向かった。

牧場からまっすぐに南下した先に町が広がっている。その通りの角にマナの家である雑貨屋があった。店番をしていたマナの父親らしき男性は、いかつい体で腕を組んでいた。マナとカイルを一瞥すると、大きな声で怒鳴った。

「きさま、マナから離れろ！」

カイルは何もしていないのに、急に怒鳴られてびっくりした。

「あ、あの」

「マナ、結婚は許さんぞ！」

マナはカイルにごめんねと断りを入れてから、呆れたように父親を見る。

「今度、あの牧場を経営する事になったカイルよ。お得意さんになるかもしれないんだから、失礼のないようにね」

「そ、そうか。カイル、私はダグラス、マナの父親だ。くれぐれもマナにちょっかいを出すんじゃないぞ」

カイルはダグラスの迫力に押され、たじろいだ。ダグラスとマナはちっとも似ていなくて、体格がすごく良い。それに、初対面のカイルに、マナにちょっかいを出すんじゃないと言えるなんて、かなり強引な性格のように見えた。

苦笑いを浮かべるカイルの様子を横目で見ながら、マナはダグラスに告げた。

「父さん、今夜はカイルを夕食に招待したから」

「何！？」

「文句をいうなら、父さんの夕食は抜きだからね」

「マナ……」

娘にいいようにあしらわれている、いかついダグラスは良い人かもしれないと、カイルはほっとした。

夕食をご馳走になったカイルは、牧場へ戻る途中である。なぜか、

その横にマナがいる。
「悪いね」
「ううん、こんなに暗いんじゃ迷子になっちゃうでしょ？　町を出てしまったら大変だもの」
「大変？」
マナはこの町の外のことをカイルに話して聞かせた。町の外にはモンスターが住んでおり、人を見ると襲ってくる。だから丸腰で町を出てはいけないと教えた。
「そうなの？」
「でも、森に入らなければならないときは、タミタヤの魔法のかかった武器を装備すればいいわ」
「それはどこで手に入るかな？」
「鍛冶屋スチームよ。あ、牧場が見えてきたわ。じゃあね、カイル、おやすみなさい」
「おやすみ、マナ」
カイルは、マナの後姿が見えなくなるまで見送ってから、家に戻った。

家に入ると、リュックから塩とハブラシとタオルを取り出し、洗面所へ向かう。歯茎に塩をすりこみ、歯を磨き始めた。鏡を見ながら、どうして、僕はこの地に留まろうと思ったのだろうか、とカイルは考える。マナの顔が脳裏をかすめたが、きっとセレッソの花のせいだな、そう思うことにした。

二　初めてのクエスト

カイルは、窓から差し込む光と小鳥のさえずりで目を覚ました。ベッドの上で大きく伸びをすると、首をコキコキと鳴らす。ベッドから出て、まだ眠い目をこすりながら一階へ下り、洗面所で顔を洗った。蛇口から出る水がひんやりと冷たくて、一気に目が覚める。顔を拭きながら、キッチンへ向かい、冷蔵庫を開けた。昨日、マナが朝食にと、サンドイッチを持たせてくれたのだ。コップに水を入れ、サンドイッチを持って、ダイニングテーブルに着く。

「いただきます」

合掌して、まず水を飲んだ。アルヴァーナの水はかなりうまい。そしてマナの気遣いに感謝しながらサンドイッチを口に放り込んだ。

腹ごなしが済むと、働かざる者食うべからずだな、と独り言を言い、物入れをあさり始めた。前の牧場主が残していったと思われる、ぼろい農具が見つかった。これは鍛えなおさなければ使い物になりそうもない。無いよりはましだろうと、とりあえずカマを持ったカイルは外へ出た。

見渡す限り広がる、雑草の海。カイルは大きくため息をつきながら、草取りを始めた。しかし彼を思わず笑顔にさせるものが出てきた。薬草や毒消し草や色つき草に筍が生えているのだ。それらを出荷すれば多少なりとも稼げるだろう。その金で作物の種を買えばいい。

午前中いっぱいかけて、畑の雑草を取り終えた。収穫したものもある。カイルはこれらをどこへもって行けば良いのだろうかと考えていた。そこへマナがやって来た。

「カイル、お昼ご飯を持って来たよ」

籠を持ち上げて笑うマナに、思わずカイルは笑みを洩らす。自分のような見知らぬ人間にも優しくしてくれるマナは親切な娘だと感

心した。
「ありがとう。ところで、薬草とか摘んだのだけれど、どこへもって行けばお金に換えられるかな？」
「ああ、家の傍の出荷箱に入れてくれれば、夕方私が回収しに行くわ。代金は翌日には支払うわよ」
じゃあと、カイルは採ったものを出荷箱に収めた。

家に戻り、マナの持ってきてくれた昼食を食べながら、カイルは、畑ができるまでの間、どうやって稼げばいいかマナに相談した。マナが言うには、アルヴァーナの町の広場には町の人が頼み事や悩み事を自由に書ける掲示板があって、その頼み事や悩み事を解決してあげると、いい小遣い稼ぎになるという事だ。それに、解決してあげる事で、町の人と仲良くなれるかもしれない。カイルは昼食後、早速掲示板を見に行くことにした。

＊＊＊

掲示板に書かれていたクエストはマナのものだった。カイルは早速雑貨屋へ向かった。
「マナ、掲示板を見てきたんだけど」
「ふふっ、待ってたわ」
マナはカイルが来る事がわかっていたようである。マナの依頼は金剛花をロザリンドに届ける事だ。ロザリンドは、この町の大金持ちのヘリチャコスの娘だそうだ。マナは金剛花を棚から取り出すと、カイルに手渡した。
「じゃあ、お願いね」
「かしこまりました、マナ様」
マナはカイルのおどけた言葉にクスクスと笑った。

カイルはマナに教えてもらったとおりに町を歩き、広場の西の大

きなお屋敷の前に着いた。
「ここか……」
見れば見るほど、すごい屋敷である。カイルは呼び鈴を押すのがためらわれた。その時、中からメイドが出てきた。橙色の長い髪を大きなリボンで束ねて、ヒラヒラのフリルいっぱいのエプロンをつけている。人間臭さのない、どことなく神秘的な感じのする少女だった。
「あら、このお屋敷に何か御用ですか？」
「あの、ロザリンドさんにお届け物です」
「そうでしたか。どうぞお入りください」
そのメイドはカイルを中へ通すと、出かけていった。儚げで可愛い子だったなとカイルは思った。屋敷の中へ足を踏み入れるとエントランスを囲うように階段が左右に伸びていた。どうしようかと思っていると、階段を下りてくる人がいた。ハンサムでまるで王子を思わせるようないでたちに、カイルはおののいた。
「何か用かな？」
「あの、ロザリンドさんにお届け物なんですが」
「ああ、呼んであげよう。君は見ない顔だが？」
「東地区で牧場を経営する事になりましたカイルです。よろしく」
「僕は、マックス、マックス・レムナンド・ヴィヴィアージュだ。よろしく」
そう高らかに自己紹介を済ますと、マックスは二階へ上っていった。入れ替わりに、女性が降りてきた。広い額が頭の良さをうかがわせるその女性は勝気な顔をしていた。
「私に届け物ですって？」
「はい、マナからです」
そう答えて、カイルは金剛花を差し出した。
「まあ、ありがとうございます。好きなんですの、この花」
女性は花の香りを吸い込んでうっとりしていた。
「あなた、見かけない人ですわね」

「東地区で牧場を経営する事になりましたカイルです。よろしく」
「まあ、そうでしたの。私はロザリンド・レムナンド・ヴィヴィアージュですわ。よろしく、カイルさん。では、マナによろしくお伝えください」
「はい、失礼します」
カイルは暇を告げて、屋敷を出た。ロザリンドやマックスを思い浮かべ、ヴィヴィアージュ家の人たちは結構個性的だなと感じた。カイルはふうっとため息をつくと、雑貨屋へ向かって歩き出した。

三　初めてのダンジョン

雑貨屋へ戻り、マナに無事金剛花を届けたことを報告する。
「カイル、ごくろうさま。はい、報酬よ」
カイルは受け取った１００Ｇと手持ちのお金をマナに渡した。
「これで、クワとジョウロ、残りのお金で買えるだけの種を分けてほしいんだけど」
「ありがとうございます！」
しかし買えた種はタマネギ一袋だけだった。アルヴァーナの物価はかなり高いことを知った。力を落としているカイルに、マナが助言した。
「ヴィヴィアージュ家のクエストなら報酬も良いんじゃない？」
「そうか、見てくるよ」
カイルは種をリュックにしまい、クワとジョウロを持つと店を出た。いったん家に戻り、クワとジョウロをしまうと、家を飛び出した。

掲示板の中に、ロザリンドとマックスのものを確認した。どっちにしようか迷ったが、今回はロザリンドの方を選んだ。マックスのものは「高給」と記してあり、ちょっと危なそうな気がしたからだ。早速、ロザリンドの元へ向かった。

ヘリチャコス邸に入ると、あのメイドが出迎えてくれた。
「まあ、どうかしました？」
「あの、ロザリンドさんにお会いしたいんです」
「お嬢様は今お勉強中です。あと三十分ぐらいで終わると思います。こちらでお待ちください」
応接間に通されたカイルはソファに緊張して座った。程なくして、メイドが戻ってきて、お茶を出してくれた。

「ありがとうございます。あの、僕は東地区で牧場を経営する事になったカイルです」
「まあ、貴方がマナの話していた旅人さんね。私はセシリー、じゃなくてセシリアと申します。ご覧のとおり、ここでメイドをしています」
　セシリアというメイドはアルヴァーナへは留学のために来ているらしい。じっくりとセシリアを見てみると、最初に感じた違和感がなんだったか悟った。
「あなたはエルフなのですね？」
　セシリアは耳を押さえた。
「そうです。ハーフエルフです」
「そんな隠さないで下さい。可愛いですよ」
　カイルの言葉にセシリアは顔を赤らめた。そして、お嬢様を呼んできますと言い、応接間を出て行った。カイルは媚びたわけでなく、素直にそう思ったのだが……。

　しばらくして、ロザリンドが応接間にやって来た。
「カイルさん、御用って何ですの？」
「掲示板を見てきたのだけど」
　ロザリンドは嬉しそうに破顔した。常にきつい表情の彼女の笑顔を見たカイルは、可愛いじゃないかと思った。
「まあ、私のお願いを聞いてくださるのね。早速ですが、トリエステの森に生えるランプ草を摘んできてくださる？」
「わかりました。ところで、ランプ草の写真か絵はありますか？」
　ロザリンドは、お待ちになってと言って応接間を出て行った。
　しばらくして、図鑑を持ったロザリンドが戻ってきた。応接テーブルに広げられた図鑑を指差したロザリンドが、これですわと告げた。説明書きを読むと、紫色のその花のつぼみの中にある輝く粉には不眠を解消する成分があるらしい。
「あなたは薬でも作るのですか？」

「ええ、いろいろ実験とか薬の調合とかするんですの。今度新薬が出来たときにはカイルさんに実験台になっていただこうかしら？」
人体実験！？　頭の良い人の考えることは恐ろしいなと思いつつも、元来お人好しのカイルは断わることが出来なかった。
「ま、まあ僕でお役に立てるなら」
「嬉しいですわ！　お兄様にはいつも逃げられるんですの。カイルさんって頼りになりますのね」
うっとりとした表情で見つめられて、カイルは後ずさりした。
「じゃ、じゃあランプ草を採ってきますね」
カイルは暇を告げると、早々にヴィヴィアージュ邸を後にした。

カイルは家に戻り、クワを持って町の外に出た。町を出たところで道が三方に分かれている。左に進めば「メッシナの谷」、まっすぐ行けば「バドバ山脈」、右に行けば「トリエステの森」と標示があった。
「右か」
カイルはクワを担いで、右の道を進んだ。トリエステの森に恐る恐る入ると、真っ赤な丸い物がうごめいていた。
「なんだ、あれは？」
あれがモンスターだというのだろうか？　ピョンピョン跳んであちこち移動している。広場を見回すと、紫色のランプ草は見当たらない。カイルは襲ってきたときに備えてクワを構え、モンスターに見つからないように遠巻きに広場を抜けようとした。しかし、小枝を踏んでしまい、小枝はポキッと音を立てて割れた。その途端、丸い奴がカイルに気付き、彼めがけて突進してきた。
「わあっ！」
カイルは間一髪でそれを交わし振り返る。丸いのは身体を翻し、そのつぶらな瞳でカイルをにらんだ。あんなのに吹っ飛ばされてはたまったもんじゃない。カイルは一目散に広場の奥へ向かって走った。

道を進むと今度は滝のある広場に出た。そうっとうかがうと、モンスターがいた。今度の奴は矢を構えた猿人だった。あんなのに狙われたら防ぎようがないなと思いながら、カイルは滝のある広場を見回す。右手の奥の柵の手前に紫色のランプ草を見つけた。どうしようかなと考えるものの、こちらはクワである、どうしようもない。

「走るしかないか」

猿人が反対を向いたので、柵をめざして走り出した。あと半分というところで気付かれたようで、矢が飛んでくる。カイルは蛇行しながら走り、岩陰に隠れた。すると、矢を構えた猿人は興味がなくなったのか、元いた場所に帰っていった。ふうっと胸を撫で下ろしたカイルは、そっと柵に近寄りランプ草を摘んだ。それをリュックにしまうと、隙を見計らって、一目散に走りトリエステの森を出た。

家に戻ったときにはもう夕陽が空を赤く染めていた。ロザリンドのところへ行くのは明日にしようと思い、井戸の水を汲んで身体を拭いた。マナの話では、町に温泉があるらしいのだが、稼ぎの少ない今は温泉に通う余裕などない。

家に入り、取っておいた筍をナイフでスライスし、塩をつけて食べた。採れたての筍の刺身だ。ある意味贅沢だなと自分を慰めながら夕食を終え、ベッドに転がり込んだ。

翌朝、カイルは畑を耕し、タマネギの種を蒔いた。ジョウロで水やりをし、昨日きれいにしたばかりなのに、早速生えている雑草をむしった。雑草の生命力はすごいものだなと感心する。畑仕事を終えたカイルは、ヘリチャコス邸へ急いだ。

ヘリチャコス邸のドアを叩くと、セシリアが迎えてくれた。

「カイルさん、おはようございます」

「おはようございます。届け物なんですが、ロザリンドを呼んでも

らえますか？」
「わかりました。さあどうぞ」
屋敷の中の応接間へ通されたカイルはソファに座り、おとなしく待っていた。しばらくのち、ロザリンドが入ってきた。カイルは立ってあいさつをすると、リュックからランプ草を取り出して、ロザリンドに渡した。ロザリンドはたいそう喜び、報酬として２０００Ｇを手渡した。
ヘリチャコス邸を出たカイルは興奮していた。草を採ってくるだけで、２０００Ｇもの大金をくれるなんて、お金持ちの感覚は庶民とはかけ離れていると思った。カイルはお金を握り締めて、雑貨屋へ向かった。

雑貨屋で種を買い求めて、マナと雑談をする。
「一日でこれだけ稼ぐなんてすごいわね。どんなクエストだったの？」
「トリエステの森のランプ草を摘んできたんだ」
カイルの言葉にマナは両手で口を被い、くりくりした目をいっそう見開いた。
「武器は？」
「ない。クワを持っていった」
マナはカイルの体を観ながら、どこもケガはなかったかと質問した。カイルがないと答えると、マナは唖然としてカイルを見た。
「カイル、武器も持たずに町の外へ出ちゃいけないわ」
「クワじゃだめかな？」
「出来れば武器の方がいいわ」
武器か……。種を買い足して、すっからかんになった財布を見る。稼ぐしかないかと、また掲示板を見に行くことにした。

四　エルフの少年

掲示板には新たなクエストが追加されていた。やっぱり、手早く稼ぎたいときはお金持ちの依頼だよなと思い、マックスの元へ向かった。

ヘリチャコス邸に入ると、セシリアが迎えてくれた。

「カイルさん、いらっしゃい。今度はどなたに御用ですか？」

「あの、マックスを呼んでもらえるかな」

セシリアはニッコリ微笑むと、マックスを呼びに行ってくれた。セシリアって本当につつましくて可愛いなあとその後姿を見ていた。

程なくして、ショールをひるがえしながらマックスが自室から降りてきた。

「やあ、カイル、見目麗しい僕に何の用かな？」

自画自賛をするマックスは個性的だなと思いながらも、カイルはクエストの話を持ち出した。

「掲示板を見てきたんですが」

「ああ、頼まれてくれるんだね」

マックスはそう言うと、セシリアに何かを持ってこさせた。それは青々としたホウレン草だった。

「これを、ジェイクに届けて欲しい」

「ジェイク？」

「ああ、セシリアのホームステイ先の息子だよ。この時間なら鍛冶屋で仕事中だな」

カイルは受け取ったホウレン草をリュックにしまうと、ヘリチャコス邸を出た。すると、セシリアが後を追ってきた。

「カイルさん」

「セシリア、どうかした？」

「あの、ジェイクなんですけど、すごく生意気なんです、でも悪い子じゃありませんから」

セシリアの言っている意味がわからなくて、ポカンとしていたカイルだが、ニッコリ笑ってみせた。
「わかったよ。じゃあ」
セシリアに見送られながら、カイルは鍛冶屋へ向かった。

鍛冶屋スチームは町の東地区のはずれにあった。ドアを開け、中に入ろうとすると、男の子が飛び出してきた。
「わあっ！　ごめん！」
そう言うと、男の子は走って行ってしまった。その直後、髪を振り乱した女性が、大声を張り上げながら出てきた。その姿を見て、カイルはぎょっとした。その女性は羽飾りを頭につけ、背に日本刀を差し、腰には大小さまざまな四本の刀剣を差していたからだ。
「ロイーっ！　もう、逃げ足だけは早いんだから」
ぶつぶつ言いながら戻ってきた女性は、カイルに気付き声をかけた。
「あら、お客さま？」
「い、いえ、ジェイクさんはいらっしゃいますか？」
「ああ、中にいるわよ。ところであなた誰？」
「牧場を経営する事になりました、カイルです。よろしくお願いします」
「こちらこそ。私はターニャ。さっき逃げて行ったのは息子のロイよ。よかったら武器を買っていってね。町の外に出ることもあるでしょうから」
「はい、後ほど寄らせていただきます」
ターニャの後に続き鍛冶屋へ入る。奥まった炉の前に青年が立っていた。とがった耳に耳飾りをつけて、腰に剣を差していた。鋭い眼光はカイルをにらみつけている。カイルが近づくと、青年は凄みを利かせた声で怒鳴った。
「人間、近づくな！」
人間って怒鳴りつけられて、カイルはびっくりした。

「あの、マックスからの届け物を持ってきたんだけど」
「ああ、マックスの使いか」
青年はカイルの差し出した包みを乱暴に取り上げると、中を見て確認した。
「ありがとうな。マックスによろしく伝えてくれ」
「わかったよ。じゃあ」
帰ろうとするカイルに青年は呼びかけた。
「お前、名前は？」
「カイルだ」
「マックスに会ったってことは、セシリーにも会ったんだな」
「セシリー？　セシリアの事？」
「そうだ、セシリーに手を出すんじゃないぞ」
カイルは変な奴だと思ったが、コクリとうなずいて鍛冶屋を出た。セシリアの心配していたことって、ジェイクの人間嫌いのことか。彼もエルフなんだ。それも相当人間を嫌っている。きっと、人間とトラブルがあったのだろう。それよりも、クエストの完了をマックスに報告に行くことにした。

ヘリチャコス邸へ入ると、セシリアが心配そうに駆け寄ってきた。
「カイルさん」
「セシリア、大丈夫だよ。でも彼は人間が嫌いなんだね」
「ええ、悪い人はごく一部なのに、全てそういう目で見てしまうんです」
セシリアは悲しそうに目を伏せた。ジェイクのことが心配でたまらないのだろう。人間と共存しているのだから、やはり友好関係を築けた方が良いに決まっている。
セシリアにマックスを呼んでもらい、クエストの完了を告げた。マックスはとても喜び、報酬を手渡してくれた。なんと４０００Ｇだった。

カイルはヘリチャコス邸を出て、鍛冶屋へ向かう途中、掲示板をのぞいた。ジェイクのものが載っている。「ちょっと来い」というクエストだ。今から鍛冶屋へ行くのだから、ついでにジェイクのところへ寄ることにした。

鍛冶屋に入り、カウンターのターニャに剣を見せてもらった。ターニャはカイルの身の丈に合った剣を選んでくれた。

「これなんかどう？　ちょっと振ってみて」

カイルは渡された剣を握り締めた。なぜかしっくりとくる。剣なんか握ったことはないと思うのだが……。カイルが剣を構え振り下ろすと、ターニャの目つきが変わった。この純朴そうな青年が剣を振り回していたとは想像がつかなかった。それほど、カイルの剣さばきは堂に入っている。

「カイル、剣術を習った事あるんじゃない？」

「さあ？　僕、ここに来るまでの記憶がないんです」

「そう……、剣だけど、今はそれで良いと思うわ。腕が上がったら、またいらっしゃい。見合うのを選んであげるわ」

ターニャにお金を払い、お礼を言って、ジェイクのいる炉へ向かう。

ジェイクはカイルを見つけると、眉間にしわを寄せて嫌そうな顔をした。

「何か用か？」

「掲示板を見てきたんだけど」

カイルがそう告げると、手のひらを返したように、ジェイクは素直になった。

「ああ、悪いな。セシリーが何か困っているみたいなんだ。助けてやってくれないか」

「わかった」

「セシリーに手を出すなよ」

「わかってる」

カイルは鍛冶屋を出てヘリチャコス邸へ向かった。

ジェイクのやきもち妬きは半端じゃないなと、辟易しながら歩いていると、掲示板の辺りでセシリアにばったり会った。もうメイド服は着ていなくて、私服だった。髪にはピンクの花飾りをつけ、首にはやはりピンクの花飾りのチョーカー、きゃしゃな身体に大きく肩の開いた上着、膝上のミニスカート、ニーソックスをはいたその姿は、いやらしさがなく、可愛らしいなとあらためて思う。

「セシリア、いい所であったよ。ジェイクから君が困っているから助けてやってくれと頼まれたんだ」

「まあ、ジェイクったら。お願いしてもいいのかしら？」

「もちろん」

セシリアは安堵したように微笑んだ。

「カイルさん、トリエステの森に入ったところでペンダントを落としてしまったんです」

「とって来ればいいんだね。わかったよ」

「お願いします」

セシリアはこれからマナのところに行くらしい。カイルとセシリアは途中まで一緒に歩いた。セシリアにどこから来たのかと聞かれ、カイルはここに来るまでの記憶がないこと、アルヴァーナになぜ留まる事にしたのかわからないと話すと、セシリアは懐かしいものでも見るような目でカイルを見た。不思議そうな顔をするカイルに、セシリアは自分の育ったカルディアという町の話をした。

「私が幼いころ、カルディアにもカイルさんのように記憶のない男性が現れたんです。彼は、ラグナさんはあなたのように牧場を経営し、ゼークス帝国の脅威からカルディアを救ってくれたんです」

そこまで話すと、セシリアは息を大きく吸い込んだ。一気にまくし立てたセシリアを見て、カイルは微笑んだ。

「セシリアはラグナさんのことが好きなんだね」

「ええ、とっても優しいお兄さんでした」

嬉しそうに話すセシリアを見ながら、カイルは自分自身を省みる。
僕はどうしてこの地に留まっているのだろうと……。
セシリアと別れたカイルは家に戻り、昨日のように筍の刺身を食べて、早々にベッドに潜り込んだ。

五　はじまりの森

寝苦しさに耐えかねて目覚めると、もう外は明るく白み始めている。眠い目をこすりながら、カイルは身支度を整え畑へ出た。昨日種を買い足したので、それらを蒔くのである。案の定、外は蒸し暑かった。夕べ降った雨のせいで湿気が高い。しかし、その湿気のおかげで土が軟らかくなっており、畑を耕すのは容易だった。サクラカブとキャベツの種を蒔き、水をやった。そして草取りをし、ニョキニョキと生えた筍を採り、薬草を摘んだ。それらを、出荷箱に収め、カイルはセシリアのクエストをこなすため、トリエステの森へ向かった。

トリエステの森に入ったカイルは慎重に奥へ進み、モンスターの様子をうかがう。きっと自分を見つけたら、あの赤い丸いモンスターは突進してくるだろう。おちおち探していられない。剣も手に入れた事だし、モンスターを倒してからゆっくり探す事に決めた。

剣を抜き、モンスターにじりじりと近づいた。案の定、カイルに気付いたモンスターは突進してきた。カイルはそれをひらりとかわし後を追う。モンスターの動きが止まったところを、嫌な気持ちになりながらも、剣で一刀両断に切りつけた。真っ二つに切り裂かれたモンスターは悲鳴を上げて、光になって空の彼方へ飛んでいった。

そのさまを見たカイルは美しいと思った。血がいっぱい流れて悲惨な状況を想像していたのに。モンスターはなぜ光になったのか、どこへ行ったのか……。でも、この光景は見た事がある気がする。デジャヴだろうか。

しばらく空を見上げていたが、ふと我に返り剣をさやに収めると、ペンダントを探し始めた。程なくしてペンダントは見つかり、森を後にした。セシリアの喜ぶ顔が早く見たくて、急いでヘリチャコス邸へ足を運んだ。

ヘリチャコス邸へ向かったカイルは、セシリアに会いペンダントを渡した。
「まあ、ありがとうございます」
セシリアは満面の笑みでお礼を言った。カイルは嬉しくなって、頭をかきながら暇を告げることにした。
「いや、じゃあ僕はこれで」
「あ、カイルさん」
カイルを見つめたセシリアは、頬を赤く染めた。
「今度は私の依頼も受けてくださいね」
カイルは快く返事をすると、ヘリチャコス邸を後にした。セシリアは玄関の外に出て、手を胸の前で組んで、カイルの姿が見えなくなるまで見送った。彼女は、カイルに幼い頃憧れたラグナを重ね合わせていた。

そしてカイルは鍛冶屋に来ていた。ジェイクはカイルの報告を受け、まんざらでもない様子だった。
「ごくろうだったな。ほら、報酬だ」
渡されたのは使い込んだカマだった。
「ありがとう、これ欲しかったんだ」
カイルが礼を述べると、ジェイクは照れくさそうにそっぽを向いた。
「ふん、せいぜい働く事だな」
そう言い捨てると、ジェイクは仕事に戻った。
そんな二人を見ていたターニャがクスクス笑っている。そしてカイルに耳打ちした。
「あの子、素直じゃないのよね。仲良くしてやって」
「はい」
内心カイルは無理なんじゃないかと思った。ジェイクは人間を憎んでいるのだから。

「あの、ターニャさん、お聞きしたい事があるんですが」
「何？」
「今日、モンスターを倒したんです。そうしたらモンスターが光になってどこかへ飛んでいったんです。どういう事なんですか？」
ターニャは腰に手を当てると、カイルを見てニコリと笑った。
「うちで打つ武器や農具には、タミタヤの魔法がかかっているのよ。だからそれでモンスターを倒したとしても、モンスターは死なない。光となってはじまりの森に帰っていくのよ」
「はじまりの森？」
「そう。いうなればモンスターの天国ね」
ターニャは、先ほどの笑みとは一転して、憂い顔で話を続けた。
「最近、町の外でモンスターが活発な動きを見せているのよ。以前はこんな事なかったのに。何かが起こっている気がしてならないのよね」
ターニャは虚ろな目をして宙を見つめていたが、カイルの方に向き直り、彼の肩をポンと叩いた。
「だから、鍛錬してね。そうね、トリエステの森のオークを五匹倒したら、５００Ｇをあげる。いい小遣い稼ぎになるでしょ？」
「はあ」
カイルは、なんと返事をしたらよいものか、考えあぐね、あいまいに言葉を濁した。
「でも、無理しないでね」
カイルは鍛冶屋を出て空を仰いだ。青い空には白い雲がいくつも浮かんでいる。
「モンスター退治か……」
実はあまり気乗りがしなかった。いくら死なないからといって、生き物に剣を振って金を稼ぐなど。でも、そのことに動じなかった自分を知ったのは驚きだった。

六　モンスターと共存すること

まだ昼になったばかりである。朝と違い、随分と空気が乾いたようで、さらっとした風が髪をなでる。鍛冶屋を出たカイルは、気持ち良い風だ、と歩き出したものの、きゅるきゅると鳴ったおなかが気になるらしい。何か食べる物を買おうと雑貨屋へ寄った。

「いらっしゃい。仕事は順調？」

にこやかに自分を見つめるマナに、カイルはほっとする。マナの微笑みに心が癒されるのだ。

「まあね。畑と掲示板の依頼のおかげで」

「そう、よかった。ねえ、お昼ご飯食べていかない？」

「いいのかい？　助かるよ」

マナはカイルの返事にニッコリと笑い、用意をするから店番をお願い、と言って二階へ上がって行った。

残されたカイルは、何をするでもなくカウンターに座っていた。店内を見回しても、これといって珍しいものはない。日常生活に必要な品が取り揃えられている。それにしても暇だ。お客もいないのだから何もすることはない。ぼーっとしていると、お客さんが入って来た。

「い、いらっしゃいませ」

「あ、あ」

ぬいぐるみを抱えた女の子が入ってきたかと思うと、カイルを見てすぐに飛び出して行ってしまった。

「あ……」

逃げられてしまって、カイルは絶句した。自分はそんなに恐そうに見えるのだろうか？　そこへマナが下りてきて、放心状態のカイルに声をかけた。カイルが今の出来事をマナに話すと、マナはクスリと笑い、カイルを慰めた。

「その子はドロシーといって、すごく人見知りが激しいのよ。気にしないほうがいいわ」
そう言うと、マナは店の表に休憩中の札を下げて、カイルを二階に連れていった。

「ダグラスさんは？」
「アルヴァーナ病院よ」
「どこか具合でも悪いの？」
カイルが心配そうに訊ねると、マナはニコニコと笑いながら首を横に振った。マナの話によると、ダグラスはアルヴァーナ病院のナタリー医師に会いに行っているらしい。二人は幼馴染で仲が良いということだ。母親がなくなってから大分経つからと、マナは言った。その様子は嫌そうでも、寂しそうでもなかった。
「ところで、ダンジョンにはまだ行っているの？」
マナの質問に、口に食べ物が入っていたカイルは黙ってうなずいた。
「無理しないでね」
眉根を寄せて心配するマナの言葉に、カイルは急いで食べ物を飲み下した。
「大丈夫だよ、剣も買ったし。それに、剣の扱いを知っているみたいなんだ」
「そうなの？」
その言葉にマナはますます不安な顔をした。カイルはそれを見て、しまったと思った。
「で、でも、農業の仕方も、何も聞かなくても、体が勝手に動くんだ。農業もしていたのかな？」
その言葉にマナはやっと笑みを洩らす。マナはカイルが戦う事は好まないらしい。
「そうね、カイルには剣よりクワの方が似合うと思うわ」
「それって、どういう意味？」

「何でかしら？　そんな気がするの」
そんなにクワを振っているほうが似合うのだろうかと、カイルは自分を頭に思い描く。剣を振るっている方が断然カッコイイに決まっているのに。マナのストライクゾーンって広いんだなと思った。カイルが物思いにふけっていると、マナがポツリとこぼした。
「剣を握るような危ないことはして欲しくないわ」
「どうして？」
「だ、だって心配だもの」
マナは、恥ずかしそうに顔を赤くして、カイルをにらんだ。くりくりとした大きな瞳に見つめられて、カイルは返答に困る。
「でも、町の外に出なきゃいけないときもあるわけだし。怪我しないように気をつける」
その言葉を聞いたマナは首を横に振り、うつむいてしまった。
「ごめんなさい、カイルの仕事に口出ししちゃって。私には関係ないものね」
カイルは、マナになんと声をかけて良いかわからない。関係ないと言われればそうかもしれないけれど、カイルだってマナに対する気持ちは他の人間に対するものとは違う。
「いや、心配してくれて嬉しいよ。ありがとう」
カイルの返答に、マナは顔を上げて、ぽかんとしたかと思うと、みるみる頬を紅潮させて微笑んだ。

マナとの昼食を終えたカイルは、午後からすることもないので、掲示板のクエストをこなす事にした。
途中、アルヴァーナ病院の前に、先ほど逃げ出したドロシーが立っていた。大きなフードで頭をすっぽりと覆い、前髪は長く表情をうかがうことは出来なかった。カンガルーだかキツネだかわからないが、青い服を着て首に赤いリボンをしたぬいぐるみを抱きかかえている。
「こんにちは」

カイルが声をかけると、ドロシーは硬直し動かなくなる。カイルは構わず自己紹介を始めた。
「牧場を始めることになったカイルです。よろしく、ドロシー」
ドロシーは、びくりとして、ぬいぐるみが変形するぐらいぎゅっと抱きしめた。
「ごめん、さっきマナから君の名前を聞いたから、ってちょっと待って！」
カイルは逃げ出そうとするドロシーの手をつかんだ。そしてポトリと落ちたぬいぐるみを、カイルは拾い上げた。
「マルヴィレス！」
「なんだ、しゃべれるじゃない」
カイルはそう言うと、にっこり微笑んだ。ぬいぐるみを差し出しながら、ドロシーに話しかける。
「この子、マルヴィレスっていうんだ。可愛いね」
カイルの優しい声音にドロシーは逃げるのをやめた。そして、マルヴィレスを受け取ると、またもやぎゅっと抱きしめた。
「ドロシーと私は友達なのよ」
カイルは、えっ！？　と思った。ドロシーじゃなく、マルヴィレスが話している。
「この子ね、人と話すのが苦手なのよ」
「へえ、じゃあ、マルヴィレス。僕がドロシーと友達になりたいって伝えてくれるかい？」
「ええ、おやすい御用よ。何々？　ドロシーがあんたと友達になってもいいって」
カイルはその様子にクスクス笑いながら、ありがとうと返事をした。
ドロシーはドロシーで、自分が初対面に近い男性と、マルヴィレスを通してでも、会話できたことに驚きを隠せなかった。
カイルはドロシーと別れて、町の広場に向かった。噴水の前に掲

示板が見えて、セシリアが頬を赤く染めて、自分の依頼を受けて欲しいといっていたことを思い出した。掲示板には「探してきてください」と書いてある。何を探すのだろうと考えながら、セシリアの元へ向かった。

セシリアはヘリチャコス邸の厨房にいた。カイルはセシリアにクエストの内容を聞き承諾した。その直後、セシリアが条件を出した。

「モンスターを手にかけないで下さいね」

「わかったよ」

カイルがセシリアの条件を飲むと、セシリアはニッコリと笑いカイルを送り出した。

「モンスターを倒さずに、トリエステの森の滝のところのルビーを取ってくるのか」

カイルはセシリアの言葉を不思議に思ったものの、倒すなと言われれば倒さずに済むのだし、それはそれで気が楽であった。それに足には自信がある。ロザリンドの依頼のときのようにすればいいだけであった。

難なくルビーを手に入れると、カイルはセシリアの元へ行き、ルビーを渡した。

「ありがとうございます。モンスターは倒さずに採ってきてくださったようですね」

「セシリア、そんな事がわかるの？」

セシリアは、ふふっと含み笑いをして答えた。

「ええ、これでもエルフの端くれですから」

ひどく感心しているカイルをよそに、セシリアは棚からグローブを持ってきた。

「カイルさん、これが報酬です。受け取ってください」

「グローブかい。ありがとう」

「これは普通のグローブではありません。仲良しグローブっていう

んです」
「仲良しグローブ？」
セシリアは仲良しグローブについて説明してくれた。そのグローブでモンスターをなぜ回すと、モンスターが仲間になってくれるというのだ。それを使って、モンスターと友達になれというセシリア。
「モンスターは愛情を持って接すれば、仲間になってくれます」
「できるかな？」
「カイルさんなら出来ますよ」
太鼓判を押すセシリアを、カイルは不思議に思いたずねた。
「どうしてそう思ってくれるの？」
「カイルさんはアースマイトの素質があるからです」
「アースマイト？」
セシリアはコクリとうなずくと、説明してくれた。
「アースマイトとは、モンスターと仲良く出来る人のことです」
「へえ、僕にそんな素質あるのかな？」
「頑張ってみてください」
セシリアは嬉しそうに笑った。

七　油断

セシリアの話によると、モンスターの中には副産物が採れるものもおり、家畜として飼うのに適しているとのことだった。

お金のないカイルには、自分の労力だけで手に入る家畜は魅力的だった。家畜を飼うにはえさを用意しなければならない。カイルは雑貨屋で牧草の種を買い求め、早速畑に蒔いた。これで、十日後には牧草が収穫できる。

十日後、牧草を収穫したカイルは、夜のトリエステの森に入った。今夜は満月だった。月光に照らされて、カイルの足元に影が出来るほどだ。トリエステの森は、真っ暗な闇に包まれている。時折モンスターの遠吠えが森に響き渡った。たいまつをかざしながら奥を照らすと、二つの小さな光を発見する。モンスターだった。

カイルはたいまつを地面に突き刺すと、仲良しグローブを手にはめた。そっと近づいてモンスターを観察する。セシリアの言っていたモコモコとした毛皮をまとったモンスターだ。

モンスターの背後に回りこみ、体を撫ぜる。モンスターはびくりとしたが、気持ち良さそうにうっとりしている。しかし我に返ると、振り返りタックルしてきた。カイルはそれをさっと交わし、また背後に回り撫ぜる。

そんな事を繰り返していたカイルだったが、油断したのかモンスターのタックルをまともに食らった。

「うっ！」

その後も攻撃を食らい続けた。ぼろ雑巾のように吹っ飛ばされながらも、やっとの事でトリエステの森を出たカイルは、薄れゆく意識の中、もうだめかもしれないと感じつつ、ばったりと倒れた。

目が覚めると、ベッドに寝かされていた。起き上がろうとするが、体中が痛くて起き上がることができない。
「だ、だめです。起きてはいけません」
声の主に目をやると、ドロシーがぬいぐるみのマルヴィレスをひしと抱いている。
「ドロシー？」
「やっと、気がついたわね。トリエステの森の入り口で倒れていたそうよ」
マルヴィレスが教えてくれた。
「ドロシーはどうしてここに？」
「看護婦見習いだから」
今度はドロシーが教えてくれた。カイルがありがとうとお礼を述べると、ドロシーは赤くなりながら部屋を出て行った。そして入れ替わるように、眼鏡をかけて白衣を着た女性が入ってくる。
「気分はどう？」
「良くないです。どうしてここに？」
カイルの答えに、苦笑を洩らしながら女性が教えてくれた。
「倒れていたところを、バレットが見つけてここまで運んでくれたのよ」
「バレット？」
「町長の息子よ。あなた、名前は？」
「カイルです。牧場を経営しています」
「ああ、マナの言っていた旅人ね。私はナタリー、医者よ。ところでどうしてあんな所で倒れていたのかしら？」
カイルが状況を説明すると、ナタリーはうんうんとうなずいた。
「気持ちはわからないでもないけど、無理は禁物よ。良くなるまで、ここでおとなしくしていなさい」
「はい」
入院している間、マナとセシリアが見舞いに来た。

「カイル！　大丈夫？」
マナはベッドで横になっているカイルにすがりつく。マナの慌てぶりに、カイルはびっくりしたが、にこりと微笑んでマナの頭を撫ぜた。
「心配かけてごめん。ご覧のとおり元気だから安心して」
「で、でも……」
マナの声は涙声に変わり、その大きな瞳からはポロポロと涙がこぼれ落ちた。
「マナ、椅子に座って」
泣きじゃくるマナを椅子に座らせて、カイルは彼女をなだめる。
「本当に大丈夫だから。一週間もしたら退院できるんだし、ねっ？」

そんな二人の様子を後ろで見ていたセシリアは、胸が苦しかった。カイルがマナの頭を撫ぜているのだ。親友のマナもカイルの事を好いている。ひょっとしたらカイルもマナの事を憎からず思っているのではないだろうか？
セシリアは、マナの肩にそっと手を置いて声をかけた。
「ごめんなさい、私が仲良しグローブを渡したばっかりに」
すると、カイルが首を横に振った。
「セシリアが謝ることじゃないよ。油断した僕が悪いんだから」
「カイルさん」
カイルの言葉を聞いても、セシリアの表情は冴えることはなかった。
カイルはそんな二人をなだめて帰ってもらった。でも、嬉しかった。こんな自分の事を心配して、涙を流してくれる人がいるのを知ったからだ。

一週間後、カイルは退院した。その足でカイルは町長宅へ向かったが、バレットは不在だった。彼の父親であり、町長のブライが対応した。

「ほお、バレットが君を助けたと」
「ええ、本当に助かりました」
カイルが礼を述べると、ブライは嬉しそうだった。ブライとバレットは折り合いが悪いらしい。それはバレットの素行の悪さのせいだと嘆いていた。カイルはそんなブライを慰めた。
「でも、バレットは行き倒れている見知らぬ僕を助けてくれました。きっと彼は照れ屋なんですよ」
「そうかもしれん、私たちはもっと話し合うべきだな」
ブライはそう言って、カイルを見た。カイルはこっくりとうなずいた。
ブライの家を出たカイルは、バレットを探すあてもなく、久しぶりにセレッソ広場へ足を運ぶことにした。もうすぐ春も終わりに差し掛かり、あの薄紅色の花を見られるのも一年後になる。

セレッソ広場に先客がいた。頭にバンダナを巻いた男が、むっとした表情でセレッソの樹の下にたたずんでいた。
「あの、君は？」
その男は返事をすることなく、カイルをにらみつけている。
「ひょっとして、バレット？」
相変わらず、カイルをにらみつけている男は、否定もしない。本人なのだろうと解釈して、カイルは話を続けた。
「僕はカイル、先週トリエステの森の入り口で君に助けられた者だ。ありがとう、本当に助かったよ」
バレットは面倒くさそうに、吐き捨てた。
「なんだよ、……ったく」
「バレットはここで何をしているんだい？」
「……そんなことどうでもいいだろ！　俺に構うな！」
そう口走ると、バレットは足早に町のほうへ去って行った。これでは、会話にならない。ブライさんも手を焼くわけだとカイルは思った。

その日の夕方、カイルは仲良しグローブを使って、モンスターを手懐けた。同じ轍は踏まない、僕には心配をしてくれる人がいるから、そう思うカイルだった。
ダンジョンから戻ってくると、マナが出荷物を回収に来ていた。
「カイル、退院したばかりなのに、どこに行っていたの？」
「ち、ちょっとね」
ダンジョンに行って来たと言ったら、また心配させるだろうと思い嘘をついた。
カイルの言葉を半信半疑で聞いていたマナだったが、カイルが答える気がないのを感じて、それ以上追求するのを諦めた。カイルは恋人でもないのだし……。

あの日、カイルの見舞いの帰りにセシリアから打ち明けられたのだ。
「カイルさんが好きです」
まっすぐに自分の目を見て告げたセシリアに、返す言葉が見つからなかった。そしてセシリアは、お互い頑張りましょうねと言い残し、家に帰っていったのだ。

「マナ、どうかした？」
「う、ううん。なんでもない。ねえ、カイル。これから、ご飯作ってあげる」
「えっ？」
「だって、カイル、ろくな物食べてなさそうだし、父さんたら、ナタリーさんたちと毎晩飲んでいるの。一人で夕食を食べても楽しくないから。ね、いいでしょ？」
マナは、カイルに断わられるのではないかと、ヒヤヒヤしていた。いくら大家だからって、そこまでするのは嫌がられるかもしれない、でも一緒にいたい。

「いいのかい？」
「もちろん！」
カイルの承諾に、マナは大喜びした。
その日から、マナは毎夕、出荷物を回収しがてらカイルの家に寄り、食事を作り一緒に食べていった。そんなマナにカイルはますます想いを募らせていった。
マナも同じだった。初めて会ったときから、カイルに惹かれているのだ。

八　セシリアの気持ち

朝ベッドでうつらうつらしていたカイルは、地響きと突然の揺れに驚いた。
「地、地震！？」
家は揺れ、ぎしぎしと嫌な音を立てる。ベッドの上で硬くなっていると、やがておさまった。ここに来てから、もう何度目だろう。地震のあった日は、モンスターの落ち着きがなくなる。そんな時、カイルは優しく声をかけ、いつもより丁寧にモンスターにブラッシングをする。動物だから敏感なのかとも思ったが、地震前はなんら普段と変わりない。地震が起こると、共鳴するのか怯えているのか騒がしくなる。

町に出ると、地震の話でもちきりだった。弁当を買うため雑貨屋に寄ると、マナが駆け寄ってきた。
「カイル、地震恐かったね」
心底恐かった様子のマナにカイルは父性本能をくすぐられる。僕が一緒だったら、大丈夫だよと抱きしめてやれるのに。そんな気持ちを押し隠して、カイルは返事をした。
「そうだね、マナは大丈夫だった？」
「ええ。カイルはこれからどうするの？」
「ダンジョンで採掘してくる」
「そう、気をつけてね」
心配そうなマナを残し、カイルは暇を告げると雑貨屋を出て、その足で鍛冶屋へ向かった。

「こんにちは、ハンマーを見せていただけますか？」
「カイル、いらっしゃい。今朝の地震はすごかったわね。ずっと地震は続いているし、モンスターは出るし物騒よね」

世間話を始めたターニャに悪いなと思いながらも、先を急ぐカイルは催促することにした。
「そうですね、あの、ハンマーを見せていただけますか？」
「あ、そうだったわね。これなんかどう？　大地を打てば地震が起こるって言われているのよ」
ターニャが選んだのは、ごついハンマーだった。カイルは苦笑いしながらかぶりを振った。
「じゃあ、こっちは？」
ごついハンマーをしまうと、装飾の施されたきれいなハンマーを取り出した。それを見たカイルは、その値札を見て苦笑いをする。
「あの、採掘に使いたいんです」
「なんだ、そうなの」
ターニャは、これだったらモンスターを一撃で倒せるのよと、残念そうに装飾の施されたハンマーを棚に戻した。そしてシンプルなものを出してくれた。

買ったばかりのハンマーを担いで、カイルはバドバ山脈に向かった。ダンジョンに進むと、空気が一気に凍った。ここは冬の気候である。壁や地面は氷に覆われており、吐く息も白い。
カイルはハンマーを収め、剣を抜いた。奥にハンマーと盾を持った大きなモンスターが見えたからだ。剣を構え、じりじりと近寄ると、モンスターは反応しうなり声を上げながら、カイルに向かって一撃を振り下ろした。カイルはそれをかわす。モンスターの動きは、腕力があり大振りなためスキが多い。カイルはモンスターの動きに合わせて流れるように剣を振り下ろす。数度、切りつけるとモンスターはばったりと倒れ、光になって消えた。カイルは剣をさやに収めるとハンマーを取り出し、採掘を始めた。
ある程度採り終えたカイルは、ダイヤモンドを手に取った。確かセシリアはダイヤモンドが好きだと言っていたのを思いだす。

帰り道宿屋に寄って、セシリアにお土産だといって、ダイヤモンドを手渡した。
「セシリア、こんにちは」
「こんにちは、カイルさん。何か用事ですか？」
カイルはリュックから、ダイヤモンドを取り出すと、セシリアに差し出した。
「はい、たくさん採れたからあげるよ。好きだっただろう？　ダイヤ」
「まあ、覚えていてくださったの。嬉しい！　ありがとうございます」
セシリアは、ダイヤモンドを受け取ると、うっとりとしてダイヤを眺めた。その姿を見て、セシリアって本当に宝石が好きなんだなと思う。
「じゃあ、またね」
「ええ、カイルさん。おやすみなさい」
セシリアは家の外に出て、帰っていくカイルの後姿をいつまでも見送った。
それから、たくさん宝石が採れると、カイルはセシリアに土産として、ダイヤモンドを手渡した。カイルは「永遠の愛」というダイヤモンドの持つ意味を知らなかった。

ある晴れた日の事、カイルは町の広場の掲示板の前に立っていた。
「とっても大事なお願いです」
掲示板にはそう書かれていた。セシリアからのクエスト、カイルは受けるかどうか悩んでいた。
先日、「大切なものなんです、探してください」というクエストを引き受けたばかりだ。メッシナの谷で丸い石を拾ってきてくれというクエストをこなし、丸い石を持ってセシリアに持っていったのだが、彼女はその丸い石をカイルに託した。
そして、今回のクエストは、その石を持ってメッシナの谷に来て

くれというものだった。そのクエストがどんな意味を持つのか、これまでのセシリアからの依頼で想像がついた。このクエストには、誠心誠意を持って答えなくてはならないとカイルは思った。

「セシリア」
「カイルさん、来てくださったのですね」
セシリアは満面の笑みを浮かべた。
「明日、メッシナの谷の社へ続く道でお待ちしています。あの、丸い石を持ってきてくださいね」
「わかったよ」

翌日、牧場の仕事を終わらせて家に戻ると、カイルは棚から丸い石を取り出し、それを見つめた。
セシリアにはいろいろと世話になっているし、世話もしている。彼女がジェイクに好意を持たれて、戸惑っているときは相談に乗った。そしてカイルが直接ジェイクと話し合ったこともある。それが、自分への気持ちのせいだと気がついたのは、つい最近のこと。自分を兄のように慕ってくれるセシリアが可愛くないわけがないが、カイルの心を占めているのはマナだ。

約束の時間、メッシナの谷の社の前に、セシリアは待っていた。
社への道は、池の中にあり、石橋がずっと社まで続いている。カイルは一歩一歩、セシリアに近づいて行く。社の前でたたずむセシリアは、神秘的でとても美しく見えた。
「カイルさん、良くいらしてくださいました」
「セシリア」
セシリアに見つめられて、カイルは戸惑っている。
「丸い石は？」
「ああ、ここにあるよ」
カイルはポケットから丸い石を取り出し、セシリアに見せた。セ

シリアはにっこりと微笑んだ。
「カイルさん、私小さい頃、いろいろな石を集めるのが好きで、ダンジョンで迷子になったことがあるんです。その時助けてくれたのがラグナさんでした」
「カルディアの知り合いだったね」
カイルの返答に、セシリアは自分の話を覚えていてくれたのだと嬉しく思う。
「その時、すごくラグナさんがステキに見えて……、プロポーズを受けるときはダンジョンの中にしようって」
セシリアは頬を赤らめた。
「あの」
セシリアが言葉をつむぐのをさえぎり、カイルは丸い石を石橋の上に静かに置いた。
「カイルさん？」
「ごめん、セシリア。僕は君の気持ちを受け止めることはできない」
それだけ言うと、カイルはきびすを返して、来た道を戻っていった。
セシリアはその後姿を見て呆然としていた。私の独り相撲だったんだ……。セシリアの瞳からポタポタと涙がとめどなくあふれる。そしてこらえきれなくなって座り込み、顔を覆い泣いた。

ひたひたと誰かがこちらに歩いてくる。
「セシリー」
顔を上げると、目の前にひざまずいていたのはジェイクだった。哀れむような、いとおしむような切ない表情をしてセシリアを見つめている。
「ははっ、私振られちゃった」
涙で顔をぐしゃぐしゃにしたまま、精一杯笑って見せた。ジェイクはそんなセシリアを黙って抱きしめた。セシリアはびくりと身体を強張らせたが、ジェイクの言葉に心をふるわせた。

「もっと泣いていいよ。俺がずっとそばにいてやるから」
「ジェイク」
セシリアはジェイクにすがって泣いた。
ジェイクは目の前の愛する女が、他の男を想い泣いているのが切なかった。彼がここに来ているのは、昨日カイルに知らされていたからだ。自分はセシリアの気持ちを受け止めることは出来ないと。最初はふざけるな！　と思ったが、今こうしてセシリアが泣いているのを目の前にして、知らせてくれたカイルに感謝するのだった。だが、同時に歯がゆかった。自分だったら、彼女を泣かすことなんかないのに。今はただ、セシリアの悲しみを受け止めるだけだった。

九　マナへの告白

牧場が雪で覆われ、白一色の季節になった。冬も終わりに近づく頃、アルヴァーナの町では流星祭がある。カイルとマナは、一緒に流星を見ようと約束をした。

流星祭の夜、マナは星降る小道でカイルを待っていた。

「待った？」

「ううん、来たばかりよ」

そう言って微笑むマナにカイルの心は躍る。マナの手を握り締めたいのをぐっと我慢して、夜空を見つめた。

「きれいだな」

「うん」

星を眺めるマナの横顔を見ながら、カイルは言葉を搾り出す。

「マナは流れ星に何を祈るの？」

マナは、夜空を見つめたままつぶやいた。

「いつまでも、こんな毎日が続きますようにって。カイルは？」

「僕は……」

カイルは空を見上げた。照れくさくてマナの顔を見ることができない。

「カイル？」

不思議そうに自分を覗き込むマナを、じっと見つめ返した。

「マナ、好きなんだ」

マナは驚いたようにカイルを見た。

「マナのことを思うと夜も眠れない。僕と付き合ってくれないかな？」

マナは頬を赤くした。

「嘘みたい」

「何が？」

「だって、カイルって誰にでも優しいんだもん。私こそよろしくお願いします」
カイルが差し出した手に、マナは自分の手を重ねた。

久しぶりに掲示板を見に行ったカイルは、マナの依頼を見つけた。恋人の依頼を無視するわけにはいかないだろう。掲示板に書かずに直接頼んでくれればいいのにと思うものの、こういうのもいいかなと思う。早速マナのところへ向かった。
「マナ、掲示板を見たよ」
「ふふっ、待ってたわ、カイル」
マナは嬉しそうに笑う。マナは、ブレシア島に生える四葉のクローバーを、採ってきて欲しいといった。

カイルは船を使って、ブレシア島に足を踏み入れた。ブレシア島は常夏の楽園である。ジリジリと照りつける太陽が憎いくらいだ。
腰の剣に手をかけて、島の様子をうかがう。剣を持った人型のモンスターがウロウロしていた。モンスターの強さはわからない。カイルは剣を構えた。モンスターを倒して、ゆっくりと探すとしよう。
カイルはモンスターの前に躍り出た。カイルに気付いたモンスターが近寄ってくる。モンスターの一撃を交わし、カイルは敵の懐に飛び込む。そして追い抜きざまに剣を振り下ろす。ギャーッという悲鳴と共に、モンスターは光になって飛んでいく。
でも、これで終わらなかったのだ。機械装置がうなり声を上げ、新たにモンスターが飛び出してきたのだ。カイルはこれも一撃でしとめたが、またもやモンスターは装置から湧いてくる。だめだ、あの装置を破壊しなければ終わらない。
カイルはモンスターの攻撃をかわしながら、装置に近づき破壊を試みた。数度、剣で叩き切ると、装置は爆発を起こした。
最後のモンスターを倒したカイルは、はあはあと肩で息をしてい

た。あの装置はいったいなんなのだ？　誰が何のために？　疑問は深まるばかりだったが、四葉のクローバーを探す事に専念した。目的の物はすぐに見つかり、カイルは家へ戻った。

家に帰ると、マナが夕食の用意をしていた。乱れたカイルの姿を見ると、マナはたいそう驚いて駆け寄ってきた。

「カイル、大丈夫？」

「何とかね、はい」

カイルは四葉のクローバーをマナに差し出した。マナはそれを受け取ると、ひどく恐縮した。

「ごめんなさい、危険な目に合わせて」

「いいんだ、マナのためだ」

「ありがとう」

マナは四葉のクローバーをハンカチに包むと、ポケットにしまった。

二人でテーブルを囲み、楽しく食事を始める。カイルはマナにたずねた。

「それ、どうするの？」

「あのね、カイルにお守りを作ろうと思って」

向かい側ではにかむように笑うマナを、愛おしく思うカイルだった。

十　恋のキューピッド

カイルはドロシーからの依頼のために、教会へ彼女を迎えにやって来た。セシリア同様、おとなしいドロシーが気がかりで、妹のように世話をしてきた。

以前、カイルはクエストでドロシーの悩みを聞いた。自分は人と話すのが苦手である。しかし、看護婦となって人のために尽くしたい。そのために手伝って欲しいというクエストだった。カイルはドロシーの夢を素晴らしいことだと褒め、協力することを伝えた。

それからカイルは何かとドロシーに関わってきた。その甲斐あってか、ドロシーはマルヴィレス抜きでもカイルと話すことが出来るようになっていた。

そして今回のクエストはドロシーとデートである。もちろんマナには事前にお許しをもらってのことだ。

ドロシーがマルヴィレスを大事そうに抱えて、部屋から出てきた。いつものように、大きなフードを被り、瞳は前髪で隠れている。

二人がセレッソ広場に向かって歩き出すと、自分たちの後をつけてくる者がいたのだ。ドロシーを引っ張って建物の陰に隠れると、つけてきた者が飛び出してきた。

「ははぁーん、なるほどね」

「どうかしましたか？」

自分を不思議そうに見るドロシーに、なんでもないよと答え、物陰から何食わぬ顔で出た。そして、セレッソの樹の下にドロシーを連れて行く。

「ドロシー、セレッソは好きかい？」

「ええ」

ドロシーは肯定すると、うつむいてモジモジしながら打ち明けて

くれた。
「カイルさんだけにお話ししますね。いつもこの樹の下に男の人居るでしょう？」
「バレットのこと？」
ドロシーは頬を赤らめてうなずいた。
「よく一緒にセレッソを眺めるんです。ただ、黙って隣にいてくれるだけなんですけど」
「彼のこと好きなんだね」
ドロシーは更に赤くなる。カイルはそんなドロシーを可愛らしく思った。いや、待てよ。このクエストは僕が引き受けないほうが良かったんじゃ……。カイルは背後にいる男の気持ちを思うと可哀相になった。
「告白してみる？」
ドロシーは首をブンブンと横に振る。ドロシーから告白は無理だよなと思う。それでは、男のほうにさせるか。カイルは背後の男をもう一度チラリと確認し、そっとドロシーの前髪をかきあげた。
「ドロシー、前髪をあげた方が可愛いよ」
「カ、カイルさん？」
前髪をどけると、ドロシーの愛くるしい瞳が見えた。突然の事に、その瞳は慌てふためいている。カイルはにっこり微笑むと、前髪に置いた手を、ゆっくり後頭部へ回す。
「ドロシー、髪に花びらがついている」
「え？」
そう言ってカイルがドロシーに覆いかぶさる。背後に居る男から見れば一連の動作は、ドロシーが嫌がっていて、それに構わずカイルが抱き寄せているように見えるだろう。カイルの思惑通り、背後から男が叫んだ。
「カイル、てめえ何しやがる！」
飛び出してきたのはバレットだった。カイルはドロシーの肩から手を離すと、何食わぬ顔で花びらをつまんだ。

「髪についていた花びらを取っただけだよ。僕がドロシーを襲うと思った？」
ドロシーはカイルとバレットを交互に見た。長い前髪の奥に困惑した瞳が見え隠れする。バレットはバツが悪そうに横を向いた。
「僕たちの後をつけてくるほど、ドロシーのことが気になるんだね」
「ち、ちがっ」
カイルの言葉にバレットは慌てて否定しようとするものの、ドロシーに言葉をさえぎられた。
「ほ、ほんと？」
ドロシーに見つめられて、バレットは言葉に詰まる。あの、ぶっきらぼうな男がこんなになるなんて信じられなかった。
「このクエストは彼に引き継いでもらおう、いいね？　ドロシー」
ドロシーは頬を真っ赤に染めて、マルヴィレスをぎゅっと抱きしめながら、コクリとうなずくとうつむいた。
「じゃあ、バレット、後を頼むよ。ドロシーを泣かせたら承知しないからね」
「お、俺は」
「素直になるんだね、バレット。僕がドロシーをさらってもいいわけ？」
「そ、それは！」
「じゃあ」
カイルは二人をおいて帰った。ドロシー、幸せになるんだよと祈りながら。

十一　カイルの運命

カイルがアルヴァーナに来て一年が経つ。カイルはマナとセレッソの樹の下にたたずんでいた。
「ねえ、カイル」
「何？」
「私の夢、聞いてくれる？」
カイルはマナの話を黙って聞いていた。マナは先生になりたいのだという。子供たちにいろいろなことを教えたいのだと。でも、アルヴァーナには学校がない。
「素晴らしい夢だね。マナ、僕にもその手伝いをさせてくれないか？」
「カイル？」
「いつか、学校を建ててみせる。マナと、僕たちの子供のために」
マナはくりくりとした瞳を更に大きくしてカイルを見つめた。カイルはにっこり微笑むと、マナの手を握り、ささやいた。
「マナ、僕と結婚して欲しい」
「はい」
マナの瞳から涙がつうっと流れた。カイルはマナを引き寄せ、そっと口づけを落とす。顔を赤くしたマナをしばらく見つめていたが、マナの表情が沈んでいくのが見えた。何を不安に思っているんだろうか、カイルはマナを抱きしめた。
「どうしたの？」
「父さんが許してくれるかしら……」
「これから二人で頼みに行こう」
カイルはマナの手を握り締めて歩き出した。

二人は、ダグラスに会いにアルヴァーナ病院へ向かった。この時間はナタリーと会っているからだ。病院に入り、二人並んでダグラ

スの前で頭を下げる。
「マナを僕に下さい」
「な、なにーっ！　ゆ、許さんぞ！」
今にもカイルに殴りかかりそうな父親の前に、マナは立ちはだかる。
「父さんやめて！　私はカイルを愛しているの。カイルと一緒に生きていくって決めたの」
マナの言葉に、ショックを隠しきれない様子のダグラスに、ナタリーが声をかけた。
「ダグラス、許してあげたら？　カイルはいい子よ」
「し、しかし、ナタリー」
「貴方がそんなことじゃ、マナは一生独身よ。それでもいいの？」
ダグラスはマナを見つめた。必死でカイルをかばう娘に胸を突かれた。この間まで、自分の後を追ってきたというのに……。ダグラスはマナをどけると、カイルに手を差し伸べた。
「カイル、マナは俺の宝物だ。大事にしてやってくれ」
「ありがとうございます。必ず幸せにします」
そして、カイルとマナは一週間後、皆に祝福されて結婚式を挙げた。

カイルは、スープの良い香りに、目を覚ました。きょろきょろと周りを見回すものの、新妻の姿は見えない。カイルはさっと着替えて、一階のキッチンへ向かった。
「あなた、おはよう！」
エプロン姿のマナが、はちきれんばかりの笑顔であいさつをしてくれた。
「おはよう、マナ」
「もうすぐご飯だから、顔を洗ってきてね」
「わかったよ」

カイルは毎日幸せだった。愛するマナがいて、牧場の経営も順調である。二人で、農作業をし、モンスターの世話をし、マナの作ってくれた愛妻弁当を持って、ダンジョンの農地の手入れをするのが日課だった。

今日は、メッシナの谷に作った農地の作業をしていた。ふと、谷奥を眺めると社が見える。

「懐かしいな」

そうカイルは思った。マナには内緒であるが、社へと続く石橋でセシリアに告白されたことがあったのだ。セシリアの依頼で大事な丸い石をそこへ取りに行った事がある。後日その場所へ呼び出されてプロポーズされたのだ。つつましいセシリアからは考えられないことだった。きっと、清水の舞台から飛び降りるぐらいの覚悟だったのだろう。当然マナのことを一番大事に思っていたカイルは、その申し込みを断わった。その後、セシリアはジェイクの求婚を受けて結婚した。

懐かしさのあまり、行ってみようと思い、農具を片付けて、社への道を登っていった。

「変わらないな」

石橋を渡り社へ近づく。昔は入ることが出来なかったが、今日は鍵が開いていて奥に進むことが出来た。好奇心も手伝って、カイルは中へ入る。社の中央まで来たときだった。空間がグニャリと歪み、カイルの心に直接語りかけてくる者がいた。

「カイル、待っていた」

「お前は誰だ？」

「ずっと待っていた。七年後、ここへ来るのだ」

「どうして？」

「それがカイルの運命だから」

「理由を教えてくれ！」

「アースマイトである、お前にしか出来ない事をするためだ。お前

が来なければ、アルヴァーナの町が焼け野原と化すだろう」
それだけ答えると、その声は消え、空間も元に戻った。いったい誰だ？　アルヴァーナの町が焼け野原と化すなんてどういう事だ？

家に戻ってもその事が頭から離れない。半信半疑ながらも、運命と言われてしまっては逆らう事もできない。七年後、いったい何が起こるのか。
帰ってから一言もしゃべらず、寝室に引き上げたカイルを心配して、マナが上がって来た。ベッドに腰掛けて、眉間にしわを寄せているカイルをうかがう。
「あなた、顔色が悪いわ」
マナが心配そうな顔をする。カイルは無理に笑顔を作り、仕事で疲れただけだと答え、マナを引き寄せ、抱きしめた。
「あなた？」
何だろう、胸に広がるこの不安は……。何も言わずに、自分を抱きしめるカイルが心配でならないマナだった。

十二　アースマイトの血をひく者

結婚して三ヶ月が過ぎた頃のことだった。いつもカイルより早く起きて、朝食の支度をしてくれるマナが、ベッドでふせっていた。心配したカイルは、マナの額に手を当てながら呼びかける。

「マナ、具合でも悪いのか？」

「ええ、だるくって」

「そう、今日は寝ておいで。適当に食べていくから心配ない」

「ごめんね」

カイルの顔を申し訳なさそうにうかがうマナ。カイルはそんな彼女の手を取る。

「そんな顔しないで」

彼女の手を布団に収めて、カイルは階下におりた。簡単に食事を済まし、マナのためにお粥を作り、マナの元へ戻る。

「マナ、お粥を作ったよ。食べて」

「ありがとう、あなた」

マナはベッドの上で体を起こした。カイルはお粥をサイドテーブルに置いた。そして、小鉢にお粥をよそい、少しサジに取り、ふうふうと冷ますと、マナの口に運んだ。

「はい、口を開けて」

マナが口をあけると、カイルはサジを入れた。モグモグと口を動かすマナを見つめるカイル。

「おいしい」

「そう。食欲があって良かった」

カイルはほっと胸を撫で下ろした。マナは小鉢一杯のお粥を食べた。カイルは食器を片付けながら、マナに話しかける。

「仕事が一段落終えたら戻るから」

マナはコクンとうなずいて、ベッドに横になった。

マナは翌日もふせっていた。心配したカイルは、具合の悪いマナを、アルヴァーナ病院へ連れて行った。
「先生、どうでしょうか？」
ナタリーはニコニコと笑いながら、マナとカイルを見た。
「おめでとう。パパ、ママ」
「え？」
「赤ちゃんを授かったのよ」
「ほんとに？」
「ええ」
ナタリーやドロシーが見ている前だというのに、カイルはマナを抱きしめた。
「マナ、ありがとう」
「あなた」
あきれた様子でナタリーはカイルに説教を始めた。妊婦に重いものは持たせない。食事は栄養のバランスを考えて採る事など。
「一番大事なのは、二人がお互いを思いあって生活する事」
「はい」
カイルはナタリーの言葉を胸に刻み、マナを大事そうに抱えて帰った。

＊＊＊

それから十月十日後、マナは女の子を産み落とした。自分と同じ赤い髪をしていた。カイルはその赤子を胸に抱いた。
「この子の名前はアリアだ」
マナはカイルと娘を見つめて、ニッコリと微笑んだ。
「アリア、いい名前ね」
「マナ、ありがとう。マナやアリアのためにも頑張るよ」
カイルはそれまでにも増して、仕事に打ち込んだ。愛する妻と娘

のために。その二年後、マナは二人目を宿した。生まれたのは男の子。アルスと名づけた。

「マナ」
「なあに？　あなた」
マナはアルスに乳をあげながら、聞き返した。
「学校の建設を町長に頼もうと思う」
「あなた、私との約束を覚えていてくれたのね」
カイルの話に、マナが顔をほころばせた。
「当たり前だろう？　あと三年後にはアリアは学校に上がる年だ。それまでに準備しなければ」
「資金は大丈夫？」
心配そうな顔をして、マナがカイルをうかがう。カイルはそんなマナに笑みを洩らした。
「貯金も資材も充分に用意した。マナは教師を引き受けてくれるんだろう？」
「もちろん。でも、私の教えられるのは、料理とアクセサリーの作り方だけよ」
「じゃあ、武器や防具の授業はバレットに頼んでみる」
「バレット？」
マナは不思議そうな顔をした。当然、カイルも教師をすると思っていたからだろう。
「ああ、彼はその筋のことには精通している」
マナは、それはいいわと賛成した。カイルがアルヴァーナを訪れた頃、バレットはひねくれもので、町の人々は手を焼いていたのだ。カイルがバレットのクエストをこなしながら、バレットの心も溶かしていった。そんなバレットも、今はドロシーと結婚している。それも全てカイルのおかげであることをマナは知っていた。

カイルは町長のブライに学校建設を直談判した。ブライはもろ手

を挙げて賛成してくれた。そして、カイルはその場にいたバレットに教師を引き受けてくれるように頼む。
「俺なんかより、お前がやればいいだろう？」
「バレット、君にしか頼めないんだ」
その頃、カイルは失われた記憶をかなり取り戻していた。何のためにアルヴァーナに留まることになったのかという事を。おぼろげながら、バレットに自分の宿命について語った。バレットは黙って聞いていた。
「お前はそれでいいのか？」
「それが運命なら仕方がない。僕は家族を、この町を守りたい」
バレットは、うつむき気味に腕を組んで考えていたが、カイルに視線を戻した。そして、カイルの瞳に宿る固い決意を感じ取った。
「わかった。その話、引き受けよう」
「ありがとう」
カイルは、無理な頼みを引き受けてくれたバレットに感謝をした。彼は、カイルの家族のことは任せろと言ってくれた。

＊＊＊

カイルは毎晩ベッドで、アリアにダンジョンに眠る石版や魔法書、赤き竜について、御伽噺のように話して聞かせた。アリアは、父の話を毎日楽しみに聞いていた。

――アルヴァーナの地下に、恐ろしい赤き竜がいました。赤き竜は火を吹き、暴れまわり、アルヴァーナの人々を困らせました。そこへアースマイトと呼ばれる人間がやって来ました。ノーラッド王国の王様に遣わされた人です。アース文字というアースマイトの文字があります。古代のアースマイトはアース文字の書かれた石盤から魔法書を作りました。その古代から伝わる魔法で、赤き竜を懲らしめ、封印しました。それからアルヴァーナの人々は幸せに暮らしま

した。しかし、その封印は千年しかもちません。千年後、アルヴァーナに再びアースマイトが現れるのです――

「パパはアースマイトなの？」
「そうだよ。パパの子供のアリアもアルスもアースマイトだよ」
「パパ、私にも魔法が使えるの？」
「ああ、パパの子だからね。でも、むやみに他人の前で使ってはいけないよ」
　アリアは不思議そうな顔をした。お友達に見せたら、自慢できるのに。
「どうして？」
「危ないからだよ」
　カイルは穏やかに諭した。やはり、人と違う能力はひけらかすものではない。偏見と差別の目で見られるからだ。
「ねえ、明日はエスケープを教えてね」
「そうだね、明日はエスケープの練習をしよう。今日はもうおやすみ」
「おやすみなさい、パパ」
　父と約束をしたアリアは目を閉じた。カイルがアリアの頭を撫ぜていると、五分も経たないうちに、アリアは夢の国へ羽ばたいた。
　笑みを浮かべながら眠るアリアに、この子はどんな夢を見ているのだろうと思う。自分と同じ過酷な人生が待ち受けているかも知れない娘を想い、カイルは胸を痛めた。女性として、人並みの幸せをつかんで欲しい。カイルはアリアの寝顔を眺めながらそう願う。
　そのために自分が宿命を成し遂げたい。しかし、竜を封印する魔法書が見つかっていない。ひょっとしたら失敗するかもしれない。でも、期限はそこまで来ている。逃げ出すわけには行かない。やるだけのことをやるしかないのだ。
　万が一のときは子供たちに託すしかなくなる。アースマイトの血は、二人の子供に受け継がれた。子供たちが、アースマイトとして

目覚めるまで、竜を押さえ込まなければならないだろう。命を捨てる覚悟は出来ている。

気がかりなのは、愛するマナのことだった。寂しがりやの彼女を置いて行く事は心残りでもある。否、彼女には、自分の血を分けた子供たちがいる。何も心配することはない。カイルは自分にそう言い聞かせた。

その三年後、カイルは家族に理由を語らずに姿を消した。アリア七歳、アルス四歳のときだった。

第一章　完

十二　アースマイトの血をひく者（後書き）

第一章　終わりました。
次回、アリアが主人公になります。よろしかったらまた読んでやってください。

十三　危険な遊び

アリアは幼い頃、ダンジョンの畑の世話をしに行く父についていった。父はモンスターを倒し、安全を確認すると、アリアを呼び寄せてくれた。

父が畑仕事などをする間、アリアは小川で水遊びをしたり、花を摘んだり、虫を採ったりして遊んだ。そして、飽きると父の傍らへ行き、服の裾をつんつんと引っ張りながら、遊ぼうとお願いをする。父はふんわりと笑い、ここの収穫が終わったらねと言う。すると、アリアは早く遊んで欲しくて、お手伝いを始めるのだ。トリエステの森は春の気候で、父は、母の好きなサクラカブやキャベツ、タマネギ、アリアの好きなイチゴを育てている。

アリアは真っ先にイチゴを摘んだ。そして、小川で洗うと、パクッと食べた。甘酸っぱくておいしい。にんまりとするアリアを見ながら、父は収穫を続ける。アリアがまたイチゴを摘みだした。今度は父の持ってきた籠に、イチゴを摘んではつぶれないように、そっと入れる。

アリアがイチゴを摘み終わる頃、父も仕事を終えた。二人で母の作ってくれたおやつを食べると、アリアは立ち上がり、父の腕を引っ張って、遊びを催促する。

遊びといっても、魔法の練習である。

「パパ、こう？」

アリアは父がやって見せたように、必死に胸の前で手をぐっと握り、気を集中させる。赤い顔をしてうーんとうなっている娘の様子に、父は微笑んだ。

「そうだよ。気がたまったと思ったら、あの木に向かって手を突き出し、ファイアーボールと唱えてごらん」

「うん」

アリアは集中した。目を閉じて、ぐっと手を握りこむ。そして、

目を開けると、標的に向かって手を突き出し、呪文を唱えた。すると、アリアの小さな手から、ポンっと火の玉が出た。そしてそれは一瞬で消えた。
「あれ？　パパみたいなのが出ないよ。おかしいなあ」
「毎日練習すれば、できるようになるよ」
そう言って、父はアリアの頭を撫ぜる。ひとしきり練習していたが、日が暮れて、辺りが赤く染まってくる。
「さあ、今日は帰ろう。ママとアルスが待っている」
「うん」
アリアは父に手を引かれながら、トリエステの森を後にした。

＊＊＊

父がいなくなった後も、アリアのダンジョン通いは続いていた。父の残した荷物の中から、片手剣を取り出して、母に見つからないようにこっそりと出かける。
そして、父がしたように、アリアもモンスターを倒し、畑仕事をする。母の好きなサクラカブ、自分の好きなイチゴ、キャベツ、タマネギ。収穫をし、水やりをし、草取りする。
仕事が終わると、小川の水でイチゴを洗い、口に入れた。あの頃のように甘酸っぱかった。でも、もうそんなアリアに微笑みかけてくれる父はいない。
「パパ……、どこに行っちゃったの？」
涙でかすむ視界の向こうに幻の父が見える。母は毎晩寝床で、声を押し殺して泣いている。小さなアルスも、時折、パパはどうして帰ってこないのとアリアにたずねてくる。
あの嵐の夜のことを、アリアは忘れない。
夜中、トイレに起きたアリアは、父が出かけるのに出くわした。
「パパ、どこに行くの？」

父はいつものように、にっこり笑うと、近寄ってきたアリアの頭を撫ぜた。
「お仕事だよ」
「雨、いっぱい降っているよ？　お外、真っ暗だよ？」
父は困った顔をした。しかし、またにっこり笑った。
「行ってきます。アリア、ママとアルスを頼んだよ」
「いってらっしゃい」
その日を境に、父は帰ってこなかったのだ。

＊＊＊

「ママ、早く、早く！」
「はいはい、さあ、アルス、カバンを背負って」
「はあい、ママ」
マナはアルスに支度を促がしている。アリアは玄関を出た。今日も快晴である。目の前に広がる畑には、先ほどアリアとアルスが水やりをしたせいか、作物の葉が水のしずくでキラキラと光っている。その奥に広がる牧草は、春になって生え始めたばかりで、まるで坊主頭のようだ。
三人は学校へ行くところである。カイルが失踪してから、三年が経っていた。アリアは十歳で、アルスは七歳、マナは学校で教師をしている。学校はカイルが建てたものだ。そこで、アリアたちは学んでいる。

学校の敷地に足を踏み入れると、薄紅色の花びらが舞っている。そんな中を三人は手をつないで歩いた。校舎に入ると、マナは職員室へ向かい、アリアとアルスは教室へ入った。すると、いつもの面々が迎えてくれた。
「おはよう！」
「おはよう。きゃあ！　アルス、今日も可愛いわね」

そう言って、アルスに抱きついているのは、教会の娘のカノン。桃色の髪を両サイドで高く結い上げている勝気な女の子。そこへもう一人飛び込んできた。

「セーフ！　間に合ったー！」

「ロイ、遅い！」

カノンはアルスを離すと、そばに来たロイのおでこを突っついた。ロイは鍛冶屋のターニャの息子で、じっとしているより活発に動くタイプである。くせのある緑色の髪に、いたずらっ子を思わせるくりっとした目が印象的である。カノンとロイは父のカイルを知っている。時々、二人からカイルの話が聞けるのを、アルスはとても楽しみにしている。アルスが物心つく前にカイルは失踪したので、彼には父親の記憶がない。

アリアはチョコチョコとロイに近づいて、服の裾を引っ張った。

「ロイ、おはよう」

「おはよう、アリア」

ロイは、アリアの頭をポンポンと叩いた。髪形が崩れるじゃない、と頭を押さえたアリアは、ロイを見上げた。ロイはニッと笑い、アリアのくせに生意気、と言って席に着いた。

アリアが席に向かって歩き出すと、バレットの息子のリーンが声をかけてきた。リーンは男の子ではあるが、バレットに似ず、母のドロシーに似た、とても可愛らしい天使のような雰囲気の男の子である。唯一バレットに似ているのは碧く澄んだ瞳であろうか。

「おはよう、アリア。今日も遊ぼうね」

愛くるしい子犬のように、自分を見つめてくるリーンに、アリアは困惑する。男の子のくせに可愛すぎる……。

うん、と返事をしたアリアは席に着き、隣の席の子にあいさつした。

「おはよう、オルファス」

「おはよう」

オルファスはアリアをチラリと見て、ぶっきらぼうにあいさつを

返した。オルファスはセシリアとジェイクの息子で、アリアと同い年である。金色の髪はストレートで、碧く澄んだ瞳は鋭く、いつもむすっとしている。
アリアとオルファスは小さい頃から一緒だった。母親同士の仲が良いので、必然的に良く遊んだ。それなので、クールな雰囲気を漂わせ、高飛車だと誤解されがちなオルファスをアリアは理解しているつもりである。
そしてカイルが失踪してからは、バレットがアリアたちの面倒を何かと見てくれた。その頃から、一つ年下のリーンとも一緒に遊んだ。三人はいつも一緒だった。

マナが教室に入ってきた。
「さあ、授業を始めます。席について」
みんな、バタバタと席についた。今日の授業は料理だ。アリアが得意な科目である。仕事で忙しいマナの代わりに、おやつや食事などを作る。もっぱら、アリアが幼い頃から、マナが教え込んだおかげではあるが。
マナが背を向けて板書している間に、生徒たちの間でメモが回る。アリアの元にも回ってきた。

――　放課後、トリエステの森の入り口に集合　――

いつものダンジョン巡りである。親たちにダンジョンへ近づくなと言われているので、もちろん子供たちだけの秘密である。オルファスに、アルスはどうする？　と聞かれたアリアはカノンを見た。彼女はウィンクを返してきた。アルスが入学してからは、カノンが教会で面倒を見てくれている。さすがに、アルスを連れて行く気にはなれなかった。アリアの中では、泣き虫アルスである。
オルファスに小声で大丈夫と告げると、彼はゆっくりうなずいた。

＊＊＊

そもそも、どうして親たちに禁止されているダンジョンが遊び場になってしまったかというと、事の発端はアリアのダンジョン通いだった。

ある日のこと、トリエステの森に入るところをオルファスに見られてしまったのである。

「アリア、昨日森に入って行っただろう？」

「えっ！？」

「しらばっくれてもだめだ。見たんだから」

オルファスの射るような視線にアリアは凍りついた。

「お願い！　ママには内緒にして！」

オルファスは腕を組み、手を合わせて懇願するアリアを見下ろした。

「俺も連れて行ってくれるなら、内緒にしてやる」

かくして、トリエステの森は二人の遊び場になった。そのうち、よく遊んでいたリーンやロイにも知られることになり、ダンジョンが遊び場になってしまったのだった。

放課後、トリエステの森の入り口に集まったのは、アリア、オルファス、リーン、ロイの四人だった。今日は二人組で、トリエステの森のモンスターを倒して、安い布を採ってくるゲームである。四人はジャンケンをした。アリアとリーン、オルファスとロイの組み合わせだ。

「じゃあ、タイムを計るからね。よーい、どん！」

リーンの掛け声と同時にオルファスとロイがトリエステの森に入っていった。

「今日はタイムが縮まるかな？」

「どうだろう？　ロイがモンスターを相手にしなきゃ早いと思うけ

ど」
　アリアは森を見ながら、リーンの問いに答えた。ロイは鍛冶屋の息子だけあって、武器を触る機会があるせいか、とても手馴れている。なんと言っても七つ上なので、アリアたちより剣術ははるかに上手い。オルファスはというと大変な努力家で、剣術もそこそこできる。
　どれくらいたっただろうか？　オルファスが安い布を手に一人で戻ってきた。
「ロイは？」
「まだ、モンスターと戦っている。いくら言っても聞かないから置いてきた」
　やっぱり戦いに夢中になっているようである。オルファスに促がされて、アリアとリーンも安い布を採りに森へ入って行った。

＊＊＊

　森に入り、アリアとリーンは、丸い大きなリンゴのようなモンスターを交わしながら奥へ進んだ。イジエスの滝で、リーンはこの場のモンスターを引き受けるから、安い布を採って来て、とアリアに要求した。アリアはうなずいて更に奥に進む。そこでは、ロイとハンマーを持った猿人様のモンスターが戦っていた。アリアはその隙に安い布を拾った。ロイがモンスターを倒し続けているおかげで、そこらじゅうに安い布が落ちているのである。そして大きな声でロイに声をかける。
「ねえ、ロイ。いいかげんにしようよ」
「いいから、アリアは先に帰ってろ」
　アリアはため息をつきながら、ロイの戦いを眺めた。さすがに戦い方にそつがない。何をそんなに自分を追い詰めているのかしら？
　アリアにとっては疑問だった。私みたいに、ロイには戦う意味があるのだろうか？　アリアはハンマー取り出して、機械装置に思い

っきり振り下ろした。機械装置は煙を吹いて停止した
「あ、アリア！」
ロイはそう叫ぶと、モンスターを倒し近寄ってきた。ロイは大きい。十歳のアリアから見れば立派なお兄さんである。アルヴァーナに学校が出来たのは、ロイとカノンが十四歳のときである。年上ではあるが、アリアたちと一緒に入学したのだった。
アリアはロイの服の端っこをつかんで、首が痛くなるほど見上げた。
「だって、ロイ、帰ろうとしないんだもん」
自分をじっと見上げるアリアの言葉に、ロイはニコリと笑い、アリアの髪をクシャクシャと撫ぜた。
「もう、やめてよぉ！」
それには構わず、ロイはアリアの手をつかみ、草木が迎える道を後にした。イジエスの滝の前では、リーンが矢を構えた猿人様のモンスターを相手に戦っていた。ロイは機械装置に近づくと、剣で一刀両断にした。
「ふう、助かった。ありがとう」
リーンはロイを見上げて礼を述べた。
「アリア、安い布は？」
「ちゃんと採ってきたよ」
アリアは安い布をリーンに見せた。リーンは満足げにうなずくと、ロイからアリアの手を奪い、走り出した。
「アリア、タイム！」
「う、うん」
二人は走り出す。ロイは、くすっと笑みを洩らした。
「オルファス、タイムは？」
「俺たちの勝ちだ」
「えー！？」
どうも、アリアがロイの戦いを観戦していたのがいけなかったら

しい。
「アリア、ロイの戦いに見入っていたんでしょ？」
「うっ、リーン……」
図星であったために、アリアは返す言葉がなかった。リーンは肩をすくめると、ロイに向かって頼み込んだ。
「ねえ、ロイ。今度は武道場で剣術を教えてよ」
「いいよ」
「あ、俺も」
オルファスもその話に乗った。
「もちろん、アリアも来るよね？」
リーンに問われたアリアは、しどろもどろになりながらうなずいた。

十四　立派なお兄ちゃん育成計画、再び

四人は教会に向かう。教会では、カノンとアルスが迎えてくれた。アルスはアリアを見つけると、駆け寄って抱きついた。それを横目で見ながら、やはり実の姉には適わないわねと、カノンは首をすくめた。そして、三人に問いかける。

「今日はどうだったの？」

「ロイとオルファスの勝ちだよ」

リーンがそう答えると、カノンはふうんと返事をした。いつもどおりの結果で、なんの感慨もおこらないのであろう。まあ、七つ上のロイが負けるわけはないのだが、年下相手に何をむきになっているのかしらと思ったりもする。

「じゃあ、また明日」

オルファスとリーンは連れ立って歩いていき、アリアはアルスと手をつないで帰ろうとした。

「ロイは帰る？」

「カノンと話してから帰るよ」

ロイは後ろ手を振って答えた。

「ねえ、何か食べる物ない？　俺、腹減っちゃったよ」

カノンは、ロイの話を聞いて、家へ上がるように勧めた。カノンの家は教会である。礼拝堂の奥の階段を昇ると、カノンたち家族の居室がある。

カノンは冷凍庫からアイスクリームを取り出すと、ダイニングテーブルへ配膳し、ロイに勧めた。いただきますと手を合わせ、行儀良く食べ始めたロイを、向かい側に座るカノンが頬杖をつきながら眺める。

「ロイって、ほんとにアイスクリーム好きね」

「俺の好みをわかってくれるカノンも好きだよ」
ロイは、歯の浮くようなセリフをさらっと言いのけた。カノンは慣れているようで、どうもと返した。
「おっ、ロイ、来ていたか」
自室でアクセサリーを作っていたカノンの父ゴードンが、二人の声を聞きつけて、ダイニングに顔を出した。身体はがっしりとして大きく右目に刀傷のあるゴードンが、牧師というのも似合わないし、ゴードンからカノンみたいな可愛い娘が生まれてきたのが不思議でもある。
お邪魔してますと、軽く会釈したロイはなおもアイスクリームを食べ続ける。
「俺の目の届くところで、カノンを口説くとはいい度胸だな」
「やだなあ、おじさん。社交辞令ですよ」
ロイは、鼻の下をこすりながら笑った。こんなことを言うゴードンだが、ロイのことは気に入っている。学校には通っているものの、母親を助けて家業の鍛冶屋の手伝いもしているのだ。そして、この少年の物怖じしないところもお気に入りだ。
「夕食も食べていけ。終わったら、一緒に銭湯へ行くか」
「いいですよ」
ロイはゴードンの言葉に素直に同意する。父親のいないロイはゴードンを父のように慕っている。幼いときから、悪いことをすれば厳しく叱られ、良いことをすれば褒めてくれる。母しか知らぬロイは、女である母親に相談できないことも、ゴードンには相談している。

三人は夕食を終えると、銭湯へ繰り出した。ロイとゴードンはずんずんと男湯へ入っていく。それを見ていた番台のジュリアがつぶやいた。ジュリアは銭湯を経営する女性である。人当たりがよく、ゴスロリの服に身を包んだファッショナブルな彼女は町のアイドルでもある。

「ゴードンさんとロイって実の親子みたいなのねん」
「そうだね」
気のない返事をするカノンに、ジュリアはかねてから頼んでいた事を再度たずねた。
「ねえ、カノン。ここを引き受けてくれる気になった？」
カノンはジュリアから、銭湯を引き継いでくれないかと頼まれている。ジュリアは同じ学校に通うラムリアの母で、金持ちのマックスの妻でもある。結婚を機に銭湯経営をやめようとしたのだが、後任が見つからないので、いまだに番台に座っている。
「いいよ。学校を卒業してからでいい？」
「ええ、それまでは見習いってことで、時々手伝いに来てくれればいいのねん」
「わかったよ」
ジュリアは、ごゆっくりとカノンを送り出す。
カノンは脱衣所へ行き、着ているものを脱ぐと、浴室へ入った。中には誰もいない。身体を洗い、湯船に浸かる。
（あー、気持ちいい）
静かにしていると、男湯の方から、父とロイの話し声が聞こえてくる。
「なあ、ロイ。俺の息子にならないか？」
「息子ですか？　どうしようかなー」
カノンは聞き耳を立てる。あんなに歯の浮くようなセリフを言ってくるくせに、どうしようかなですって？
「カノンって、俺のことただの幼馴染にしか思ってないみたいで」
「お前たち、まだそんな段階なのか？」
「まあ……」
カノンはロイの言葉を聞いてずぶずぶと湯船に沈んだ。ただの幼馴染の関係を保っているのはロイの方じゃない。私、告白されたことなんてないわよ。それに、パパもパパよ。私が隣にいるのを知っていてあんな話をするなんて。カノンは心の中で二人に悪態をつい

た。

＊＊＊

ロイと別れたアリアとアルスは、アルヴァーナの町を、手をつないで歩いていた。太陽は随分低い位置にある。そのせいか進行方向は、何もかも茜色のまぶしい光に包み込まれ、よく見えない。

「カノンと何して遊んだの？」

アリアの問いに、アルスは口をとがらせた。

「お姉ちゃん、僕は遊んでないよ」

「じゃあ、何していたの？」

アリアがアルスの顔を覗き込むと、アルスは鼻を高くして誇らしげに答えた。

「あのね、立派なお兄ちゃん育成計画」

「何、それ？」

アリアは、聞いた事のない言葉にきょとんとした。

「あのね、昔、カノンがパパにしてもらったクエストなんだって」

「へえー、そうなんだ。それで、どんなクエスト？」

アルスの説明によると、カノンの言うとおりにシャドウボクシングをしたり、ジャンケンをしたりすることらしい。アルスが喜んでいるという事は遊びなのだろう。パパも、いい様にカノンに振り回されていたんだなと思うと、アリアはおかしくなった。

「お姉ちゃんたちは？」

「うん、剣術の稽古よ」

「僕もお稽古したいな」

うらやましそうに自分を見つめるアルスの頭をそっと撫ぜてやり、もう少し大きくなったらねと言った。すると、アルスはつまらなさそうな顔をしたが、何かひらめいたらしく、ニコニコしながらおねだりした。

「お姉ちゃん、今夜もパパのお話聞かせてね」

「アースマイトのお話ね」
「うん！　僕、あのお話好きなんだ」
目を輝かせてねだるアルスに、アリアは微笑んだ。私もパパにお話をせがんだっけ。
「帰ったら、魔法の練習しようか」
「やった！　僕、頑張る」
アルスはキラキラと瞳を輝かせた。
赤く染まる空を見上げながら、アリアは父とともに魔法を練習したことを思い出す。そして、行方のわからない父を案じた。

その頃、オルファスはリーンにつかまって帰れないでいた。
「ねえ、オルファス、アリアってロイのことが好きなのかな？」
「そんなの知るか、アリアに聞いてみればいいだろ？」
「聞けないから、オルファスに相談しているんじゃない」
オルファスはそんなリーンをチラリと見た。黙っていると、まるで女の子だ。だからアリアみたいな、はねっかえりが気になるんだなと思った。まあ、他人のことは言えないのだが。そんなリーンがいじらしいなと思い慰めた。
「剣術に優れているから憧れているんだろ？　ロイはカノンって彼女がいるんだし」
「そ、そうだよね？　ありがとう、オルファス。僕、元気が出てきたよ。じゃあね」
リーンは先ほど落ち込んでいた事を忘れたように、足取りも軽く走っていった。そんなリーンの後姿を眺めながら、やれやれと思うオルファスだった。

＊＊＊

もうすぐマナの誕生日である。アリアとアルスは相談して、プレゼントを贈る事にした。マナの大好きな焼き芋に決めて、お小遣い

を握り締め、流しの商人のユエに会いに行った。
　ユエは船着場で商売をしている。日本という国の着物をミニ仕立てにして、ニーソックスに下駄履きである。腰までありそうな髪には大きな花のかんざしを挿し、ソロバンという東洋の計算機をジャラジャラと左右に振っていた。
「あら、アリアにアルスじゃない。大きくなったなあ」
　ユエは目を細めて、二人を見つめた。ほんとに、カイルに似てきたなと思う。父親がいなくなったというのに、母親を助けてよく頑張っていると感心していたのだ。
「あの、焼き芋っていくらですか？」
「マナの誕生日プレゼント？　カイルはんもマナの誕生日には贈っとったなあ。焼き芋は１８２０Ｇや」
「１８２０……」
「どうした？」
　アリアは首をブンブンと横に振り、また来ますと言ってアルスの手をつかみ駆け出した。ユエはその様子を見て、子供には大金だろうなと少し気の毒に思ったが、甘やかしては二人のためにならないと思い、そのまま見送った。

　アリアとアルスは、何とはなしに歩きながら話し合う。アルスがアリアを見上げた。
「お姉ちゃん、どうする？」
「そうねえ……」
　その時、広場の掲示板が目に入った。アリアはアルスの手を引いて掲示板の前に立ち、依頼を書き始めた。

――報酬に焼き芋をくれる依頼をお願いします――

「これでよし。アルス、帰ってママのお手伝いしよう」
「うん」

二人は手をつないで仲良く帰っていった。

＊＊＊

月曜日、マナとアリアとアルスは仲良く登校した。今日の放課後は、武道場でロイから剣術を教えてもらう約束をしているせいか、アリアは朝から落ち着かない。いつものように、アルスはカノンがみてくれる。

放課後、アリア、ロイ、オルファス、リーンの四人は武道場へ集まった。そこへ、バレットが現れた。

「お前たち、何している？」

「ロイに剣術を教えてもらおうと思って」

そう、アリアが話すと、バレットはうなずきながら、アリアの頭をなぜた。

「熱心なのはいいが、武道場を使うときは俺に言え」

「どうしてですか？」

「ここは、鍛錬のためにモンスターを償還する事が出来る。ロイは知っているはずだが？」

ロイは苦笑いを浮かべながら頭をかいた。

「不測の事態が起こってからでは遅いからな。実際に見せてやろう。ロイ、いけるか？」

「はい」

ロイはそう答えると、道場の壁にかけてある槍を手に取った。アリアたちはバレットに促がされて、武道場の隅に移動する。バレットが償還機のスイッチを入れると、モンスターが飛び出してきた。ロイは槍を正面に構え、間合いを取る。そして、モンスターを一瞬先んじて連続突きを繰り出した。モンスターは反撃する暇もなく倒されてしまった。

「すごい！」

アリアたちが拍手を送るが、ロイは槍を捨てて剣を構えた。バレ

ットもアリアたちを手で制する。償還機からまたモンスターが現れたのだ。結局、全部で五体のモンスターが現れ、ロイは全て撃破したのだった。ロイが剣を収めたのを見届けると、アリアたちはロイに駆け寄った。

「すごいね」

興奮気味の三人をよそに、ロイとバレットは冷めていた。

「一撃入れた後が甘いぞ」

「やっぱりですか？　頑張ったんだけどなー」

そう言って頭をかくロイに、三人は不思議に思った。するとバレットが三人に向かって諭した。

「ここでのケガは致命傷になりかねない。充分に修練した後に挑むように。ロイも、初心者をこんな所へ連れてくるんじゃない」

「はい」

バレットが出て行ったあと、ロイに促がされて外へ出た。

校庭でロイの指導が始まる。まずは素振りだった。三人はそれぞれに振り始めた。ロイが順番に各人について、細かく指導している。次はアリアの番だ。ロイは他の二人同様に手取り足取り教えてくれる。我流で剣を振るっていたアリアは、目からうろこが落ちる思いだった。

「アリア、剣の握りがおかしい」

「そう？」

ロイはアリアから剣を取り上げると、横に並んでアリアの目線まで下がって、剣を握って見せた。いつも見上げているロイの顔が近くにある。アリアは顔を赤らめてしまった。それに気付いたロイが心配そうな顔をした。

「アリア、具合でも悪いのか？」

「う、ううん、大丈夫。暑いだけ」

アリアは首をブンブンと横に振った。ロイはそうかと言い、アリアに剣を返す。そんな二人を、リーンとオルファスはおもしろくな

さそうに見ていた。

＊＊＊

朝、ドアをノックする音がした。こんなに朝早く誰かしらと思いながら、マナがドアを開けると、立っていたのはセシリアだった。

「あら、セシリア、おはよう」

「マナ、おはよう。アリアはいるかしら？」

「ええ。アリア！　お客さまよ」

マナに呼ばれたアリアが出て行くと、セシリアはニコッと微笑んだ。

「いつも、オルファスと仲良くしてくれてありがとう。ちょっとお願いがあるの。お外で話しましょう」

アリアはセシリアについていく。牧場の入り口のところで、セシリアは立ち止まり振り返った。

「掲示板を見たわ。マナに知られたくないんでしょう？」

「はい」

さすが、母の親友である。彼女の誕生日を知っていて、アリアに声をかけてくれたのだ。

「トリエステの森から、リンゴを採ってきて欲しいの」

「はい！」

「じゃあ、お願いね」

そう言うと、セシリアは帰って行った。アリアは家に戻ると、二階でまだ眠っているアルスを揺さぶった。

「アルス、アルス！」

「なに、お姉ちゃん」

アルスは眠い目をこすりながら、からだを起こす。

「依頼が来たよ。今日の放課後、トリエステの森に行こう」

「ぼ、僕も行っていいの？」

「今回だけ特別ね。なんてったってママのプレゼントのためだもん」

「うん！」
二人はいつもの用具に武器を忍ばせて登校した。

十五　初めてのクエスト

学校に着いて、いつものようにみんなにあいさつし席につく。
「おはよう、オルファス」
「おはよう、アリア。放課後、森に行くのか？」
オルファスはきっと、セシリアから話を聞いているのだろう。アリアは、リュックから筆記用具と教科書などを出し、机の引き出しに収めながら答えた。
「うん、アルスと一緒に行ってくる」
オルファスはたいそう驚いたようで、頬杖をついていた手をズルっと滑らせた。
「アルスも連れて行くのか？　剣も振るえないのに？」
アリアは一瞬困ったように眉根を寄せたが、すぐニッコリと微笑んだ。
「目的が目的だから、アルスも一緒じゃないと可哀相でしょ？」
アリアの言葉に、オルファスはあきれた様子だった。もし、何かあったらどうするんだろう。親たちに見つかったら大事だぞと心配した。
「仕方ないな、俺も付き合う」
「やった！　きっとそう言ってくれると思ってた」
アリアは胸の前で手を合わせ、期待のこもった瞳でオルファスを見つめた。オルファスは首を横に振り、降参とばかりに手を上に挙げた。
「お前なあ……。いいよ、母さんから、付き合ってやれって頼まれているんだ」
「ありがとう、助かるよ」
アリアはホッとした。実際、アルスを誘ったものの、戦えない彼を抱えながら、リンゴを採ってこられるか心配だった。でも、オルファスならきっと付き合ってくれるだろうと思っていたのだ。

放課後、三人でトリエステの森へ向かうと、その入り口には、ロイとリーンが立っていた。三人を見つけると、近寄ってくる。
「アリア、僕たちに黙っているなんてひどいよ」
リーンが口をとがらせた。口をとがらせたって、全然迫力がない。余計可愛らしいだけだ。ほんとに、男の子のくせに可愛すぎる。
「そういうおもしろい事は誘ってよ」
ロイはそう言うと、アリアにウィンクした。どうやらアルスが二人に話したらしい。アリアは嬉しかった。ロイがいれば大丈夫だ。
「ありがとう、二人とも」
頬を赤く染めて喜ぶアリアを、横目で見ていたオルファスはおもしろくなさそうだった。

春香る広場を五人で駆け抜ける。イジェスの滝を抜けるときは、リーンがモンスターを引き受けてくれた。四人で草木が迎える道に入る。機械装置から猿人と植物様のモンスターが飛び出してきた。猿人はロイが、植物様のモンスターはオルファスが引き受けてくれた。アリアはアルスの手をつかみ、草を掻き分け、右手の奥のリンゴの木に近寄った。そしてリンゴを採ると、アルスのリュックに入れてやった。二人が戦っている場所まで戻り声をかけた
「ロイ、オルファス、採ったよ」
ロイが剣を振るいながら、オルファスに言い放つ。
「ここは引き受けるから、アリアたちを連れて森を出ろ」
「わかった」
オルファスは近寄ってきたモンスターを倒すと、アリアとアルスに目配せして進みだす。アリアたちはオルファスを追った。イジエスの滝で戦っていたリーンに声をかけ、三人は走り抜ける。

やっと、森を出た。四人はハアハアと息を切らせている。オルファスはアルスの頭を撫ぜた。

「よく頑張ったな」
「ほんと、小さいのにえらいよね」
アルスはオルファスとリーンに褒められて、余程嬉しかったのか、満面の笑みを浮かべている。彼の初ダンジョンは良い思い出となりそうで、アリアはホッとした。
「ロイはどうする？」
「じきに出てくるさ。ここで待っていよう」
四人は地べたに座り込んだ。
アリアたちが充分にからだを休めた頃、ロイが出てきた。アリアはロイに駆け寄り、彼の服をつかんで見上げた。
「大丈夫だった？」
ロイはアリアの頭をポンと叩くと、口の端をにっと上げた。
「もちろん。遅くなって悪かった。剣を鍛えるための材料を調達してたんだ」
ロイは座っていた三人の元へ行く。アリアも後を追った。そしてアルスを立ち上がらせて、二人で三人にお礼を述べた。
「みんなのおかげでリンゴを採ってくる事が出来ました。ありがとう」
三人は照れくさそうに笑った。

＊＊＊

ロイと別れて、四人はオルファスの家に向かう。
「じゃあ、僕はこれで」
「リーン、また明日ね」
「またね」
リーンは家に向かって走っていった。
「さあ、行くぞ」
オルファスに促がされて、アリアとアルスも後について行った。
しかし、セシリアはまだヘリチャコス邸から帰っていなかった。オ

ルファスの祖父のエンドールに勧められて、二人はセシリアを待つことにした。
　エンドールがケーキとお茶を持ってきてくれた。それはとてもおいしくて、アリアは思わずレシピを聞いた。エンドールは笑いながら、教えてあげるからいつでもおいでと声をかける。アリアは素直に、お願いしますと返事をした。それを聞いたオルファスの口の端が上がった。アリアが料理を習いにうちに来る。彼にとって、それは喜ばしいことだった。エンドールはそんな孫の嬉しそうな姿を見て微笑んだ。

　おやつを食べ終わった頃、セシリアが帰ってきた。
「アリア、アルス、いらっしゃい。オルファス、おかえり」
　そう言って、セシリアはオルファスを抱きしめる。オルファスは恥ずかしそうに抵抗した。
「母さん、やめてよ」
　セシリアはオルファスから離れると、アリアとアルスに向き直った。アルスはリュックから大事にリンゴを取り出した。
「あの、依頼のリンゴです」
「まあ、早かったわね。ありがとう」
　セシリアはリンゴを受け取ると、ニッコリ笑った。
「じゃあ、マナの誕生日の前日に取りに来てね」
「ありがとうございます」
　アリアとアルスは、ぺこりと頭を下げて帰ろうとしたところを、セシリアに声をかけられた。
「明日の放課後、ここに寄ってちょうだい。アップルパイをご馳走するわ」
「アップルパイ？」
　アルスが身を乗り出して反応した。
「ええ、食べにきてね。ジェイクもオルファスも甘いおやつがあんまり好きじゃなくてね。でも、作りたいのよ」

「喜んでうかがいます！」
アリアとアルスは元気に返事をすると、帰って行った。

「オルファス、明日アリアとアルスを連れてきてね。他のお友達を連れてきてもいいわよ」
「わかった」
オルファスはそっけなく返事をすると、自分の部屋に引きこもった。
「オルファスったら」
「まあ、思春期だから仕方ないさ」
「そうですね、お父さん」
エンドールに言われて、セシリアはオルファスの部屋の方を見て微笑んだ。

十六　セシリアのアップルパイ

翌夕、オルファスはアリアとアルスとリーンを連れて帰って来た。ロイも誘ったが、用事があるらしく断られた。大方カノンのところで遊んでいるのだろう。

「ただいま」

「おかえりなさい」

セシリアはオルファスを抱きしめた。

「やめてよ」

セシリアはクスクスと笑いながら、照れるオルファスを離すと、アリアたちに声をかけた。

「いらっしゃい。さあ、手を洗ってきてね」

アリアたちは返事をして、オルファスに続いて洗面所で手を洗い、テーブルに着く。

セシリアがアップルパイを切り分けて出してくれた。ホイップした白い生クリームが添えられている。

「おいしそう！」

「さあ、召し上がれ」

「いただきます！」

三人はアップルパイと格闘し始めた。オルファスはというと、ピザをつまんでいる。本当に甘いものが苦手らしい。アップルパイは、生地のサクサク感とリンゴの甘煮の甘酸っぱさにシナモンの香りが絶品であった。

「おいしい！　作り方教えてください」

アリアは飛びつくようにセシリアに頼んだ。アリアの様子を見たセシリアは、本当に料理が好きなのねと思った。オルファスしか子供のないセシリアは、アリアがオルファスのお嫁さんになってくれたらいいのにと密かに願っている。

「いいわよ。そうね……、学校がお休みの日にいらっしゃい」

「はい！」

四人はアップルパイを食べ終わると、オルファスの部屋へ移動した。オルファスは椅子、アリアとリーンはベッド、アルスは本棚の前に立ち、本をじっと眺めている。

「いいな、オルファスのママは料理が上手で」

「マナ先生だって上手だろう？」

オルファスに指摘されて、アリアはペロッと舌を出す。

「うん、でも、セシリアさんって好きなんだ。おしとやかで、きれいで、可愛くて」

アリアは元来可愛いもの好きである。本当は自分もフリルのついたドレスなどを着たいと思っているのだが、毎日牧場の仕事をするので、どうせ汚れてしまうし、動きづらいからと諦めている。うっとりした目で語るアリアを見て、オルファスは嬉しくなった。

「ねえ、アリア。うちにもおいでよ。ママがおやつを作ってくれるから」

リーンがオルファスに対抗した。オルファスはリーンをにらむが、まったく脅しの役割を果たさない。

「ほんと？　行くよ。リーンのママもお料理上手そう」

アリアがそう言うと、リーンは胸を張って答える。

「僕、ママの作った料理大好きなんだ」

「じゃあ、明日はリーンのおうちへ行こう。ね、オルファス」

オルファスは突然話を振られてドギマギしたが、コクリとうなずいた。

楽しい時間はあっという間に過ぎて、リーンは時間だからと先に帰っていった。

アルスはオルファスの部屋で遊んでいるうちに、オルファスのベッドで眠ってしまった。

「ごめんね」

「別にいいよ。アルスは小さいんだし、仕方ないさ」
オルファスの言葉にアリアはほっとした。クールに見えるけれど、やはり彼は優しいのだ。
「ねえ、オルファスは何になりたいの？」
「俺は他の人より偉くなりたい」
「ふうん、偉くなってどうするの？」
不思議そうに自分を見るアリアに戸惑いながらも、オルファスは話を続ける。
「偉くないより、偉い方が良いに決まってる」
「そうだね。……それでも、私と友達でいてくれる？」
アリアはオルファスを見つめた。見つめられたオルファスはドキドキしていた。
「あ、当たり前だろ」
「良かった」
アリアの様子にオルファスは嬉しくなる。友達でいてくれる？という彼女の言葉はオルファスにとって、この上ない喜びである。小さな頃からいつも一緒だった女の子。昔は自分だけを見ていてくれたのに、今では他の男に目が向いている。そんな時は胸がちくりと痛む。
時計を見たアリアがつぶやいた。
「あ、もうこんな時間。私たち帰るね。アルスを背負うのを手伝ってくれる？」
「俺が背負ってやるよ」
「でも」
「良いだろ？　アルスのことは弟みたいに思っているんだから」
「ありがとう」
アリアはオルファスの申し出を嬉しく思った。やっぱり、持つべきものは友達よねと、オルファスの気持ちなんかこれっぽっちもわかっていない。

アルスを背負ったオルファスとアリアは、夕暮れの町を歩いていた。オルファスはアルスを背負うのに精一杯で、アリアが今日のことを一方的に話していた。
アリアの家のドアを開けるとマナが出迎えてくれる。
「ただいま」
「おかえりなさい。まあ、オルファス。大変だったわね、ありがとう」
そう言うと、マナは眠っているアルスを受け取った。
二人は、家を出て歩き始めた。夕焼けに染まる牧場のあちこちから虫の声が聞こえてくる。特に話すことも思い浮かばず、二人は黙って歩いた。牧場の入り口でオルファスは立ち止まった。
「ここでいい」
「ん、でも」
「俺の家まで来るつもり？　そうしたら母さんに送っていけって言われるよ」
「そうだね」
二人はクスクスと笑った。
「今日はありがとう」
「別に。母さんが嬉しそうで、こっちが感謝するよ。今度は日曜日だっけ？」
「うん。お邪魔するね」
「じゃあ、また明日」
オルファスは手を上げて帰っていった。アリアはその後ろ姿に声をかけた。
「ありがとー！」
オルファスは振り返り、手を大きく振った。

十七　内緒話

翌日はリーンの家に招待された。今日もアリアとアルスとオルファスである。ロイはまたもや断わった。
「こんにちは！」
「いらっしゃい」
リーンのママのドロシーは、リーンと同じでとてもおとなしい感じの人だ。
「さ、みんな、手を洗いに行くよ」
リーンはいつになく張り切っている。自分の家に友達を招いた事が嬉しいのだろう。四人は手を洗い、テーブルに着く。ドロシーが出してくれたのは、チョコレートケーキだった。アリアは一口食べると叫んだ。
「甘すぎなくておいしい！」
アリアの言葉にリーンはうなずき、ドロシーもニッコリと微笑んだ。甘いものが苦手のはずのオルファスも、美味しいと言って食べている。そこへバレットが帰って来た。
「先生、おかえりなさい」
「よく来たな。ゆっくりして行け」
「はーい！」
四人の元気な返事に、バレットは満足げにうなずいて自室に引き上げた。
「先生って、おうちじゃ優しいのね」
アリアの言葉に、リーンは暗い顔をして、首を横に振った。
「そんな事ないよ。僕に対してはちゃんと勉強しろってうるさいんだよ」
「良いじゃない、パパにそんな風に言ってもらえるなんて。ねえ、アルス？」
「うん、そうだよ。リーン、ぜいたく！」

小さいアルスに言われて、リーンはおとなしくなってしまった。アリアとアルスの父は失踪中なのだ。そのことをバレットから聞いていたリーンはしまったと思った。そんなリーンに気付いたアリアは、どこかで元気にしているんだから気にしないでと取り成した。

おやつをたいらげて、四人はリーンの部屋に移動した。アルスがリーンの部屋にあった昆虫の本を持ち出した。それをオルファスに見せて、二人は虫の話しで盛り上がり始めた。チャンス到来とリーンがアリアに話しかける。

「ねえ、明日の放課後、二人でブレシア島に行かない？」

「二人で？」

「そうだよ」

楽しそうに話すリーンに、二人きりというのに引っかかったものの、断わるのも悪い気がして、まあいいかと思い承諾した。

楽しい時間もあっという間に過ぎ、ドロシーに帰る時間よと知らされて、三人は立ち上がった。

「お邪魔しました！」

リーンがアリアの耳元で、約束忘れないでねとささやいたのを、オルファスは聞き逃さなかった。リーンの家を出た三人はそこで分かれる。

「オルファス、またね」

オルファスはアリアを一瞥すると、黙って家のドアに手をかけた。オルファスの家とリーンの家は通りをはさんだ隣同士である。

「ばいばい！」

アルスが元気良く手を振っている。オルファスは振り返って手を振った。何よ、私は無視！？とアリアはむくれた。

＊＊＊

翌日、滞りなく授業は終わり、アリアとリーンは、皆に気付かれ

ないようにこっそり帰った。
「みんなに見つからなかったね」
「ばれたら、明日が恐いよ」
アリアは心配し、リーンは嬉しそうである。
二人は船着場まで歩いて行った。すると、そこで待ち構えていたのは、オルファスとアルスだった。
「ど、どうして？」
リーンが慌てふためいていると、オルファスが鼻で笑った。
「リーンの考えてることなんて、みんなお見通しなんだよ」
「お姉ちゃん、僕も連れてってよ」
「う、うん」
アルスはアリアの服の裾を引っ張っておねだりをしている。リーンを見ると、がっくりと肩を落としていた。アリアはリーンの肩を叩きながら、また今度ねと声をかけた。すると、リーンは先ほどまでの様子が一変して元気になった。
「オルファス、アルス、行こう！」
リーンは先頭に立って船に乗り込んだ。オルファスがアリアの耳元でささやく。
「リーンに何を言った？」
「内緒」
そう答えると、オルファスはぶーっとふくれた。

＊＊＊

セシリアと約束した日曜日だ。今日、アリアはエプロンとノートと筆記用具を持って、オルファスの家を訪れた
「こんにちは！」
「いらっしゃい、アリア。おや、アルスは一緒じゃないのかい？」
エンドールにたずねられたアリアはニコッと笑って答える。
「今日は、友達と遊びに行ってます」

エンドールは、そうかいと言って、アリアをキッチンに連れて行ってくれた。キッチンでは、セシリアとエプロンをつけたオルファスがいた。オルファスはむすっとしたまま、片手を挙げてあいさつをしてくれた。セシリアはふんわりと笑みを浮かべた。

「いらっしゃい、アリア」

「こんにちは。今日はよろしくお願いします」

アリアはペコリと頭を下げると、荷物を置かせてもらい、エプロンをつけた。このエプロンはマナがアリアに作ってくれたものだ。白いフリルいっぱいのエプロンはまるでドレスみたいに可愛い。その姿を見て、オルファスはドキリとした。いつも剣を振るっているアリアと違う。セシリアは胸の前で両手を合わせて、目を輝かせた。

「まあ、可愛い！」

そんなことを言われて、嬉しくないわけがない。アリアは恥ずかしそうに顔を赤くした。

三人は早速、アップルパイを作り始める。アリアとオルファスがリンゴの皮をむいている間に、セシリアはパイ生地の材料の分量を量る。二人がリンゴをむき終わったのを確認すると、セシリアが鍋にリンゴを入れ、砂糖をたっぷり入れて火にかけた。今度はパイ生地である。ボールの中に、バターと小麦粉を入れて、スケッパーでバターを細かく刻んでいく。アリアはボールの中を見つめながら、セシリアに質問した。

「どうして手でやらないんですか？」

セシリアはふふっと笑って、バターを手の熱で溶かさないためよと答えた。やってみる？　と、アリアと交代した。だいたい粉とバターが混じり合ってサラサラになると、オルファスが冷水を少しずつボールに入れた。アリアはせっせとスケッパーで混ぜていく。それをビニール袋に入れて、冷蔵庫で休ませる。すると、オルファスがアリアの顔をまじまじと見て言った。

「アリア、鼻の頭が白いぞ」

「オルファスだって」
二人でお互いを指差して笑った。
「さあ、二人とも顔を洗っていらっしゃい」
セシリアに促がされて、二人は洗面所に向かった。ダイニングに戻ってきた二人は、セシリアに学校のことや友達とのことをいっぱい話した。あっという間に一時間がたち、パイ作りを再開する。生地を麺棒で伸ばし、型に乗せて、リンゴのフィリングを入れて、残りの生地でふたをした。それをオーブンに入れると、セシリアは二人に、焼けたら呼んであげるから、お部屋で遊んでいなさいと告げた。

オルファスの部屋に入ると、オルファスは本を取り出し読み始める。何をしていいか困ったアリアは、オルファスの本をのぞきこんだ。
「何を読んでるの？」
「昆虫図鑑」
「虫、好きなんだね」
「ああ」
一言答えて、オルファスは視線を本に戻す。実際、オルファスはアリアと二人きりになって、困っていたのだった。そんなオルファスの気持ちに気付かないアリアはだんだん不機嫌になる。
「ねえ、何かして遊ぼうよ」
「何がいいんだ？」
面倒くさそうなオルファスを無視して、そうねえとつぶやくと、アリアは部屋を見渡した。遊ぶ物は何もなさそうである。
「指相撲しようか」
そう言って、手を出したアリアにオルファスは、にやっと笑った。手を握り合い、互いの親指を押し倒そうと駆け引きをする。なかなか決着がつかない。その時、階下からセシリアが呼ぶ声が聞こえた。アリアが一瞬気をそらした隙に、オルファスに親指を押さえられて

しまった。
「あーっ！」
「俺の勝ちだな」
「ずるい！」
「勝負に卑怯もずるいもないだろ」
オルファスは勝ち誇った顔をして、アリアに下へ行こうと告げた。

＊＊＊

その頃、アルスはムーとスーと学校でかくれんぼをして遊んでいる最中だった。ムーとスーはアルヴァーナ病院のレイ先生の双子の娘だ。おかっぱ頭の、鏡に映したような対称的に片目を隠すそのヘアスタイルは個性的である。アルスより一つ上の彼女たちは瓜二つなので、見ているだけではわからないが、話し出すと性格が正反対の二人なので見分けはつく。
「アルスは鬼ね。百数えたら探しに来てね」
「わかった」
アルスが顔を手で覆うと、双子は逃げて行った。
「いーち、にーい、さーん……」
百数え終わり、目を開けると、辺りはしんと静まり返っていた。二人ともどこに隠れたんだろう？　アルスは校庭を見回したが、隠れるようなところはない。校舎かな？　アルスは校舎に入っていった。
ひと気のない校舎に足を踏み入れる。ひたひたと自分の足音だけが廊下に響き渡る。アルスは教室に入ってみた。机の下、棚の中、探したけれど二人は見つからない。教室を出たアルスは、図書室に足を踏み入れる。やはり誰もいなかった。
「多目的教室か……」
アルスは、ここだけは入りたくなかった。なぜかと言うと、彼の

嫌いな人体模型が置いてあるからである。ガイコツと、半身皮膚をめくられた筋肉の描かれた模型。ぎょろりとアルスをにらんでいるように見えるのだ。アルスは心細くなった。
「ムー、スー、いるの？」
誰も答えるものはいない。こんな恐ろしい所にいるわけがないよねと結論付けて、アルスは多目的教室を出ようとした。その時である。カタカタと音がし始めた。アルスは音のする方を振り返る。彼の目に入ったのは、踊るガイコツだったのだ。
「わああっ！？」
アルスはびっくりして、出口に駆け寄る。戸を開けようとしたのだが、戸はびくともしない。焦るアルスの肩が、ぽんと叩かれた。振り返ると半身皮膚をめくられた筋肉の描かれた模型が、ぎょろりとアルスをにらんでいる。可哀相に、アルスはその場で気絶した。
「あーあ、アルス気絶しちゃった」
「やりすぎたかな？」
ムーとスーは顔を見合わせた。二人は模型を元に戻し、アルスを保健室に運び込んだ。

それから、三十分後アルスは保健室のベッドで目覚めた。
「あれ？」
「あ、気がついた？」
「僕、どうしてここにいるの？」
「多目的室で倒れてたのよ」
「そうなのー」
双子はすました顔で答えた。アルスは、多目的室であったことを二人に話して聞かせた。最初双子は真剣に聞いていたが、仕舞いにはぷっと吹き出した。
「アルス、可愛い」
ムーがうっとりしてそう言うと、スーは腹を抱えて笑い出す。二人からことのてん末を聞いたアルスはぶーっとふくれた。

「ひどいよ、からかうなんて！　僕、本当に死ぬかと思ったんだから」
「ごめんね」
双子はひたすら謝った。

家に帰り、アルスはアリアに今日の出来事を話した。最初は同情していたアリアだが、最後はお説教になってしまった。
「アルス、男の子がそんなじゃだめよ。立派なお兄ちゃん育成計画を続けなきゃね」
アルスは、アリアの変なスイッチを入れてしまったことに気がついた。しかし、念願かなって姉から剣術を教えてもらえることとなった。

十八　七夕の夜に

今日は七夕である。子供たちだけでは危ないという事で、マナとバレットが引率して星の観察会を行うことになった。夜、学校の校庭に集合した子供たちに、マナは呼びかける。

「グループ行動すること」

アリアは最初アルスと手をつないでいたが、ムーとスーがやってきて、アルスを連れて行った。

向こうでは、ロイとカノンがくっついていた。ボーっとみんなの様子を眺めていたアリアの前に、リーンが現れる。

「アリア」

「何？　リーン」

そこへラムリアが現れ、リーンの手を取り連れて行った。ラムリアはマックスとジュリアの娘で、とても優しく素直で物静かな女の子だ。モスグリーンの長い髪がふんわりとした彼女にとても似合っている。金持ちのお嬢様らしくフリルいっぱいのドレスを着ていた。ラムリアはまるで、お人形のように可愛くて、アリアはうらやましいと思う。自身を見ると、へそ出しルックにカボチャパンツで、お人形には程遠い。おとなしいラムリアだが、リーンのことになると、かなり積極的である。

（あーあ、残っちゃったよ。ママに一緒に居てもらおう）

そう思い歩き出すと、目の前をオルファスが立ちふさがった。

「何？」

「ペアを組んでやってもいいぞ」

「そ、そうだね。私たちあぶれちゃったんだっけ。よろしくね」

みんなグループになったのを確認して、マナの先導で一行は歩き出した。暗い夜道を歩くのは、ちょっとした肝試しのようで恐い。闇夜にコケホッホーの声がしたりして、余計に恐ろしい。

「きゃあっ！　アルス、恐いよー」
そう言って、アルスの腕にしがみつくスーに、負けじとムーもしがみつく。アルスは両腕をとられて困惑していた。それを後ろから歩いているカノンが、ムーとスーの頭をこつんこつんと叩いた。
「あんたたち、私の可愛いアルスに何くっついているの！」
「いいの！　カノンはロイにくっついていて！」
スーが言い返すと、ムーもそうだそうだとまくし立てる。そこへ、ロイがカノンに腕を突き出した。
「ほら、邪魔すると後で恐い」
カノンは渋々ロイの腕を取った。
まったく、アルスのことになると、カノンは母性本能をかき立てられるようだ。ロイは、はあっとため息をついた。

星降る小道へ着くと、それぞれ星を観察する場所を探して座った。アルスもムーとスーに挟まれながら、腰を下ろす。星座を眺めながら、双子は前髪を揺らしながら、左右対称の瞳でアルスの顔をのぞきこむ。
「ね、アルスはムーとスーとどっちが好き？」
「そんなの、わからないよ」
「むうーっ！」
双子はむくれた。アルスは困ってしまった。二人のうちどちらかを選ぶなんて出来るわけはない。
「スーはアルスが好き！」
「ムーもアルスが好き！」
「僕は、……二人とも好きだよ」
「そんなの答えになってない！」
アルスの困り果てた顔を見て、双子は提案した。
「じゃあ、私たち三人はずっと仲良しでいればいいの！」
「それ名案なの！　ね、アルス？」
「うん！」

そして流れ星に願い事をした。
「アルスとずっと仲良しでいられますように！」
「ムーとスーと仲良しで居られますように！」
願い終わると、三人は見つめ合って笑った。

そんな三人の後ろで、母親のように見守っていたカノンがため息をつく。
「私のアルスが……」
「カノンってば！」
「何、ロイ」
虚ろな目をしたカノンにロイが迫る。
「俺のことも気にしてよ」
「ん？」
いつになく真剣な表情のロイに、カノンは圧倒された。ごくりとつばを飲む音が聞こえてしまいそうで、カノンは慌てた。そして、ロイから発せられたのは、愛のささやきだった。
「す、好きなんだ！」
いつもの歯の浮くようなセリフじゃなく、ストレートに気持ちをぶつけてきたのだ。カノンは顔がかーっとするのを感じる。きっと真っ赤である。
「そ、そんなのわかってる」
「わかってるって……」
たじろぐロイを、カノンはにらみつける。
「もう！　ロイの鈍感！　何年私と一緒にいるの？」
そう口走ると、カノンはロイの手を握り締めて、ロイの耳元でぼそっとつぶやいた。すると、見る見るうちにロイが真っ赤になった。

その頃アリアは、オルファスと一緒に星を眺めていた。博学なオルファスは、空を指差しながら説明をしてくれる。アリアは感心したように、オルファスの話を聞いていた。

「すごいね、どうしてそんなに物知りなの？」
「勉強してるから」
何の変哲もない答えにアリアはがっかりした。星が好きだからとか、今日のために調べてきたとか言うのかなと期待していたのだった。
「でも、アリアと見られて少しは楽しめたかな」
アリアはオルファスを凝視した。まさか、オルファスからそんな言葉が出るなんて……。
「わ、私も楽しかったよ」
「どもるなよな」
オルファスは不機嫌そうに口走った。

その頃、リーンはラムリアにがっちりと腕を押さえられていた。
「ラムリア、手を離してくれない？」
「駄目です。離したら、逃げちゃうでしょ？」
リーンはうなだれた。ラムリアにはお見通しのようである。オルファスもそうだが、僕ってわかりやすいのかな？　お星様、教えてくださいと真剣に星に祈るリーンだった。

そんな生徒たちの様子を見ながら、バレットはマナにカイルから連絡はあったのかと訊いていた。マナは弱弱しく首を横に振った。結局、カイルはどこに何をしに行ったのかわからないまま。ただ、運命だから、家族を守るためだ、という言葉だけを残しただけだった。

十九　四人の友情

「ママ、お誕生日おめでとう！」
今日はマナの誕生日である。アリアとアルスは、この日のために用意したプレゼントの焼き芋を差し出した。二人に手渡されたプレゼントを見て、マナは微笑んだ。
「ありがとう、嬉しいわ」
「ほんと？　ママ」
アルスが、椅子に腰掛けているマナの膝の上にのぼって、マナの顔を覗き込む。マナはアルスの髪をなぜ、アリアを引き寄せた。
「ええ、パパも誕生日にはいつもこれをプレゼントしてくれたのよ」
そう言うとマナの目から涙がこぼれ落ちた。アリアはポケットからハンカチを取り出し、マナに渡す。マナはハンカチを受け取り、涙をぬぐった。マナの涙を見たアリアは胸を痛める。そして、子供ながらにマナを慰めようとした。
「ママ、パパは私が必ず探し出すからね」
「ありがとう。でもいいのよ。パパはお仕事が終わったら、きっと帰ってくるわ」
「でも」
「あなたまでいなくなったら、ママは悲しくて生きていけないわ。お願いよ、アリア。危ない事はしないでね」
マナにそんなことを言われて、アリアは何も言えなくなってしまった。その時、アルスがつぶやいた。
「ママ、おなかすいた」
「まあ、ごめんなさいね。ご飯にしましょうね」
「わーい！」
重かった空気がアルスの一言で和んだ。マナはアルスを下ろすと、キッチンに歩いて行った。そしてキッチンのシンクにつかまり、子供たちに背を向けて泣いた。

＊＊＊

二年後、十二歳となったアリアは、ダンジョンで石版を集めて回っていた。父カイルの手がかりを探すためだ。

石版は、ダンジョンで遊んでいる最中に偶然見つけたものだ。その石碑の文字が読めたのは、四人のうちアリアだけだったのだ。これは、アースマイトに関係あることに違いない。

今日も新たに見つけた石版のかけらを持って、バレットのところに向かった。

「先生、これを見てください」

「アリア、またダンジョンへ行ったのか？」

「えへへ、じっとしてられなくて」

頭をかきながら笑うアリアの頭を、バレットは困ったような顔をして、ポンポンと叩いた。

「これは見ておく。アリア、一人で行くな。誰か連れていけ」

「でも」

「ロイはもちろん、オルファスやリーンもそこそこやれる」

「はい」

素直に返事をしたものの、アリアは気が進まない。これまでもアリアは、危険な目に幾度となく遭っていた。だから、アルスはもちろん、オルファスやリーン、ロイでさえも誘うことが出来なかった。これは遊びではない、命がけなのだ。

翌日アリアは武道場で鍛錬をしていた。最初の頃はすぐやられていたけれど、今ではハイレベルのモンスターでも倒せるようになった。

父の聞かせてくれた御伽噺が作りものではないことを、アリアは感じていた。父を助けに行くのは、自分しかいない。そのためには、もっと強くならなければ……。

「やあーっ！」
最後のモンスターを倒して剣をおさめると、拍手する音が聞こえた。
「お見事」
「ロイ」
ロイはアリアを見下ろした。アリアは汗を拭きながら、何？　とたずねる。
「どうしてそんなに焦っているんだ？」
「だって、パパを探さなくちゃ」
「カイル兄ちゃんか……」
ロイは懐かしいものでも見るように、アリアを見つめた。アリアは、顔が上気するのを感じる。
「何？」
「アリアは、カイル兄ちゃんに似てるなと思ってさ」
「そりゃ親子だもん」
「そうじゃなくて、その頑張りやのところがさ」
アリアは憧れているロイに褒められて、頬を赤く染める。
「そんなことないよ」
「あるって。一人で背負って、誰にも相談せずにさ。昔、母ちゃんが言ってた」
アリアはロイを見上げた。ロイはふっと笑みをこぼす。
「ダンジョンへ行くときは呼べよ。俺も鍛錬したいしさ。やられるようなドジを踏むつもりはないけど、やばいときは逃げるからさ」
「ありがとう」
アリアはうつむいた。泣いているのを見られたくなかったから。
じゃあなと言ってロイは武道場を出て行った。
武道場を出たロイを待っていたのはオルファスとリーンだった。
「ロイ、ずるい」
リーンが口をとがらせた。ロイは笑みを浮かべた。

「悪かったな。心配しなくていいよ。アリアは妹分だ。おいらにはカノンがいるしね」
ロイは右手を上げて校舎に入っていく。リーンとオルファスはそれを見ていた。
「ロイ、かっこいいなあ」
リーンがぼそっと口走ると、オルファスがしらけたように言った。
「キザなんだよ」

さっき、三人はバレットに呼び出されて、アリアの手助けをしてやってくれと頼まれたところだった。その時に念押しされたのは、命の危険を感じたら、アリアの首に縄をかけてでも逃げろということだった。
オルファスとリーンはその言葉に恐れを感じずにいられなかった。アリアは一人でそんな危険な事をしているのだ。ただ、父親の手がかりをつかみたいがためだけに。
リーンは不安げにオルファスを見た。オルファスはというと、不安げな様子は微塵も感じられない。
「俺はアリアを守る」
「ぼ、僕だって！」
二人の小さなナイトが誕生した。

＊＊＊

アリアが武道場から出てきた。彼女は目に涙を浮かべている。オルファスとリーンはアリアを連れて図書室へ入った。
「大丈夫？」
リーンが声をかける。
「うん、心配かけてごめんね」
涙をぬぐいながらアリアが答えると、オルファスが口を開く。
「我慢してないで話してよ。俺たち友達だろ？」

オルファスの言葉にアリアは目を真ん丸くした。友達、友達だからこそ危ない目に遭わせたくはない。
「ありがとう。その気持ちだけもらっとくね」
オルファスが机をドンと叩いた。
「お前の友達ってそんなレベル？」
アリアはびっくりしてオルファスを見つめる。
「俺たちはお前が心配だ。お前が逆の立場だったらどうする？　黙って見ていられないだろう？　俺たちだって一緒だ」
アリアは返す言葉がなかった。
「頼むよ、俺たちを頼ってくれよ」
切なそうに自分を見つめるオルファスとリーンに、アリアの小さな胸は締め付けられた。

＊＊＊

放課後、オルファスに一緒に帰ろうと誘われたアリアは、決めていた事があった。自分の秘密を打ち明けたい。
牧場への田舎道を歩いていたアリアが足を止めた。
「どうした？」
オルファスがアリアを見ると、彼女は思いつめた表情をしていた。
「見て」
アリアは手を前に突き出し、呪文を唱えた。すると、アリアの手元から火の弾が出て、飛んでいた蝿に命中し、コロンと死骸が落ちた。
「私、普通じゃないの」
「魔法か？」
オルファスがたずねると、アリアはコクリとうなずいた。
「気味悪いでしょ？　こんな力が使えるなんて」
アリアはうつむいて話し始める。自分がアースマイトと呼ばれる人間であること。アースマイトとは大地とともに生きる人の事であ

る。アース文字を読み、アース文字の書かれた石盤から魔法書を作った。その魔法はアースマイトの血が流れている者のみが使える。
嫌だった、普通の女の子でいたかった。憧れているロイには言えなかった。
「でも、アリアはアリアだろう？　そんなの関係ないよ」
目を涙で潤ませたアリアに、オルファスはハンカチを差し出した。
「ありがとう」
幼馴染の彼だから、信頼しているから、打ち明けられる。
「ロイやリーンに話したって、なんとも思わないと思うぞ。かえってうらやましがられるさ」
「そうかな？」
「そうだよ。リーンなんて、アリア、すごいね！　って瞳をキラキラさせると思わないか？」
オルファスがリーンの声色を真似て、身振り手振りを交えて話すと、アリアの顔にやっと笑みが戻った。
「そうだね。話してみようかな」
オルファスは、にっこり笑ってアリアの肩をポンポンと叩いた。

翌日、アリアはリーンとロイに自分がアースマイトであることを告白した。二人とも、引くどころか、うらやましがった。オルファスの言うとおりになったのだ。

二十　積極的な彼女

その日からダンジョンに行く時は、三人のうち誰か一人を誘った。今日はリーンと共に、トリエステの森を更に奥に進んだ。川のせせらぎ地域は田舎の田園風景を思わせるような場所である。植物に頭の生えたようなモンスターが現れた。風の刃を繰り出す相手に、アリアとリーンは苦戦する。

「リーン、時間を稼いでくれる？　ファイアーボールで焼き尽くす」

「わかった」

リーンはモンスターの繰り出す風の刃を交わしながら攻撃を試みる。その間にアリアは集中し魔法の呪文を唱えた。

「リーン、ありがと！」

リーンはその言葉を聞くと、樹の陰に隠れた。戸惑っているモンスターにアリアのファイアーボールが炸裂した。耳をつんざくような悲鳴と共にモンスターは光になって消滅した。

「やったね、アリア！」

「うん、リーン、ケガは？」

「少しね」

アリアがリーンの傷を見ると、腕に切り傷があった。モンスターの風の刃が腕をかすめたらしい。そこから毒がまわっているようだ。

「ちょっと、じっとしててね」

そう言うと、アリアはリーンに手をかざし、回復魔法の呪文を唱える。すると、リーンは光に包まれた。

「あれ、身体が楽になった」

「そう、良かった」

アリアは、にこっと笑うと立ち上がり、クワを持って空き地を耕し始めた。

「何しているの？」

不思議そうな顔をするリーンに、アリアは耕す手を止めて説明し

た。
「畑を作っているの。作物が育てばルーンが宿るの。それに、食料にもなるし」
「ふうん」
アリアの話では、魔法を使うためにはルーンと呼ばれる大地の力が必要らしい。戦いの最中にもルーンを補充するために、ダンジョンで畑を作っているというのだ。リーンはアリアに感心した。戦略の先をよんで、用意を周到にしている。さすが僕のアリアだね、などと考えてはいたが……。アリアは持参したイチゴの種を植えて、ジョウロで水やりをした。
「これでよしと」
アリアは額の汗を拭うと、リーンの隣に腰を下ろした。リュックからホットケーキとリンゴジュースを取り出した。二人でそれを食べながら、ぼーっと森を眺めた。
「アリア、いつも一人でこんな事をしていたんだね」
「ん、でもパパを探すためだから」
そう答えてホットケーキを口にするアリアを、リーンは見つめた。
「これ、僕の好物って知ってて用意してくれたの？」
ホットケーキを持ち上げて、リーンはアリアにたずねた。
「以前に好きだって言っていたよね？　私に出来るお礼ってこれぐらいしかないから」
「アリアが僕のために作ってくれるなんて、お礼でも嬉しいな」
リーンが期待を込めた瞳で見つめると、アリアは苦笑した。
「ラムリアに怒られそうね」
「なに、それ？」
リーンが突っかかると、アリアはなんでもないとごまかした。リーンの気持ちは嬉しいが、アリアにはそんな気はない。

＊＊＊

リーンに誘われて、ブレシア島へ遊びに行くことになったアリアは船着場にいた。しかし、そこにラムリアがいたのだ。
「あれ、ラムリア、どうしたの？」
アリアがたずねると、ラムリアは、じっとアリアを見つめた。これは、今日の約束がばれているとアリアは思った。その時、リーンが駆けてきた。
「アリア！　お待たせ。あれ、ラムリア」
リーンも、なぜラムリアがここにいるか知らないようである。ここで、ラムリアを無視して行く事は出来ないと、アリアは彼女を誘うことにした。
「ラムリア、時間があるなら、私たちとブレシア島に遊びに行かない？」
リーンはアリアを凝視する。アリアはリーンにまあまあとアイコンタクトして、ラムリアの方へ視線を戻した。ラムリアは嬉しそうにしたが、首を横に振った。
「用事でもある？」
なおも彼女は首を横に振る。どうしたものか、アリアは考えをめぐらせた。そして、リーンから誘うように耳打ちした。
「ラ、ラムリア。一緒に遊びに行こう？」
ラムリアは瞳を輝かせたかと思うと、大きく首を縦に振った。何のことはない、リーンから誘って欲しかったのねとアリアは思った。

三人で船に乗り、ブレシア島へ来た。内陸の砂浜の方が波は穏やかなので、そこまで入ることにした。アリアはリーンに花を持たせることにする。自分はラムリアをガードし、リーンにモンスターをやっつけてもらうのだ。
リーンがモンスターとやりあう。それを見ていたラムリアは胸の前で手を組んで心配そうに見つめている。リーンが剣を横にして回転し始めた。リーン十八番の旋風剣である。数頭いたモンスターは一気に散った。リーンが剣を納めると、ラムリアが駆け寄っていっ

た。
「怪我はありませんか」
「大丈夫だよ」
アリアは二人を見て、お似合いじゃないと思った。そして二人を促がし、砂浜で遊んだ。

二十一　憧れの彼

とうとう、トリエステの森の最奥にたどり着いた。そこは闘技場よろしく広々としている。今日のパートナーはロイである。

「ロイ、行くよ」

「ああ、いつでも来いってんだ」

ロイは剣を構えるとコクリとうなずいた。そっと奥をのぞくと、身の丈が十五メートルはあろうお化けの樹が、枝葉を震わせている。その周りを大きなリンゴ様のモンスターがたくさんうごめいていた。二人はモンスターの前に飛び出した。ロイは転がるリンゴを交わしながら、お化けの樹に近寄る。その時、お化けの樹はロイの背後から枝を鞭のように打った。

「あっ！　ソニックウインド！」

アリアは魔法を使い、ロイに向かってきていた枝を風の刃で打ち払う。

「サンキュー、アリア」

ロイはウィンクし、お化けの樹に切りつけた。お化けの樹は悲鳴を上げて、その身体を赤くした。

「やりぃ！」

ロイはそのまま、反対側に滑り込み、第二打を放つ。またもや、お化けの樹は悲鳴を上げて、身体を赤くした。アリアは魔法の呪文を唱える。

「ソニックウインド！」

アリアはうっとうしい大きなリンゴを片付ける。その間にロイはお化けの樹に何度も切りつけた。そしてとうとうお化けの樹は悲鳴を上げ、光になって消えた。

「やっとか」

ロイは剣を一振りすると、さやに収めた。そして、アリアに駆け寄った。

「大丈夫か？」
「ロイは？」
「大丈夫だよ。あれ、アリア、足を怪我したのか？」
「うん、お化けの樹の枝を避け切れなくて」
アリアの脛に結構深い切り傷が出来ている。ロイはアリアの言葉を待たずに、そばに生えていた薬草を摘むとそれを指ですりつぶし、アリアの傷に当てた。そしてハンカチを裂いて傷口を覆う。
「応急処置はしたから、あとでレイ先生に診てもらおう」
「こんなの、かすり傷だって」
「だめだ！　ちゃんと消毒しないと」
ロイの迫力に押され、アリアはおとなしくなった。
「これは、カイル兄ちゃんの受け売りさ。小さな傷もあなどると死を招くって散々言われたんだ」
パパがそんな事をロイに言ったんだ……。アリアがカイルに思いをはせていると、不意に身体が浮き上がった。
「きゃっ！」
「病院までおぶっていってやる」
「いいよ、歩ける」
「遠慮するなって」
そう言うと、ロイは森を下っていく。アリアは諦めておとなしくした。そして、ロイの背中にそっと顔をくっつける。
「どうした、アリア。疲れたのか？」
「うん」
「そっか、寝てて良いぞ」
今だけは独占してもいいよね。カノン、ごめん。アリアは心の中でそっとつぶやいた。

二十二　ダンス大会

今日はダンス大会である。ヴィヴィアージュ広場には、朝から若い男女が集まっていた。そうは言っても、上はカノンから下はアルスである。彼らの親たちは、自分の子が誰を誘うのか興味津々である。　アリアも、今朝マナからしつこく聞かれた。

「アリアは誰の誘いを受けるの？」

「そんなの、誘ってくれる人がいるのかわからないし」

「もう、謙遜しちゃって。それで誰？」

親バカとはこういうものなのか。

アリアとアルスは広場の真ん中に進み出た。誰も誘ってくれなかったら、アルスと踊ろう、そんな事を考えていたアリアだったが、アルスはさっさとムーとスーに誘われて行ってしまった。何、両手に花？　アルスったらもてるのね、なんて感心している場合ではない。アリアには切り札がなくなってしまった。周りを見てみると、ロイはカノンの手を取っていた。やっぱり……。アリアの望みはあっさり打ち砕かれる。そこへリーンが現れた。

「ア、アリア」

アリアがきょとんとしてリーンを見る。リーンが何かを言おうとすると、ラムリアが現れて、リーンの手をとった。

「リーン、踊りましょ」

「ラムリア、ぼ、僕は」

ラムリアはリーンの声を無視して連れていってしまった。もう帰ろうかな、そう思ったときだった。

「アリア、その、踊ってくれないか？」

顔を上げると、目の前に立っていたのは頬を赤くして、むすっとしたオルファスだった。

「私を誘ってくれるの？」

「そうだ。お前を誘ってるんだ」
差し出された手をアリアが取ると、オルファスはニッと笑った。
ダンス大会が始まった。軽快なリズムの演奏が奏でられ、カップルはそれぞれ踊り始めた。アリアとオルファスも軽くお辞儀をして、踊り始めた。アリアは踊りが得意ではない。そんなアリアをオルファスがリードしてくれる。
「オルファス、上手」
「アリアが下手くそなんだろ？」
アリアが口をとがらせると、オルファスはにやりと笑う。
「ちゃんとリードしてやるから」
アリアは、くるくるとステップを踏む。実際は、オルファスに踊らされているのだが……。なんだか、だんだん楽しくなってきた。
「なんか楽しい」
「そうか？」
アリアは案外呑み込みが早い。手と手を取り合って、お互いを意識しあいながら踊る。見つめあう瞳と瞳。アリアは楽しいと感じ、オルファスは幸せを感じる。
ダンス大会が終わったあと、アリアとオルファスは噴水の前にいた。アリアが誘ってくれたお礼を言おうと、もじもじしていると、オルファスが先に口を開いた。
「残念だったな」
「え？」
「ロイが誘ってくれるのを待ってたんだろ？」
アリアは図星を指されて戸惑ってしまった。しどろもどろなアリアを見ながら、オルファスは話し続ける。
「アリアの心の中に、少しは俺の居場所はあるのかな……」
アリアはその言葉を聞いて目を見張る。言った本人は、顔を赤くしてアリアを見つめていた。

「あ、あの」
アリアが返事に困っていると、オルファスは静かに目を伏せた。
「ごめん、変な事言って。明日はどこのダンジョンに行くんだっけ？」
「メッシナの谷よ」
オルファスは遠くを見ながらつぶやいた。
「秋の谷か。母さんにブドウでも採ってきてやるかな。じゃあ、また明日な」
「うん、またね」
アリアは帰っていくオルファスを見送った。だんだん小さくなっていく後姿に、幼馴染として過ごしてきた今までのことを振り返る。赤ん坊のころから一緒だった。そばにいるのが当たり前、一緒にいて気を使わなくて済む、空気みたいな存在だ。そんな二人の関係が微妙になってきたのは、アリアが恋をしたからだろう。やっぱり、オルファスは幼馴染、特別な感情を持てるわけがない。
スーとムーと別れてきたアルスが駆け寄ってきた。
「お姉ちゃん、帰ろう」
「うん、帰ろっか」
二人は赤く染まったアルヴァーナの町を、手をつないで帰って行った。
その晩、アリアはマナにオルファスとのことを根掘り葉掘り聞かれたのは言うまでもない。もちろん、オルファスもセシリアの質問攻めを受けていた。

＊＊＊

ダンス大会が終わった後、ラムリアとリーンは手をつないだまま、ラムリアの家の前に立っていた。
「ラムリア、手を離してくれない？」
ラムリアはリーンの言葉に反応して、さらにつなぐ手に力を込め

た。
「い、痛いよ！」
リーンが思わず叫ぶと、ラムリアははっとして手を離した。リーンは手をさすりながら、ラムリアに問う。
「どうして僕なの？　ラムリアぐらい可愛いと、社交界から縁談とかいっぱいあるでしょ？」
リーンは父バレットとラムリアの父マックスの話を聞いていたのだ。ヴィヴィアージュ家の次期当主であるラムリアは、しかるべき血筋から養子を迎えると。
リーンの問いにラムリアは、ぽろぽろと涙を流し始めた。
（うわっ、泣かせちゃった。パパに怒られる！）
リーンは慌てふためいた。
「ラムリア、変な事言ってごめん。泣かないで」
リーンは一生懸命謝った。ひとしきり泣いた後、ラムリアはリーンの服の裾を握り締めた。
「お話し相手になってくれてもいいでしょう？　私はそれ以上望みません」
「ラムリア……」
ラムリアは自分の次期当主としての立場をわかっているのだ。ただ、一緒に他愛のない話が出来る友達が欲しいだけ。元々おとなしい彼女は他の友達を作ることが出来ず、幼馴染のリーンに心を許しているだけだ。自分より二つ年下のラムリアが可哀相になった。自分の将来のレールが既にひかれていて選ぶことが出来ないなんて。
「いいよ、僕でよかったら話し相手になる」
リーンはそう答えた。すると、ラムリアは、ぱあっと顔を輝かせた。

二十三　さようなら、初恋

あれから三年がたち、アリアは十五歳になった。父親譲りの赤い髪はつややかで、母親に似たくりくりとした大きな瞳、桃色に染まった頬に小さく結んだ口元。アリアは凛とした少女に成長していた。

ロイとカノンは学校を卒業し、アリアたちは九年生である。三人の協力のおかげで、ダンジョンの攻略は順調に進んでいる。トリエステの森に続き、メッシナの谷、バドバ山脈の石版を完成させ、今はブレシア島の石版のかけらもあと一ピースといったところだ。

今日はロイとアルスと共にブレシア島に来ている。十二歳になったアルスもすっかりたくましくなり、ダンジョン攻略を手伝ってくれるようになった。

一気にたたみかけたかったので、今夜はこのまま野宿することになった。西の砂浜で焚き火をたいて、三人で囲んでいる。腹の膨れたアルスは早々にシートを敷いて眠り込んだ。

パチパチと木がはぜる音と、さざ波の音しかしない。あたりは真っ暗だ。学校の様子やロイの仕事の話など、他愛のない話をしていたときだった。ロイが思い出したように口走る。

「あ、アリア。俺、カノンと結婚する事になった」

「お、おめでとう。式には絶対行くからね」

祝いの言葉を述べると、ロイは照れくさそうに微笑んだ。

「サンキュー。アリア、先に寝ろよ。俺が見張りしているから」

「そうさせてもらう。後で起こしてね」

「ああ、おやすみ」

アリアもアルスの隣に寝転がる。ロイに背中を向けた。あふれる涙を抑える事が出来なかった。幼いときからずっとロイに憧れていた。でも、彼の隣にはずっとカノンがいて、アリアを見てくれはしなかった。タオルを顔に当ててしのび泣いた。

夜半過ぎ、ロイは眠気を覚えたので、アリアに交代してもらおうと思い、そばに寄ってアリアに声をかけた。アリアはううんと唸って、こちらに顔を向けた。ロイはハッとした。焚き火に照らし出されたアリアの顔には、涙を流したあとがあったのだ。

「アリア……」

この年下の少女が自分を慕ってくれていた事には気付いていた。でも、自分の結婚話を聞いて涙するほど、想われていたとは思いもしなかった。

「カイル兄ちゃん、ごめんよ。アリアを泣かせたみたいだ」

ロイは、星の瞬く空を見つめて独り言を言った。

＊＊＊

目が覚めると、もう辺りは白み始めていた。アリアはがばっと起きた。ロイと交代もせずに一晩眠ってしまったのだ。ロイを見ると、うつろな顔をして焚き火の前で座っていた。

「おはよう、アリア」

「ロイ、どうして起こしてくれなかったの！？」

アリアが血相を変えて食って掛かる。

「あんまり気持ち良さそうに寝ていたからさ」

ロイの言葉に、アリアはトーンダウンしてしまう。自分が起きなかったのが悪いのだ。ロイを責めるのは道理じゃない。

「ごめん。食事したら帰ろうね」

「大丈夫だよ」

「だめ！　そんなフラフラしていたら命がいくつあっても足りないわ」

反論する元気もないのか、ロイは黙り込んだ。

アリアはアルスを起こして、お茶を沸かし持参したパンとチーズを切って、皿に並べた。三人は無言でそれを食べ、焚き火を消すと、

アリアは魔法を使って、一気に船着場まで二人を連れてワープした。
船を使い、アルヴァーナの町に着くと、ロイに声をかけた。
「ロイ、大丈夫？　送っていこうか？」
「大丈夫だって。じゃあな」
ロイはいつものように、片手を挙げて帰って行く。アリアは、ロイに自分の気持ちを気づかれた事を知る由もなかった。

二十四　セレッソの咲く季節

教会の鐘が鳴り響く。今日はロイとカノンの結婚式だ。アリアたちは、式に参列するため教会にやって来た。ラムリアとムーとスーは落ちつかない様子で、きゃあきゃあとはしゃいでいる。リーンがそばに来て、話しかけてきたけれど、すぐラムリアに連れて行かれた。そしてアリアの隣に、むすっとしたオルファスがやって来た。

「大丈夫か？」

「な、何が？」

「白を切るなら、それはそれで構わないけどさ」

何が言いたいのかわかるが、アリアは気付かない振りをした。

礼拝堂にパイプオルガンの演奏が奏でられ、カノンの父であり神父であるゴードンの太い声が響き渡る。

「汝、ロイよ。カノンを妻とし、病める時も健やかなる時も、死が二人を分かつまで永遠の愛を誓いますか？」

「誓います」

「汝、カノンよ。ロイを夫とし、病める時も健やかなる時も、死が二人を分かつまで永遠の愛を誓いますか？」

「誓います」

「では、誓いの口づけを」

ロイとカノンはお互いを見つめあい、そっと口づけを交わした。

「母なる大地と、御在天の父なる神、精霊様の名において、汝ら二人を夫婦となす」

ゴードンは聖書をパタンと閉じると、豪快に笑った。

「さっ、神様に誓いも立てたし、堅苦しいのはここまでだ。ロイ、カノンを頼むぞ」

「もちろんですよ」

ゴードンの言葉に、ロイはニッと笑った。

参列者が次々に二人の前に進み出て、お祝いの言葉を述べた。次はアリアの番である。
「ロイ、カノン、おめでとう。お幸せにね」
アリアは精一杯の笑顔で二人を祝福した。カノンは幸せいっぱいの様子で、ロイと見つめあい、礼を述べた。
「ありがとう。アリアも早く好い人を見つけてね」
「うん、頑張るよ」
アリアは、祝福される二人を囲む輪からそっと離れて、学校へ向かった。

学校の校庭には、セレッソの薄紅色の花びらがはらはらと舞っていた。アリアは木の幹に左手を当てた。幸せそうな二人を見て、こんなに胸が苦しくなるなんて、私ったら最低だと自分をののしった。
「こんな所にいたのか」
振り返ると、そこにはオルファスが立っていた。
「辛いなら泣けばいいだろ？」
アリアは右手を胸の前でぎゅっと握り締めていた。その姿が痛々しくて見ていられない。オルファスはアリアの空いた手をそっと取った。アリアは、一瞬驚いたような表情を浮かべたが、かぶりをふるふると振った。
「二人の晴れの日にそんな事できない」
「アリアはバカだな」
オルファスはそう言うと、握ったアリアの手を引き寄せて、自分の胸にアリアの頭を押し付ける。いつの間にか、オルファスはアリアよりも背が高くなっていた。こらえていたものが堰を切ったようにあふれ出す。アリアはオルファスにしがみついて、涙をポロポロと流した。
「どうせバカだよ……」
オルファスとアリアはただそこに立ち尽くした。そんな二人を隠

すように、セレッソの樹がいっそう花びらを散らした。

二十五　アリアの決意

ブレシア島の攻略も終わり、いよいよパレルモ神殿へ乗り込む事になった。アリアは、パレルモ神殿へは一人で行くと決めていた。今度ばかりは下手をすると、命を落としかねない。

アリアは、危険だからとバレットに取り上げられた魔法書ドラグキャリバーを、こっそり取りに行くことにした。

放課後学校に行くと、バレットが多目的教室で授業の準備をしていた。アリアに気付き、ちらっと視線を投げかけた。

「どうした？」

「いえ、忘れ物しちゃって」

バレットに見つからないように探さなくてはならない。しかしそんな気遣いも杞憂に終わる。バレットは準備に気をとられているようで、作業の手を休めずにアリアに声をかけた。

「そうか、取ったらさっさと家に帰れよ」

バレットのいつもと変わらない様子がありがたかった。しかし、ひょっとしたら二度と会えなくなるかもしれない。

「はい、先生、いつもありがとうございます」

「あらたまって、どうした？」

「い、いえ何でも……」

アリアは、余計なことを言ってしまったとヒヤヒヤしたが、バレットは気にも留めなかったようだ。そして思い出したように、ポケットから幸せのリングを取り出して、アリアの手に握らせた。

「さっき、机を整理していたら出てきた。これは、お前の父親から預かっていた物だ。渡しておく」

「ありがとうございます」

父からの贈り物を受け取り、アリアは、やはり今が行くべき時なのだとあらためて悟った。

礼を言い元気良く教室を出て行くアリアを、バレットは見送った。

アリアは校内をくまなく探すつもりで来ていたのだが、バレットに怪しまれては、また魔法書を取り戻すことが出来なくなる。今度はドラグキャリバーが必要になる気がしてならなかったのだ。バレット先生って、結構回りくどいことをしない人よね、と以前のことを思い出し、以前ほかの魔法書を隠してあった場所を探すと、やはり出てきた。先生ってへそくり出来ないわね、なんて思いながら、アリアは学校を後にした。

＊＊＊

その夜、マナとアルスが眠ったのを見届けると、アリアは荷物を持って家を出た。ふと、人の気配を感じてそちらを見ると、畑の樹の下に誰かが立っている。

「誰？」

アリアの声に反応するように動いた。月明かりの下に現れたのはオルファスだった。リュックを左肩に引っ掛けて、いつものようにむすっとしていた。

「オルファス、……どうして？」

「お前の考えている事なんか、お見通しだ。お前が嫌がっても、俺は行くからな」

アリアはオルファスを見つめた。蒼い瞳の奥に宿る決意。

（この人は私のために命をかけようとしている）

この場で気絶させても、きっと後から追いかけてくるだろう。

「私と約束してくれる？　危なくなったら一人でも逃げるって」

「わかった。あと、無事に帰って来られたら伝えたい事がある」

「楽しみにしてる」

二人は、パレルモ神殿に向かって歩き出した。

パレルモ神殿の地下への階段を、たいまつをかざしながら下りる。湿り気を帯びた生暖かい風が、頬を撫ぜてゆく。どうしたわけか、オルファスが先を歩いてくれた。
「暗いから、足元に気をつけろ」
「うん」
返事をしながら、クスクスと笑い出すアリアに、オルファスは立ち止まり怪訝な顔をした。
「何笑ってるんだよ」
「だって、オルファスが優しいんだもん。お姫様になった気分」
嬉しそうに自分を見上げて話すアリアに、オルファスは肩をすくめる。
「俺はいつだって紳士のつもりだけど？」
「うん、そうだったね」
アリアに軽く受け流されて、オルファスはため息をついて歩き出した。そして少し進むと彼は立ち止まった。
「いるぞ」
オルファスは剣を抜いた。アリアは魔法の呪文を唱える。モンスターの足元から石柱が突き出て、動きが止まった。オルファスが剣で切りつける。アリアは光の弾をまとった。モンスターが近寄ると、その光の弾がモンスターを襲う。アリアも剣を抜き、切りかかる。モンスターは光になって消えた。剣を振ってさやに収めると、オルファスが近寄ってきた。
「大丈夫か？」
「うん、なんとか」
アリアは剣を収めて笑みを浮かべた。

＊＊＊

二人は先に進む。今日は地下一階を制したので、休む事にした。落ちている枯れ木を拾い集め、重ねた。アリアは炎の魔法を枯れ木

に向かって軽く放つと、枯れ木が燃え始めた。
「上手く使うな」
感心したようなオルファスの様子に、アリアは小さく笑った。お湯を沸かし、お茶を煎れると、空いた鍋に持参した野菜を入れて煮込み始める。
「結構凝ったものを作るんだな」
「うん、長くなると思ったから。腹が減っては戦は出来ぬっていうじゃない」
シチューが煮えるまでの間、二人で焚き火を囲んで話をした。アリアはオルファスが同行してくれたことに感謝していた。こうやって野宿しているときでも、二人だとリラックスできる。もし一人だったら、ぴりぴりして神経が持たないだろう。
「なあ、アリア」
「何？」
アリアは鍋底を焦がさないようにかき回しながら、返事をする。
「カイルさんはどうして失踪したんだ？」
アリアは、鍋をかき回す手を止めると、自分の右手に光る幸福のリングを見つめながら語りだした。
「はっきりはわからないの。ママは、パパにしかできない事をしに行ったんだって教えてくれたけど。必ず帰って来るって信じてる。パパもアースマイトなの。小さい頃、アルヴァーナの御伽噺をよくしてくれた。それが本当なら、パパは赤き竜を封印しに行ったはず。でも、遅すぎるよね？　パパが失踪してから八年だもん。何かトラブルに巻き込まれていると考えるほうが不思議じゃない」
「それで探し始めたのか」
アリアはコクリとうなずいて、皿にシチューを盛り、パンと一緒にオルファスに渡した。自分の分もよそい、食べ始める。しかし、パンをちぎる手が止まった。
「ママね、夜中目が覚めるといつも声を押し殺して泣いているの。そんなママが可哀相で」

オルファスはそんなアリアを黙って見つめていた。アリアは焚き火を虚ろに見ながらつぶやいた。
「でも、うらやましいの。ママはそんなにも愛せる人がいるんだって。私もいつかそんな人に巡り会いたいな」
その言葉を聞いて、オルファスの胸はちくりと痛む。自分の前でそんなことを話せるという事は、自分はアリアの対象ではない。しぼり出すように答えを返した。
「アリアなら……、きっと見つかるさ」
「ありがとう」
しんみりしてしまった空気が嫌で、アリアはオルファスにたずねた。
「ね、お味はいかが？」
「ん、うまいよ。母さんにも引けを取らないと思う」
「それって最高の褒め言葉ね」
首をすくめて楽しそうに笑うアリアを見て、オルファスは胸を焦がす。小さいときからずっとアリアだけを見つめてきた。でもアリアはロイに夢中で、自分の事を振り返ってもくれなかった。ロイが結婚しても、自分はいつまで経っても友達のまま。でも、アリアを想う気持ちは誰にも負けないと自負していた。今では彼女が幸せになれるなら自分じゃなくてもいい、そう考えている。
今回、アリアが一人でパレルモ神殿に行くことは目に見えていた。一人で行かす事など自殺行為である。やはりじっとしていることは出来なかった。そして、自分がアリアを守る、そう思って待ち伏せしたのだった。
ほんとのところ、どれだけ貢献しているかはわからないが、アリアが自分と話すことで、この過酷なダンジョンでも笑ってくれるのは嬉しかった。
「食器を洗ってくる」
アリアは食器を持って、すぐそばの小川に向かう。オルファスも後についていく。アリアが食器を洗っている間、背後を守った。食

器を洗い終えたアリアが立ち上がり、二人は焚き火のそばに戻る。
アリアは魔法を唱え、自分たちの周りに石柱を立てた。そして、それぞれ寝袋に潜り込み夜の闇に落ちていった。

二十六　二人を待つ人々

洞くつの天井から垂れるしずくの規則的な音が聞こえる。目覚めて辺りを見回すと、焚き火がほんの少しの炎をともしていた。洞くつの中は暗く、焚き火が消えてしまっては真っ暗になってしまう。アリアはそっと起きだして、木をくべた。オルファスを見ると、彼は穏やかな寝息を立てていた。

（二人きりでこんなところにいるなんて不思議ね）

幼い頃より、いつも一緒に過ごしてはいたが、朝から晩までというのは初めてのことだ。

腕時計を見ると朝の六時だった。陽が入らないので時計に頼るしかない。さあ、朝食の用意をしようと、リュックの中をあさった。取り出したのは、干し飯である。今朝はリゾットを作ろう。鍋を火にかけて干し飯を入れる。周りを見回すと、キノコが生えていた。キノコを取って、細かく切り鍋に入れた。タマネギにコンソメやチーズを入れると、良い香りが漂ってきた。その香りに誘われたのか、オルファスが目を覚ました。

「おはよう、よく眠れた？」

アリアが声をかけると、オルファスは、髪をくしゃくしゃとかきながら、笑みを浮かべた。

「おかげさまで」

初めて見る、幼馴染の寝起きの可愛らしさに、アリアはクスリと笑う。

「もうすぐ、食べられるからね」

「顔、洗ってくる」

オルファスはそう言うと、小川へ行った。その間にリゾットは出来上がり、戻ってきたオルファスとともに食事をした。

「今頃、アルヴァーナは大騒ぎだろうな」

「うん、黙って出てきちゃったもんね」

二人は顔を見合わせて、あることないこと言い合っているだろう母たちを思い浮かべた。

＊＊＊

二人が旅立った翌日、町長の家で、マナやセシリアが大騒ぎをしていた。その横でアルスとジェイクが心配そうに二人を見つめている。ブライとバレットもその場にいた。

「アリアとオルファスがいなくなったのって、駆け落ちなの？」

「でも、私たちは反対してなかったわよ」

二人の母が、とんちんかんな事を言って大騒ぎをしているのを見て、アルスが言葉を発した。

「きっとお姉ちゃんは、ダンジョンにパパを探しに行ったんだよ。オルファスはお姉ちゃんを助けてくれているんだ」

二人の母はアルスの言葉に驚愕した。ダンジョンに二人で入っているなんて！　二人はブライに救援隊を出すように求めたが、バレットがそれを止めた。

「二人はカイルを救うべく旅立ったんだ。もう少し待ってやってくれないか？　それに、一般人がダンジョンに入るのは危険だ」

「バレット、あなたはアリアたちがダンジョンに行くのを知っていたの？」

バレットは首を横に振った。アリアが行方不明になったと聞き、ふと気になって図書室へ入ったバレットは、アリアから取り上げた魔法書ドラグキャリバーがなくなっていることに気付いたのだった。しかし、オルファスまで行っているとは……。

マナは今にも崩れ落ちそうだった。そんなマナを椅子に座らせたバレットが、ぼそりとつぶやいた。

「アリアは毎晩カイルを想って泣くマナの姿を知っていると言った。自分が父を連れ戻さなくてはいけないんだと。それで数年前からダンジョンに入って手がかりを探していた」

「それは薄々気付いていたわ。生傷が絶えなかったもの。でも問い詰めても、なんでもないよ、心配しないでの一点張りだった」
マナはアルスを抱き寄せる。アルスは、そんな母にどんな言葉をかけていいものか、考えあぐねていた。
「きちんと話を聞きだしてやめさせればよかった」
バレットは辛そうに首を横に振った。
「そんなことをしても、アリアを止められないことはわかっているだろう？　アリアは立派なアースマイトだ。きっとあの子達は帰って来る」
「では、オルファスはどうして？」
セシリアの叫びにも似た質問にバレットは答えた。
「それは、オルファスにとって、アリアが命よりも大事な者だからだろう」
バレットの答えに、セシリアは黙ってしまった。そして再びバレットは言い放つ。
「オルファスは必ずアリアを連れて戻ってくる」
マナが諦めたようにつぶやいた。
「わかったわ。私もアリアとオルファスを信じる」
「私も」
セシリアもうなずいた。そんなセシリアの肩をジェイクが支えた。

二十七　赤き竜と覚醒したアリア

二人は後片付けをした後、さらにダンジョンを進んだ。
毎日攻略していき、四季をまたぐ回廊にたどり着く。春夏秋冬のそれぞれのダンジョン。ダンジョンの主を倒すと石像が出現した。アリアが石像の文字を読む。土を耕し、作物を育てよと書いてある。アースマイトとしての資質を確かめるためだろうと理解した。
この気候は春のもの、アリアは持参していたキャベツとトイハーブの種をまいた。その作物が育つまでの期間はとても穏やかなものだった。オルファスと二人で農作をする。連日、戦いに明け暮れていた二人にとって、ひとときの休息であった。
アリアは目の前に広がる畑をぼんやりと眺める。手を洗いに小川へ行っていたオルファスが戻ってきて、アリアの隣に腰掛けた。人一人分を空けて……。オルファスはアリアに話しかける。
「二人でこういう生活をするのもいいもんだな」
「でしょ？　牧場生活って結構楽しいんだ。オルファスもわかってくれて嬉しいよ」
そう答えると、オルファスは苦笑した。アリアは不思議に思い、「どうしたの」とたずねると、彼は「なんでもない」と口にした。なんとも思われていないのだなと、あらためて思い知らされたオルファスだった。

そうこうしているうちに作物は実り、石像に備えると、春のオーブが足元にコロンと転がった。オルファスがそれを拾い上げる。アリアたちが倒した春のダンジョンのモンスターがかたどられていた。手の中にすっぽりと納まる小さなものだ。
「なんだ、これ？」
「待ってて」
アリアは新たに現れた石像の文字を読む。そこには、‘四季のオ

ーブを集めよ、さすれば最奥への扉が開かれる、と書かれていた。
「扉の鍵になるみたい」
「四季ってことは、あと三つあるってことだな。行くか」
「うん」

二人はその後、夏秋冬のダンジョンを制し、それぞれのオーブを手に入れた。アリアたちが、パレルモ神殿に入って二月が経とうとしていた。この頃、アリアにとって、オルファスはかけがえの無いパートナーとなっていた。何度も死線をくぐり抜け、お互い助け合い、励ましあってきたのだ。
「全てのオーブも手に入れた。次のダンジョンに向かおう」
オルファスの一言で、アリアは覚悟を決めた。

＊＊＊

四つのオーブを最奥の扉のくぼみにはめ込むと、扉はぎぃっと嫌な音を立てて開いた。扉の奥には先の見えない長い階段がある。いったいこの先にはどんな世界が待っているのだろうか。
終わりへと続く階段を下ると、熱風が肌にまとわりつく。そこは灼熱地獄だった。その祭壇の中心に真っ赤に燃える竜がいた。その竜はアリアたちをにらむと、その大きな赤い体をひるがえす。
「お前は誰だ」
アリアは頭の中に直接語りかけてくる声に困惑した。その声の主が竜だと気がつくと、アリアは剣を突きつけ、宣戦布告をした。
「私はアリア、父カイルを取り戻しにきた」
「カイル？　ああ、そんな人間が俺の体内に巣食っているな。お前はカイルの何なのだ？」
「娘よ」
「そうか。忌々しい奴の娘か。しかし、我に勝てるかな」
竜はアリアをじっと見据える。アリアは目標を定めた。オルファ

スは剣を抜く。アリアは水系の呪文を唱え、竜に向かって水のレーザーを放つ。一瞬にして辺りは水蒸気に包まれる。竜は平然としていた。突如、竜がジャンプし大地が震える。アリアとオルファスはその衝撃に耐えた。その次の瞬間、竜が二人に向かって炎の弾を吐く。二人はそれぞれに散った。

その時、アリアの頭の中に直接語り掛けてくる者がいた。先ほどとは違う、温かな懐かしい声だった。

「アリア、ドラグキャリバーを使うんだ」

「ドラグキャリバー？」

「そうだ」

しかし、竜に指一本触れることができないまま、時間だけが過ぎていく。どうしたら、竜の動きを止められるんだろう？　ドラグキャリバーってどうしたら使える？　アリアはその事ばかり考えていた。

「アリア！」

オルファスがアリアの名を叫ぶと共に、アリアを突き飛ばす。アリアの代わりにオルファスは竜の炎をまともに食らった。

「ああっ！」

オルファスが炎に包まれる。

「いやあーっ！　オルファス！」

アリアは水の魔法をオルファスにかけた。アリアの手元から水がシャワーのようにあふれ出て、オルファスに降り注ぐ。辺りは水蒸気でいっぱいになった。

「オルファス？」

水蒸気の消えた後には、全身やけどを負ったオルファスが倒れていた。アリアはオルファスに駆け寄ってひざまずいた。わなわなと手を震わせて、オルファスの肩に触れる。

「しっかりして！」

オルファスは答えなかった。その間にも、竜はアリアたちに近づ

いてくる。アリアは、こぶしをぐっと握り締めた。
「許さない……。どうして、私の大事なものばかり傷つけるのよ」
赤い髪は炎のように逆立ち、セピア色の瞳は怒りに満ちている。アリアのオーラが青白く変化した。アリアはオルファスを守るように立ち、魔法の呪文を唱える。まるで別人が乗り移っているようだった。アリアは右手にぐっと力を込めると、竜に向かって突き出した。
「ドラグキャリバー！」
巨大な炎の渦が竜を飲み込んでいく。ドラグキャリバーを食らった竜は、かなりのダメージを食らったようで、その動きを弱めた。アリアは天を握るように手をぐっと突き出して、魔法で光の弾をまとう。そして剣を抜き竜に襲い掛かる。それも狂ったように縦横無尽に竜を切りつけた。竜も反撃するものの、先ほどとは別人のようなアリアの動きに、かすり傷一つもつけることが出来ない。踊るように竜の攻撃をかわし、アリアは竜を切りつけていく。時折、魔法を使い、竜を翻弄する。やがて竜は力が尽きて倒れた。そのさまを眺め、ふっと冷笑を浮かべたアリアは剣を収め、竜に水の魔法で止めを刺した。
「ウォーターレーザー！」
水のレーザーが赤き竜の体を貫通する。竜は断末魔の叫びを上げ、光になって散った。

二十八　父との再会（前書き）

ＲＦ２を攻略した方はお分かりだと思いますが、この小説はかなりオリジナルになっています。
実は、南瓜はＲＦ２を攻略できていないので、ラスボス辺りはかなり想像です。
不愉快に思われた方は申し訳ございません。それでも良ければ読んでいってくださいませ。

二十八　父との再会

はっと我に返ったアリアは、オルファスに駆け寄った。
「オルファス、しっかりして……」
アリアの目から止めどなく涙が流れる。とにかく冷やさなくては。アリアは小川の水を汲んでは、オルファスにかけ続けるが焼け石に水だった。いっこうにオルファスは目を覚まさない。
「誰か、誰かオルファスを助けて！　このままじゃ死んじゃう。いやあっ、オルファス！」
アリアは泣き叫びながら、両手をオルファスに向けて、回復魔法をかけ続けた。
その時だった。

「若きアースマイトよ、こちらにくるのだ」
アリアの頭の中に、誰かが呼びかけてきた。アリアはオルファスを地面に寝かせると、何かに憑かれたように、ふらふらと神殿の祭壇に足を運ぶ。祭壇には台座があった。
「アースマイトの血を引きし者のみ、選ばれし者のみが使える。さあ、石版を置くのだ」
アリアは言われるままに、ダンジョンで手に入れた石版をそれぞれ置いた。
「台座に手を置き、ゲートリジェクトと唱えよ」
アリアはこくりとうなずいて、台座に手を置いた。
「ゲートリジェクト」
すると、祭壇の後ろの石壁が、ゆっくりと開き始める。石壁は扉だったのだ。扉の奥からは温かな白い光が漏れている。その中から人間らしき者が歩いてきた。
「パパ！？」
それはカイルだったのだ。

「アリア」
懐かしい父の声だった。アリアはカイルの腕にすがり、懇願した。
「パパ！　お願い、オルファスを助けて！　私をかばってこんなに、こんなに……」
カイルは今にも崩れ落ちそうなアリアを抱きかかえ、地面に横たわっている若者に駆け寄り、観察した。
「竜の炎だね？」
「はい」
カイルはアリアにオルファスを抱えるように指示した。アリアはオルファスの頭を膝の上に乗せた。カイルは二人に向かって両手を広げ、呪文を唱える。
「アリア、お前のオルファスを想う気持ちが、この魔法を完成させる」
「わかった、パパ」
アリアはオルファスを抱きながら、念じる。
（神さま、私の命を差し上げます。どうかオルファスを助けて）
アリアの想いを受けて、カイルは救命魔法をかけた。それは春のぬくもりのようだった。オルファスがその柔らかな光に包まれる。見る見るうちにオルファスの身体が白くなっていく。光が消えたとき、オルファスはゆっくりと目を開けた。そして視線をさまよわせた。カイルは二人にゆっくりと近づき、かがみこむ。
「オルファス、気分はどうかな？」
「ええ、なんとか」
その答えにカイルはうなずき、アリアに微笑みかける。
「オルファスはもう大丈夫だよ」
「ほんと？　パパ」
「パパが嘘をついたことはないだろう？」
「はい。良かった、オルファス」
アリアはオルファスを見つめながら、ぽろぽろと涙をこぼす。その涙はオルファスの頬を濡らした。

「私のせいでごめんね」
「いいって。もう、終わったみたいだな」
「うん、パパも取り戻したよ」
「よかったな」
オルファスはにっこりと微笑むと、ゆっくり目を閉じた。慌てるアリアをカイルが諭した。
「魔法を使ったとはいえ、早く病院で診てもらった方がいい。アリア、行くよ」
「はい」

＊＊＊

カイルがオルファスを背負い、三人は神殿を出た。カイルは外に出ると、やっぱり太陽の光はいいなと言った。二人は魔法エスケープを何度も使い、アルヴァーナへ帰還した。そしてオルファスをアルヴァーナ病院へ運び込んだ。
「すみません、けが人なんです！」
病院は上へ下への大騒ぎだった。何しろ二ヶ月以上行方不明になっていたアリアとオルファス、その上何年も失踪していたカイルが一緒だったからだ。レイとナタリーが懸命にオルファスの手当てをしてくれた。オルファスは二ヶ月ほどで退院できるらしい。

治療を施されたオルファスは病室に移された。アリアは、オルファスの元へ行き、ベッドの横に椅子を持ってきて座った。そして、布団から出ている彼の手に自分の手をそっと重ねた。
どれくらい時間が経っただろう。オルファスから離れないアリアに、ナタリーが声をかけた。
「アリア、オルファスは私たちが看ているから、今日はもう帰りなさい。マナやアルスが待っているわ」
アリアは、泣きそうな顔をしてナタリーを見つめた。ナタリーが

にっこり微笑み返すと、アリアはやっと腰を上げた。
「お願いします」
アリアはカイルと共に久しぶりの我が家へ戻った。

二十九　運命の人

牧場まで戻ってきた。二ヶ月ぶりの牧場の風景は変わっていた。畑には作物が植わり、牧草が海のようにたなびいている。アリアはドアを勢いよく開けた。

「ただいま！」

キッチンで料理をしていたマナは振り返り、動かなくなった。そしてアリアを認めると、駆け寄ってきて抱きしめた。

「アリア！」

涙を流して娘を抱きしめ、その髪をなぜ続けるマナに、カイルが声をかけた。

「マナ、ただいま」

ひどく懐かしい声だった。マナは声のするほうに顔を向けた。そこに立っていたのは、無精ひげを生やし薄汚れた格好をした、彼女の好きな優しい瞳の男だった。

「あなた……」

カイルはアリアからマナを受け取ると、きつく抱きしめた。マナの嗚咽が止まらない。

アリアは嬉しそうなマナの姿に満足して、二階に上がった。さて、可愛い弟を驚かせてやろうと、ドアをノックした。「はいどうぞ」と言う声を聞き、ドアをそっと開けた。

「アルス！」

「お姉ちゃん！？」

机で書き物をしていたアルスがびっくりしてアリアを見た。そして立ち上がり駆け寄ってきた。

「お帰り！　心配したんだよ」

「ごめんね」

アリアはアルスをぎゅうっと抱きしめた。痛がるアルスを開放す

ると、「お姉ちゃんは乱暴なんだから」とぶつぶつ口をとがらす。アルスも変わってない、アリアは嬉しかった。
「オルファスは？」
その言葉に、アリアは表情を暗くした。
「……病院にいるの。アルス、下に行こう」
アリアは無理やり笑顔を作る。アルスをびっくりさせたくて、カイルのことを黙ったまま、彼を下へ連れて行った。

アルスは、マナが誰かに抱きしめられているのを見た。最初誰なのかわからなくて、きょとんとしていた。アルスに気付いたカイルがマナを離し、アルスに向かって声をかけた。
「アルス、パパだよ」
「……パパ？」
カイルはアルスが物心つく前に失踪していたので、アルスには記憶がなかった。立ち尽くすアルスにカイルが歩み寄った。
「ただいま、アルス。パパやお姉ちゃんが留守の間、ママを支えてくれてありがとう」
その言葉を聞き、アルスはようやく実感した。カノンやロイが語ってくれた父のことを……。アルスの目から涙がぽろりとこぼれ落ちた。
「パパー！」
カイルにすがってワンワン泣くアルスを見て、マナとアリアは目を合わせ微笑んだ。

＊＊＊

夜、アリアはカイルに誘われて、家の外に出て星を眺めていた。久しぶりの星空を眺めたいというカイルのお願いだった。
「パパ、オルファスを助けてくれてありがとう」
「いや、アリアたちこそ、パパを助けてくれてありがとう」

そう言って、カイルは娘の頭を撫ぜた。すると、アリアはカイルに抱きついた。
「パパ……」
昼間はばたばたしていて、再会の喜びに浸る暇もなかった。カイルは、ポンポンとアリアの背中を叩いた。アリアは、それまでの苦悶を払うかのように、カイルに告げた。
「ずっと頑張ってきたの。ママが泣いてたから、私が泣いたらママが困っちゃうんじゃないかって。アルスが泣くから、大丈夫だよって慰めてあげなきゃいけなかったから」
カイルはけなげな娘が可哀相だった。自分がいなくなったために、大黒柱として頑張ってきた娘。
「これからは、パパがいるから、アリアは自分のしたいことをしていいんだよ」
「うん、ありがとう、パパ」
アリアは涙を拭いて、父を見上げた。
「オルファス、大丈夫かな？」
「大丈夫、ナタリー先生とレイ先生が見てくださっているのだから。心配かい？」
「うん」
アリアの瞳が不安で揺れているようだった。心底心配そうな娘の様子に、カイルは少しさみしさを感じた。
「アリアにとって、オルファスはどういう存在なのかな？」
「親友、……戦友かな」
「そうか」
カイルは、アリアの髪をなぜながらうなずいた。
「冷えてきたね。さあ、もう家に入ろうか。明日は見舞いに行こう」
「うん」
二人は家へ入った。

＊＊＊

翌日病院でオルファスに付き添っていたセシリアに、アリアとカイルが謝罪した。
「セシリアさん、オルファスをあんな目に合わせてしまってごめんなさい」
セシリアはアリアの肩に手を置いて、首を振った。
「いいのよ。あの子の意志で、あなたについて行ったんだもの。オルファスを連れて帰ってきてくれただけでも感謝しているわ」
セシリアはカイルの方を向き、涙を流した。
「カイルさん、おかえりなさい」
「ただいま。留守中はマナや子供たちのことでいろいろ世話になったね。ありがとう」
「いいえ」
カイルとセシリアは、つもる話があるようで病室を出て行った。

残されたアリアは、眠るオルファスのベッドの横の椅子に座る。きれいに整ったオルファスの白い顔。長くてきれいな金髪は竜の炎で焦げてしまったので、短くカットされていた。グルグルに巻かれた身体の包帯を見ながら、胸を痛める。

――どうして、あの時飛び込んできたの？

身を挺して、自分をかばってくれた。危ないときは逃げるって約束したのに……。
アリアの胸に、あの時の思いがよみがえる。オルファスが動かないと知った時、頭が真っ白になって、どうしていいかわからなかった。死んでしまう、そう思ったとき絶望して、涙が止まらなかった。父が救命魔法をかけるとき、自分の命と引き換えても構わないと思った。

アリアが出口の見つからないことに思いをはせていると、オルファスが目覚めて、アリアを見た。
「アリア」
「おはよう、気分はどう？」
「おかげさまで、すこぶる良いよ」
オルファスが布団から手を出して、アリアに向けて伸ばしてきた。アリアはその手を両手で包み込んでたずねた。
「どうしたの？」
「なんでもない」
オルファスは顔をほころばした。嬉しかった。手を伸ばせば、アリアが手を取ってくれる。アリアの中を自分はどのくらい占めているのだろう。
「早く良くなるといいね」
「そうだな。アリア、約束覚えているか？」
「うん、無事帰ってきたらってやつでしょ？　退院するまではお預けね。無事じゃないんだから」
「ひどいな」
きっとアリアは自分の気持ちなんて、これっぽっちも気付いてないのだろうとオルファスは思った。アリアは、ふふっと笑うと、オルファスの手をぽんぽんと軽く叩いた。
「早く良くなって。疲れちゃうといけないから、もう行くね」
「見舞いありがとう」
「明日、また来る」
アリアはそう言うと、オルファスの手を布団に納めて立ち上がり病室を出た。

ドアにもたれかかり、両手を見つめた。オルファスを包んでいた両手が熱く、胸の鼓動が早いのだ。オルファスに見つめられると、胸がきゅっとしめつけられる。
（どうしたんだろう、今までこんなことなかったのに……）

二十九　運命の人（後書き）

次回、最終話です。

最終話　つながれた手

夜、カイルはバレットの元を訪れていた。
「バレット、今までありがとう」
「いや、俺は何もしていないさ」
バレットらしい物言いに、カイルは苦笑する。そこへドロシーがお酒を運んできた。
「ドロシーもありがとう。子供たちが世話になって」
ドロシーはにっこりと笑みを浮かべると、「私こそ楽しい思いをさせてもらいました」と答えた。今ではすっかり人馴れしたドロシーであるが、カイルが初めて会ったころは人見知りが激しかった。カイルが何度も話しかけるうちに、だんだん心を開き、今ではかなり話せるようになったのだ。そんなドロシーとバレットの仲を取り持ったのもカイルである。
「ところで、どうしていなくなったんだ？」
「そこから話さなきゃいけないのかい？」
カイルは困ったようなそぶりを見せたが、お酒を飲みつつ語り始めた。

マナがアリアを宿した年、社で何者かが、自分の宿命について語りかけてきた。
「七年後、社に来い」
その七年後が近づいてくると、忘れていた記憶がよみがえってきた。その記憶とは自分がアルヴァーナへ来た理由だった。アルヴァーナの地下にいる、千年の眠りから覚めようとしている赤き竜を封印する使命。
そしてあの嵐の夜、それは赤き竜の封印が解けるときだった。パレルモ神殿で赤き竜を封印しようとしたが力及ばず、自らの魂を持って、直接赤き竜の体内でその力を抑えたこと。いつか、アリアか

アルスがアースマイトとしての血に目覚め、赤き竜を封印しに来てくれることを祈り続けていた。

「こうやってバレットと飲み交わす日がくるなんて思っていなかったけどね」

カイルは最後にそう付け加えた。

「アリアは本当に良く頑張った」

「いや、周りの人たちがあの子を支えてくれたから」

バレットはグラスを傾けながら、うんうんとうなずいていたが、そんな事よりと、カイルの耳元でささやいた。

「オルファスのことはどうするんだ？　あれは本気だぞ」

「それなんだよ」

カイルは情けない顔をした。久しぶりに再会した娘は美しく成長していたが、男連れだった。久しぶりの再会だというのに、自分をそっちのけで、男を助けてくれと懇願したのだ。事態が事態であったためだろうが、「あれはかなりショックだったよ」と洩らした。

「再会したばかりなのに、もう手放すことになるかと思うとさみしいよ」

そんな二人の会話を耳にしたドロシーが、クスクスと笑う。

「プレイボーイで有名なカイルさんの言葉とは思えませんね」

「ドロシー、君、僕のことをそんな風に見ていたの？」

「ええ。どれだけ若い女の子が涙したことか」

参ったなと言いながら、カイルは頭をかいた。

「あれは、親切にしていたつもりなんだけど」

「いや、俺も妬いたことがあった」

バレットの言葉にドロシーはポッと頬を赤く染めた。

そんな三人は子供たちの将来について楽しく語らい夜を明かした。

＊＊

アリアは毎日学校が終わると、オルファスの元へ通った。そうする事が当たり前のように。顔を見ない日があるほうが彼女にとって異常なのだ。でも、一つ問題があった。
「オルファス、リンゴ食べる？」
「食べる」
オルファスがうなずくと、アリアはリンゴをむき始めた。
「アリア」
「なに？」
アリアは、リンゴからオルファスに視線を移すと、ドキリとした。自分をじっと見つめる彼の瞳。だめだ、また胸がきゅっとする。それが問題なのだ。慌てて目をそらし、リンゴをむくことに専念する。見つめているのに視線をそらされる。そんなアリアの態度に、オルファスはがっかりした。そして、アリアの反応を確かめるように話を投げかける。
「明日、退院なんだ」
「そ、そうだったね。おめでとう」
アリアは、リンゴから目を離そうともしない。かたくなにリンゴをむき続けている。
「セレッソ、咲いているのか？」
「ええ、満開よ」
リンゴをむき終わったというのに、アリアは相変わらずリンゴを凝視している。オルファスは、リンゴを一切れ指でつまむと口に入れて、モグモグと食べだした。
「明日、お花見しないか？」
「う、うん。じゃあ、セレッソの下で待ってる。学校が終わる時間でいい？」
「いい」
一時間もすると、アリアは帰っていった。パレルモ神殿から帰って二ヶ月、オルファスはアリアの変化を見逃さなかった。今までと

は違う、自分を見る目、自分に見せる恥じらい、ロイに向けていたものが自分に向かっているのだ。そんなアリアの姿を見てオルファスの心は熱くなる。でも、オルファスが自分の気持ちをぶつけようとすると、するりとかわされる。

「参ったな……」

オルファスは窓の外に目をやった。薄紅色の花びらが風に舞っている。

（明日は受け止めてもらわなくちゃな、アリア、逃がさないからな）

＊＊＊

翌日、アリアはセレッソの樹の下で、オルファスが来るのを待っていた。待っているのが無性に長く感じられる。はらはらと舞い散る薄紅色の花びら。小さい頃から変わらずに美しく咲き続けている。アリアはセレッソを見上げていた。オルファスがお花見に誘ったのは、きっとパレルモ神殿へ行く前に言っていたことだろう。退院するまでお預けと言ったのはアリア自身である。いったい、彼は何を伝える気なのだろうか？

ぽかぽかと暖かい陽気の中にいると、とても気持ちがいい。すると、肩に手がそっと置かれた。

「ひゃっ！」

振り返ると、オルファスだった。

「びっくりさせないでよ」

「びっくりさせるつもりじゃないけど？」

オルファスは、何食わぬ顔で言った。そして、セレッソを見上げながらつぶやいた。

「きれいだな」

「そうね」

オルファスはアリアに向かって手を差し伸べた。アリアはその手

に自分の手を重ねようとしたが、触れそうになると手を引っ込めてしまった。オルファスは、軽くため息をつくと、強引にアリアの手を取った。アリアはびっくりした。でも手を通して伝わってくるオルファスのぬくもりは、アリアを安心させた。
「六歳のときの結婚式ごっこのこと、覚えているか？」
「えっ」

六歳の頃、二人は教会で愛を誓い合ったのだ。ゴードンからは、ませた子供だと笑われたが、そのときの二人は、子供なりに真剣だった。アリアは、その時の事を思い出していた。ステンドグラスから差し込む色とりどりの光の中で、永遠の愛を誓った。

――病めるときも健やかなる時も、死が二人を分かつまで。

「なんだよ、覚えていないのか？」
「う、ううん。そんな事無いよ」
アリアがしどろもどろになると、オルファスはアリアの顔を覗き込んだ。切ない表情で自分を見つめる彼。アリアの胸がきゅっとしめつけられる。
「俺の気持ちは変わらない。好きだ」
オルファスの告白を聞いて、アリアは赤くなった。……好き！？

「私、セシリアさんみたいにおしとやかじゃないよ」
「別に、母さんが趣味じゃない」
「魔法が使えるのよ」
「うらやましいよ」
「剣を振るうのよ」
「いいじゃん、俺だって振るうし」

もういいだろう？　と言って、アリアの手をぎゅっと握り締めた。

「俺を見ると、胸がきゅっとするだろ？」
「ど、どうしてわかるの？」
「だって、その手、胸を押さえているじゃないか」
（ううう、ばれている）
「ドキドキするだろ？　離れたくないだろ？　アリアは俺のこと好きなんだよ」
「や、やだ！　勝手に決めないでよ」
アリアは手を振り払った。そのときである、オルファスが、うっ、とうなって崩れ落ちた。
「ど、どうしたの？」
アリアもしゃがみこんで、オルファスの肩をつかんだ。オルファスは膝立ちになり、胸に手を当て、眉間にしわを寄せて、辛そうな表情を浮かべている。
「やだ、苦しいの？　病院行く？　ねえ、オルファス！」
「ダメみたいだ」
なおも苦しそうなオルファスに、アリアの均衡は崩れた。あの時の、パレルモ神殿で竜の炎を食らった時の事を思い出したのだ。
「死んじゃだめ、私をおいていかないで！」
あとは、涙ぐむアリアの声だけがもれる。オルファスは、胸を押さえながら反論した。
「アリアは俺のこと、……なんとも思っていないんだから関係ない」
「そんな事ない、大好きよ。だから、一人にしないで……」
彼の肩に手を置いたまま、泣き出したアリア。

「やっと言った」
オルファスは、顔を上げてクスリと笑うと、指先でアリアの涙をすくった。
「え！？」
「なかなか迫真の演技だったろ？」
けろりとして話し出すオルファスに、アリアはぷるぷると手を震

わして叫んだ。
「ひどい！　ほんとに心配したんだから！」
オルファスは、自分の胸を何度も何度も叩くアリアの両手をつかんだ。アリアは、涙で潤んだ瞳でオルファスをにらみつける。そんな彼女を、オルファスは慈愛を込めてじっと見つめた。熱っぽく見つめられたアリアは、恥ずかしくなり怒りの矛先を失った。
「アリアが素直じゃないからさ。嫌だって言ったってダメだ。もう、離さない。アリアは俺のもの」
オルファスの言葉に、アリアは観念したようで、振り上げていた両手を下ろした。
「オルファスの意地悪……」
オルファスは微笑むと、アリアに手を差し伸べる。すると、今度は素直に手を重ねた。
夕陽は、そんな二人を茜色に染めていく。セレッソの花びらは燃えるような紅い色に変わり、二人の頭上に降り注いだ。

完

最終話　つながれた手（後書き）

本編終了です。長い間読んで下さりありがとうございました。この後番外編を書いてみようと思っています。そのときはよろしくお願いします。

番外編・アリアに迫る男（前書き）

番外編は【糖分過剰】です。
バトルはありません。アリアとオルファスの恋愛話です。
甘い雰囲気が苦手な方はお控え下さい。

番外編・アリアに迫る男

それから更に三年後、アリアとオルファスは十八歳になった。
アリアは、母のように髪を長く伸ばし始め、もう背中の真ん中ほどまである。くせ毛のせいか、赤い髪はゆるくカーブを描いている。先の戦いの後、アリアは剣を捨てた。それは、オルファスの意向でもある。そのせいか、年頃のせいなのかわからないが、身体は丸みを帯びてすっかり女の子らしくなった。
一方オルファスは、精悍な若者に成長し、先の戦いで切った髪も元通りになった。彼の意思を表すようなストレートの美しい金髪は肩までにカットされている。背はアリアよりもはるかに大きくなった。
二人は学校を卒業し、オルファスは王国の大学に進学する。まだ固いつぼみをつけたセレッソの樹の下で、オルファスとアリアはたたずんでいた。
「生まれて初めてだね。離れて暮らすの」
「そうだな。生まれたときから一緒だった。アリア……」
オルファスは、アリアに向かい合い、頬に手を添えた。
「四年待っていてくれないか？　必ず迎えにいく」
「うん、待ってる」
アリアの瞳からぽろりと涙がこぼれ落ちる。オルファスはアリアの涙をそっとぬぐった。
そして二人は、お互いの両親に気持ちを伝え婚約する。その一週間後、オルファスは王都へ向けて旅立って行った。

季節は秋、畑には、ジャガイモやニンジン、サツマイモ、ホウレン草、ピーマンが実っている。畑の片隅には、アリアの好きなチャームブルーも咲きほこっている。
オルファスが旅立って半年が経つものの、さみしさがいまだ癒え

ないアリアを誘惑する男が現れた。カノンとロイの息子のロディだ。齢(よわい)五歳にして、毎日野の花を摘んでは、アリアに捧げに来る。
「アリア、おはよう！」
「おはよう、ロディ。ありがとうね」
差し出されたチャームブルーの花束をアリアは受け取ると、にっこり微笑んだ。
「ねえ、今日は何をお手伝いしたらいい？」
「野菜を収穫するの。お願いね」
「わかった！」
大きな声で返事をすると、ロディは地面に置いてあった籠を抱えて、畑へ走っていった。アリアも籠を持って後を追う。二人で、ホウレン草やピーマンを収穫していると、ダンジョンで農作業を終えたらしいカイルとアルスが戻ってきた。
「やあ、ロディ。いつも助かるよ」
カイルが声をかけると、ロディは鼻の下をこすりながら嬉しそうにうなずいた。鼻の下をこするくせは父ロイと同じである。
「遠慮しないでよ。おいら、将来アリアの旦那さまになるんだから」
ロディの言葉に、三人は顔を見合わせた。

その晩の夕食時のことだ。花瓶に生けられたチャームブルーを見ながら、マナがつぶやいた。
「アリアはもてるわね」
そこへアルスが口を挟む。アルスも十六になっており、アリアよりも大きくなり、すっかり幼さが抜けている。
「ロディは、姉さんの未来の旦那になるんだって」
「へえー、やるわね。毎日花を持ってくるのは、そういうことだったの」
感心したようにうなずくマナに、アリアはむっとした。
「もう、私をおかずに遊ばないでよ」
そんなアリアを、優しげに見ていたカイルがたずねた。

「オルファスから連絡はあったのかい？」
アリアは首を横に振った。
「ない！　あっちに行ってから一回もない。私、何度も手紙を送ったのに返事もくれないの」
怒り気味のアリアに苦笑しながら、カイルは慰めた。
「きっと、勉強が大変なんだろう。オルファスは真面目な子だから心配はないと思うよ」
カイルは気を使ったのだろうが、そう言われるとかえって要らぬ心配が頭をもたげてくるものである。
（ひょっとして浮気してるんじゃないかしら？）
王都の娘は、みんなおしゃれでおしとやかだと聞いたことがある。それに比べると、アリアはおてんばだし、毎日泥だらけになりながら農作業をしているのだ。

食事を終えて自室に戻ったアリアは、机に向かってオルファスへの手紙をしたためていた。
「これを読んだら、返事くれるかな」
アリアは一人で笑いながら、書き終えた手紙を封筒に入れた。

番外編・突然の訪問者

オルファスに当てて手紙を投函した二週間後、いつものようにロディがアリアに野の花を捧げ、畑の手伝いをしていたときだった。牧場の入り口から男がやってくる。金色の髪をなびかせてアリアの前で立ち止まった。

「お前、誰だよ」

男に気付いたロディが二人の間に割り込んだ。鋭い視線にアリアが顔を上げる。

「オルファス……」

「アリア、言い寄ってくる男って誰だ？」

アリアはびっくりした。手紙の返事を期待していたのに、本人が現れたのだ。そして迫ってくる男を教えろと言う。

「お前、アリアの何なんだよ。アリアはおいらの未来のお嫁さんなんだからな」

オルファスは、下を見てぎょっとした。

（こいつ！？）

アリアが申し訳なさそうな顔でオルファスを見る。そんなアリアに呆れながらも、小さな芽でも摘んでおかなくちゃなと、オルファスはかがみこんで、ライバルに宣言した。

「俺はアリアの婚約者だ」

ロディは困惑したような表情をした。五歳の子供に婚約という意味も解るわけがない。アリアは膝をついて、ロディに語りかける。

「ロディ、この人は私のお客さまなの。お手伝い続けてくれる？」

「わかった。お前、アリアに手を出すなよ」

ロディは捨て台詞を残して、畑に戻っていった。

オルファスはロディから見えないところまで、アリアを引っ張って行った。

「会いたかった」
「私もよ」
二人は額をつき合わせ、手を固く握り締めた。オルファスは握った手をほどくと、アリアの髪を優しくなぜた。しかし、意地悪そうな目つきで質問をした。
「ところで、これはどういう事なんだ？」
「だって、オルファスが連絡をくれないから……。ああやって書けば連絡してくれるかなって」
「あんな手紙をもらったら、居ても立っても居られるわけないだろ？」
「ごめんなさい」
うなだれるアリアの髪を一すくいすると、オルファスは口元へ持っていく。その行為にアリアの胸は震えた。
「いや、俺こそ悪かった。連絡しなくて」
「ううん。でも、嬉しい。飛んで帰ってきてくれて。すぐ、王都に戻るの？」
「いや、一週間こっちにいる。ロイのガキに俺が居るってこと教えてやる」
アリアは、オルファスが嫉妬しやすいんだと初めて知った。

番外編・彼のやきもち

翌日から、アリアは二人の男性に花束を捧げられた。
「おい、お前！　どうしてまた来たんだ？」
「だから、婚約者だと言っただろう。うちに帰って、母さんに聞いて来い」
バチバチと火花を散らす十九歳と五歳。アリアは二人の様子をポカンと見ていた。
（オルファスってこんなに熱い人だったっけ？）
彼らを遠巻きに見ていたカイルとマナとアルスは苦笑いしていた。
「まあ、オルファスの浮気の心配はないわね」
マナは安心したようにつぶやいた。

三人で畑の仕事を終えて、休憩をしているときのことである。ロディがアリアの膝にちょこんと座った。
「おい、ロディ。アリアから離れろ！」
「嫌だもんね。ここはおいらの指定席だい！」
ロディは鼻の下をこすりながら、得意げに言った。オルファスはその癖をいまいましく感じていた。幼いときからずっとアリアの心を奪っていた男の癖。
「アリア、そんな事をさせているのか？」
「だって、五歳の子よ？」
アリアは、どうしてオルファスが怒っているのかわからないようだった。オルファスも、そう反論されては大人気ない気がして、押し黙った。ロディはしてやったりという顔をしている。そしてオルファスに追い討ちをかけた。
「アリア、眠い」
「まあ、いいわよ、ねんねして。あとでおうちに連れて行ってあげるから」

「うん」
ロディは眠そうにアリアの胸に顔をうずめる。オルファスが凝視していると、ロディは片目を開けてオルファスをチラリと見た。そしてニッと口の端を吊り上げた。
（こいつ、確信犯だ）
「アリア、そいつをベッドに連れて行く」
「いいよ、今、動かしたら起きちゃうし」
アリアにたしなめられて、オルファスはまたしても押し黙ってしまった。なんていうガキだ、と憤慨した。しかしロディは瞬く間に眠りに落ちた。アリアは、ロディの髪をなぜながらつぶやいた。
「寝ちゃったね」
アリアの胸で気持ち良さそうに、口をポカンと開けて眠るロディを、オルファスは複雑な気持ちで見ていた。いつか、自分たちの間にも子供が出来たら、俺はこんなにも嫉妬するのだろうか？　と。
「オルファス？」
心配そうに見つめるアリアに、オルファスは、なんでもないと答えた。

結局、オルファスがロディを背負い、二人はロイとカノンの家に向かった。ドアをノックすると、すっかりママらしくなったカノンが出迎えてくれた。
「あら、オルファスじゃない。元気にしてた？」
「おかげさまで。カノン、ロディを引き取ってよ」
「迷惑かけてごめんなさいね」
そう言いながら、カノンはロディを取り上げ抱きかかえて、家の奥へ入って行った。そして、一人で出てきた。
「オルファス、ごめんなさいね。ロディったらアリアにべったりで」
すると、アリアは気を使うように答えた。
「いいのよ、私も楽しいし。ロディのおかげでオルファスも帰ってきてくれたし」

アリアは嬉しそうにクスクスと笑った。そんなアリアを横目で見ながら、カノンはオルファスに忠告した。
「オルファス、あんまりアリアを放っておくと、ほんとに悪い虫がつくわよ」
「カノン、やめてよ」
アリアは困ったような顔をした。それを無視してカノンはしゃべり続ける。
「最近、アルヴァーナにも外からいろんな人が来ているんだから」
オルファスが怪訝そうな顔をすると、カノンは説明し始めた。
「最近、若い男がいっぱい来ていて、アリアったらもてるのよ」
「もう、やめてってば」
アリアは、祖父のダグラスの雑貨屋へ手伝いに行っている。アリア目当ての観光客も少なくない。オルファスはその話を聞いて、立ち上がった。
「邪魔したな。ロイによろしく」
「ええ、オルファスも元気でね」
むっとしたオルファスの様子に、カノンはしてやったりと微笑んだ。似たもの親子である。

オルファスたちは牧場まで戻ってくると、大きな樹の下へアリアを連れて行った。ロディなんて問題じゃない。相手は大人の男なのだ。手紙をもらって心配していたことが現実となっていたのだ。
オルファスはアリアの髪をなぜながら、彼女を見つめた。
「手伝いだけど、やめてくれないか」
「でも、一人だとおじいちゃん大変だし」
「心配なんだ」
そう告げると、オルファスはアリアの手をぎゅっと握った。
「大丈夫、お客さんなんだし、困った時はおじいちゃんが助けてくれるもの」
にっこり笑うアリアに、オルファスは彼女の祖父ダグラスを思い

浮かべた。あの人なら、孫娘に近寄る男は全て排除するに違いない。そう思うと、少し気が楽になった。でも心配は心配だ。店以外の場所で、迫られたらどうするんだ！？

「やっぱりダメだ」

やきもち妬きの彼の言葉にアリアは苦笑する。カノンがあおるから、目いっぱい不安に駆られているようだ。どうしたら、安心してくれるかしら？　アリアは彼を見つめながら頭をフル回転させた。しかし、オルファスの心配はとどまるところをしらない。

「四年なんて待てない。今すぐ俺のところに来ないか？」

「ダメよ、オルファスの勉強の邪魔になっちゃう」

「アリアの心配をして悶々と過ごすよりましだ」

アリアはセシリアとジェイクを思い浮かべた。高いお金を払って、一人息子を王都の大学に通わせている二人のことを考えると、肯定できなかった。

「私、オルファスの休みに合わせて王都へ行くし、オルファスもたまには帰ってきてくれれば嬉しいな。ね、そうしよう？」

「アリア……」

アリアの言葉にオルファスは渋々うなずいた。

番外編・彼のやきもち（後書き）

どなたか存じませんが、評価していただきありがとうございます。
私自身が初投稿でここのルールを知らないので、どうしていいかわからず、とりあえずこの場を借りてお礼申し上げます。

番外編・アリア、王都へ行く

オルファスは予定を切り上げて王都へ戻ることになった。アリアも一緒である。

「二人で旅するのってダンジョン以来だね」

アリアは、馬車の隣の席に座るオルファスに話しかけた。こうやって遠出をすることも久しぶりである。

「そうだな、ところで、そんなに何を持ってきたんだ？」

オルファスは、パンパンに膨れ上がったアリアの大きなバッグを見て質問した。

「着替えとか。女の子っていろいろ要るのよ」

顔を赤らめてバッグを抱え込むアリアに、オルファスは嘆息した。結局は自分が持つんだから、コンパクトにまとめて欲しかったのだ。しかし、オルファスはふと気付いた。

「アリアって、そんな服持っていたか？」

「う、うん」

アリアが着ているのは、フリルがいっぱいのブラウスにふんわりと広がったスカート。窓枠にひじをついて、頭をもたれかけさせていたオルファスの目が細くなった。

「似合ってる」

オルファスに褒めてもらい、アリアはすごく嬉しかった。

実は、ラムリアにオルファスの下宿先に行くと伝えたら、ラムリアが指南役を買って出てくれたのだ。

「アリアは全然おしゃれじゃないんだから。そんなことじゃ愛想をつかされますわ」

そう言って、ラムリアは自分のクローゼットから、アリアに似合いそうなものを見つくろった。そして、服から小物まで貸してくれたのだった。

（ラムリア、ありがとう！）
アリアは、アルヴァーナにいるラムリアに感謝するのだった。

がたごとと馬車に揺られること半日。王都の町はたくさんの人でにぎわい、ワイワイと楽しそうである。道の片隅を見ると、灰色の巨大な四角い物体に人が吸い込まれていくのが見えた。
「いやっ！　マンモスが人を飲み込んでいるわ」
アリアは、武器をアルヴァーナに置いてきたことを後悔した。アリアが胸の前で手をぐっと握る。慌ててオルファスは、アリアが魔法を使えないように抱きしめて説明した。
「アリア、あれはバスという人を運ぶ乗り物なんだ」
「そ、そうなの？」
アリアは、オルファスの説明に握っていた手をほどいた。オルファスはほっと胸をなでおろす。アリアには刺激的過ぎる王都の光景だった。そんなアリアをオルファスは優しく誘う。
「疲れただろう？　今夜の食事はレストランへ行こう」
「レストラン？」
「食事をさせてくれるところだ」

オルファスに手を引かれ、アリアはついていく。こじんまりとした店は可愛らしかった。洋食屋と書かれた看板がかかっており、ショーウインドにはメニューのサンプルが並べられている。アリアはそれをじっと見た。見た事のあるものもあるし、無いものもある。オルファスに促がされて中に入ると、店主が愛想よくむかえてくれた。
「いつものやつを二人前頼みます」
「はいよ。おっ、そっちの子はオルファスのこれかい？」
店の主人は小指を立てながら笑った。オルファスは、「そうです」と答えて席に着いた。アリアも続いて、オルファスの向かいに座った。テーブルには、赤いクロスが掛けられ、一輪挿しには、ミニヒ

マワリが生けられている。
「いつもここで食べているの？」
「そうだ」
そんなことを話していると、料理が運ばれてきた。湯気の立ったおいしそうなハンバーグステーキに具沢山スープにグリーンサラダだ。都会の人は肉というものを食べるらしい。店主は料理を配膳すると、アリアをじっと見た。
「べっぴんさんだな。オルファスにはもったいないくらいだ」
店主のお世辞に戸惑いながらも、アリアは軽く会釈をした。
「オルファスがいつもお世話になっています」
「いいってことよ。おれっちもオルファスが来てくれると嬉しいんだ」
店主は、「ごゆっくり」と言って厨房へ戻って行った。
「良いおじさんね」
「ああ、いつも俺の話を聞いてくれるんだ」
アリアは店内を見回した。オルファスがいつも食事をするところ。どうも、自炊はしていないらしい。身体が心配だけれど、この料理なら大丈夫かなと少し安心したアリアだった。

食事を済ませた後、食料品店で買い物を済ませ、オルファスの住む家へ向かった。
「ここなのね」
「そう。アルヴァーナと比べると狭いんだけど」
確かに狭い。王都の町自体がひしめき合っている。部屋の中に入ると、中は意外なほどすっきりしていた。机と本棚とソファとベッドがあるだけ。クローゼットがついているのでタンスは置いていないいそうだ。キッチンには小さな冷蔵庫と二人掛けのダイニングテーブルがあり、ガスは一口コンロだ。アリアが、買ってきた食材を冷蔵庫にしまっていると、オルファスが隣に来て、ささやいた。
「明日、大学へ行くか。アリアにも見て欲しいし」

「うん」
オルファスはアリアにベッドを使うように勧め、自身はソファで眠った。

番外編・彼のキャンパスライフ

翌朝目覚めたアリアは、さっと身支度を済ませるとエプロンをつけて、キッチンに入る。昨日買い込んだ食材を冷蔵庫から取り出した。パンをトースターで焼き、サラダを作り、オムレツを作った。お湯を沸かし、コーヒーを淹れると、オルファスを起こしに行った。

オルファスはソファでまだ眠っていた。こうやって彼の眠っているところを見るのは、パレルモ神殿の時以来である。

「おはよう」

そう言って揺すると、オルファスは目をこすりながら、「おはよう」とつぶやいた。「食事が出来たからね」と告げると、オルファスは洗面所へ入って行った。それを見届けると、アリアは窓を開けた。下を見下ろすと、朝だというのに騒々しかった。

「どうした？」

オルファスがアリアの後ろから声をかける。

「こんなに早くからせわしなく人が活動しているの」

「ここは騒々しいから。新聞配達人や、犬の散歩、ジョギングする人とかさ」

「ふうん」

そんなアリアを見てオルファスは目を細める。俺も初めてここへ来たときは驚いたもんなと。オルファスは、「早く食べたいな」とアリアの手を取って、キッチンに向かう。アリアがコーヒーをカップに注ぐと、朝食が始まった。

「おいしい」

「そう、良かった」

向かい側で微笑むアリアに、オルファスは嬉しくなる。いつも一人で食べる食事は味気ない。向かい側にアリアが居てくれる。なんとか呼び寄せられないものだろうかと考えるが、きっと親たちに許してもらえないだろうし、意外と頑固なアリアがうんと言わないだ

ろう。早く三年が経ってしまえばいいと思うのだった。

食事を終えた二人は、早速大学へ向かった。大学までの道のりで、オルファスはいろんな事を教えた。自分が使う店、友人のアパートなど。

大学は、立派な門構えだった。ヘリチャコス邸よりも大きかった。目を丸くしているアリアにオルファスはクスリと笑った。

「アリア、目ん玉が落ちる」

「えっ、だ、だってすごく大きいんだもん。神殿みたい」

オルファスはアリアの手を引っ張って歩き出す。奥へ進むと、校舎が見えてきた。オルファスはそれを指差した。

「あそこで勉強してる」

「ふうん」

オルファスは向かい側から、やってくる人物に目を留めた。チッと舌打ちをした。厄介な奴がやってきた。同じ学部に所属する女だ。別にもてようとしているわけでもなく、他人と、特に女とは距離を置くようにしている。しかし人の好みはわからぬもので、むすっとして愛想の悪い自分が好いと、つきまとう人も中にはいた。

（休みだから会うことも無いと思っていたのに……）

オルファスは覚悟を決めた。

「オルファス、おはよう」

「おはよう」

「そちらの方は？」

「俺の婚約者のアリアだ」

女はぎょっとした顔をし、オルファスの空いている手を握った。

「そんな女はやめてよ」

オルファスは手を振り払った。

「そういう事だから、俺のことは諦めてくれ」

そう告げると、オルファスはアリアを引っ張ってその場を立ち去

った。

二人は黙って大学の構内を抜けて大通りへ出ると、公園へ向かう。そして公園のベンチに座った。

オルファスは先ほどの女のことを話し始めた。大学の同期生であること。金持ちのお嬢様で、なんでも手に入ると思い込んでいること。説明を聞いたアリアは微笑んだ。

「そう。でもさっきちゃんと紹介してくれたから」

「アリア」

「でも、ちょっと心配。いつか誰かにオルファスを取られちゃいそう」

目に涙を浮かべたアリアだった。アルヴァーナでオルファスに心配されたことが、今自分の身にも起きている。そんなアリアの心配を見越して、オルファスは彼女の手をぎゅっと握る。

「そんなに心配か？」

「うん」

自分を潤んだ瞳で見つめるアリアの頬に手を添える。

「全然問題ないだろ？　俺にはアリアだけだ」

「うん。……ちゃんとアルヴァーナで待ってる」

アリアはオルファスの胸にこつんと頭をつけた。

番外編・カルディアの勇者

翌年の夏、アリアは王都のオルファスのところに来ていた。そしてオルファスのアパートで、食事中である。
「アリア、食事が終わったら、星を見に行こう」
「うん」
食事を終えた二人は、夜の街に出る。町のはずれの街灯の少ない公園に来た。でもアルヴァーナに比べると、見える星は格段に少ない。星の観察会のことを思い出す。あの時、二人はあぶれた者同士でペアを組んだ。もちろん、オルファスにはあぶれた者という意識はなかったが。
「星座があっという間にわかっちゃうね」
「そうだな。アルヴァーナじゃ星が多すぎてわからなかった」
アリアはオルファスの腕にもたれてぼそっと呟いた。
「卒業したら、アルヴァーナで星を見ようね」
「わかった。アリアは何を祈った？」
「こうして、オルファスとずっと一緒に居られますようにって」
オルファスはアリアをゆっくりと引き寄せる。二人の影はゆっくりと重なった。

翌日アリアとオルファスは動物園に向かった。アリアにとって動物園は初めて行く所である。オルファスは、アリアがびっくりしないようにあらかじめ説明をした。
動物園に入ると、アリアは、やはりびっくりした。いろんなモンスターが、オリと呼ばれる箱の中に閉じ込められている。
「ねえ、どうして？」
オルファスは、小さい子供のように質問するアリアに、なだめるように話して聞かせた。
「ここは町の中で、逃げられると危ないだろう？　それに動物園で

働く人間は、モンスターの世話をして、それを見に来る人間から観覧料を取って生活しているんだ」
「そう……。でも、こんな狭いところに閉じ込められて可哀相ね」
オルファスはアースマイトとしてのアリアの気持ちを考えると、気の毒に思った。人間のすることはひどいとも思う。母セシリアもモンスターとは友達になれると、常日頃から言っている。
「出ようか」
「ええ」
ひどく気落ちしたアリアを連れて、動物園を出た。

併設の植物園に入る。エントランスには噴水があった。そして噴水の前には掲示板がある。
「掲示板を見ると、思い出しちゃうんだよね」
楽しそうに話すアリアを、オルファスは怪訝そうに見た。何かいやな予感がするのである。
「何を？」
「オルファスからの依頼とか」
それを聞くと、オルファスは触れられて欲しくないのか、プイッと横を向いた。アリアは困った顔をしていたが、置いてあったチョークを取って、掲示板にさらさらと書き出した。

――今度はアルヴァーナで会おうね　アリア

オルファスはそれを見て、了解とつぶやくと消した。
「どうして消しちゃうの？」
「他の奴にクエストを取られたくない」
オルファスのやきもち妬きを思い出したアリアは、クスッと笑った。その時、突風が起こり、アリアの白い帽子が飛ばされた。
「あっ！」
アリアは急いで帽子を追いかける。風に乗って舞い上がっている

つば広の帽子は、中々落ちてこない。すると、中年で背が高く品の良い男性が帽子を取ってくれた。
「随分飛ばされましたね」
「ありがとうございます。あ、あなたは」
「駅でお会いしましたね」
その男性はにっこりと笑い、アリアに帽子を渡した。

中々戻って来ないで、男と話し込んでいるアリアに業を煮やして、オルファスが追いかけてきた。
「アリア」
アリアはオルファスを認めると、ニッコリ微笑んだ。
「オルファス、この方がね、帽子を取ってくださったの。それで、駅で私を助けてくれた方」
オルファスは、アリアが駅でオルファスを待っている間に、町の男にからまれていたところを助けてもらった、と言っていたことを思い出した。
「アリアを助けてくれてありがとうございました」
「いや、たいしたことじゃないから」
「お礼をさせてください。これから食事でもどうですか？」
男性は困ったような表情を浮かべ、丁寧にオルファスの申し出を断わった。
「その気持ちだけ受け取っておくよ。今、連れとはぐれちゃって探しているところなんだ」
「ご一緒だった女性ですか？」
「そうだよ」
アリアの問いに答えると、その男性はアリアたちの後ろを覗き込み、居たよと言って歩き出した。アリアたちもついていく。女性は、噴水のへりに腰掛けて足を水につけていた。
「ミスト、こんな所に居たのかい？　捜したよ」
「ラグナ、だって暑いんですもの」

ミストと呼ばれた女性は、長い髪を揺らして、舌をぺろりと出した。
「さあ、行こうか」
ラグナと呼ばれた男性がミストに手を差し伸べる。
「もう帰るの？」
「もう出ないと、今夜中にカルディアに戻れないだろう？」
「そう」
ミストは噴水から足を出すと、ラグナに差し出されたタオルで足を拭いて靴を履いた。オルファスが、ラグナにたずねる。
「カルディアのラグナさん？」
「そうだけど？」
「あの、カルディアにセシリアっていましたよね、知っていますか？」
「セシリア、セシリーのことかい？　知っているよ。今はアルヴァーナに居るって聞いているけど」
「あの、セシリアは僕の母なんです」
ラグナは目を丸くして、オルファスを見た。
「セシリーの息子さん？　ミスト、この青年がセシリーの子だって！」
「まあ、セシリーの！　セシリーは元気？」
「はい」
「そうか、懐かしいな」
ラグナはセシリアの幼い頃の話をしてくれた。石が好きで良くダンジョンで遊んでいたこと。ダンジョンで迷子になって、それをラグナが探したこと。
「母もあなたの事をよく話してくれました」
「そうか、セシリーは幸せに暮らしているんだね。良かった。ラッセルさんも元気にしていると伝えておくれ」
「はい」
「じゃあ、僕たちはこれで。セシリーによろしく」

そう言うと、ラグナとミストは去って行った。オルファスはひどく感動していた。母がよく話していたカルディアの勇者が目の前に現れたのだ。ふと横を見ると、アリアがラグナたちをじっと見つめていた。
「どうした？」
「うん、パパと同じ匂いがしたの」
「そうかもしれない。ラグナさんはカルディアを救ったアースマイトだから」
「パパと一緒なのね」
「アリアともね」
オルファスの言葉を、アリアは否定した。
「ううん、私はオルファスが居なかったら何も出来なかった」
そう言うと、アリアはオルファスの手をぎゅっと握り締めた。オルファスはそんなアリアを可愛らしく思う。
「そんなことはない。アリアは立派なアースマイトだ」
アリアはかぶりを振った。そしてオルファスを狂おしそうに見つめる。
「やだ、そんな者にしないで」
アリアの気持ちに気がついたオルファスは、アリアの手を握り返す。アリアは普通の女の子でありたいのだ。
「俺がアリアを守る」
「うん」
夕闇が迫る中、二人はオルファスのアパートへ帰っていった。

アルヴァーナに戻ったアリアはセシリアを訪ね、ラグナからの言伝を伝えた。セシリアは嬉しそうに微笑んだ。
「そう、ラグナさんとミストさんに会ったのね」
「はい。ラッセルさんも元気にしていると伝えてくれって」
「ありがとう。ラッセルは私の育ての親なの」
セシリアはカルディアでのことを話してくれた。自分が帝国との

戦争で孤児となり、その時兵隊だったラッセルに引き取られてカルディアで生活していたことなど。

「随分、音信不通にしてしまったわ。今度手紙を書くわ。ありがとうね、アリア」

番外編・ずっとあなたと

オルファスは大学四年生になり、卒論や卒業制作に追われ忙しくなった。仕方なくアリアはアルヴァーナでおとなしくしている。

今日も、畑の水やりをしていると、ラムリアがやって来た。彼女は腕に赤ん坊を抱いている。ラムリアとリーンは去年結婚し、一児をもうけたのだった。

ラムリアは父の勧めで見合いを繰り返していたが、リーンのことがどうしても諦めきれず、初めて父に反抗し、見合いをすっぽかしたのだった。父にひどく叱責されたラムリアは、リーンの元へ駆け込んだ。話を聞いたリーンが、実はラムリアが好きだと打ち明けた。ヴィヴィアージュ家の事情を知っていたリーンは、二人の結婚は許してもらえないだろうと、ラムリアを連れて駆け落ちしようとした。しかし、二人の様子に気付いたドロシーが、親友のジュリアに相談したのだ。ジュリアは、家より、娘の幸せを選ぶのは当然とマックスを説得した。マックスも目が覚めたのか、二人を呼び、その気持ちが確固たるものであるとわかると、二人の結婚を認め、リーンを婿に迎えたのである。

「アリア、こんにちは」

「こんにちは、ラムリア」

アリアは、赤ん坊の顔を覗き込む。あどけない表情は赤ん坊ゆえのもの。アリアを見ると、赤ん坊は、にこっと笑ったように見えた。

（可愛い……）

目をパッチリと開けて、アリアを見つめている。愛くるしい水色の澄んだ瞳は、リーン譲りであるようだ。柔らかなくせ毛が天使のようだった。

「赤ちゃんは今日も元気？」

「ええ。今日はお願いに来たの」
「なあに？」
「この子にバッファモーのミルクを飲ませたいので、これから毎日届けてもらえないかと思って」
「おやすい御用よ。お昼ごろになると思うけどいいかしら？」
「ええ、お願いね」
そう言うと、ラムリアは赤ん坊を大事そうに抱えて帰っていった。アリアはうらやましいなと思う。自分たちの方が先に付き合い始めたのに、今ではラムリアの方がもう子供を授かっているのだ。あと一年は彼女のような幸せはお預けである。それに今年は会いにも行けない。
「はあ」
自然とため息が漏れてしまった。

お花見もダンス祭も流星祭も一人ぼっちだった。筆不精のオルファスは手紙もくれない。アリアはさみしさに押しつぶされそうだった。

けれども時間は過ぎていき、今年もセレッソの樹は薄紅色の花を咲かせた。アリアは学校の校庭のセレッソを一人で眺めていた。
「オルファスのバカ……」
はらはらと散る花びらを眺めながら、泣きそうだった。とっくに卒業しているであろう恋人からは、なしのつぶてである。あっちで、浮気しちゃったのかな、私の事なんて忘れちゃったのかな、悪いことばかりが頭をよぎる。そうなると、もう妄想はとどまるところを知らず、アリアは手で顔を覆ってしまった。涙があふれてきたのだ。
「誰がバカだって？」
振り向くと、立っていたのは待ち焦がれていた彼だった。オルファスはアリアを抱きしめた。

「ただいま」
「おかえり」
目の前に、恋焦がれていた彼が自分を抱きしめてくれている。嘘みたいだった。幻になって消えてしまうかもしれないと不安に駆られ、アリアは背中に回した手に力を込める。でも彼は消えることなく、アリアを抱きしめてくれていた。
ひとしきりそうしていたあと、オルファスはアリアを放して目を細めた。
「待たせたな」
「そうだよ、何の連絡もくれなかった」
泣いているアリアを見て、オルファスは悪いことをしたと思った。一年間、何の連絡もしなかったのだ。本当はここへ来るのが怖かった。もしかしたら、アリアは誰か他のやつと出来てしまっているのかもしれないという不安も多少はあったのだ。でも彼女は自分を待っていてくれたんだと、泣き顔の恋人を見て感動に打ち震えた。
オルファスは、アリアの涙をそっとぬぐった。そして、もう一度抱きしめると、アリアの耳元でささやいた。
「明日、式を挙げよう。あさって、王都へ引越しだ」
アリアはびっくりして、オルファスを見上げた。
「王都？」
「そうだ。しばらく王都で仕事をすることになった。ついてきてくれるだろ？」
「もちろん、ずっと待っていたんだもの」
アリアは、嬉しそうに微笑んだ。

翌日、二人は結婚式を挙げた。

――病める時も健やかなる時も、死が二人を分かつまで永遠の愛を誓いますか？

自分のために命を投げ出してくれた彼。アリアには何の迷いも無い。
彼女のためなら命を差し出しても構わない。オルファスにも迷いは無い。でも、できるならば二人で幸せに、彼女を幸せにしたい。
そんな気持ちを込めて、家族や友人が見守る中、愛を誓い合った。

番外編・ずっとあなたと（後書き）

長い間、お付き合いいただきありがとうございました。
次回作、「最愛　わくわくアニマルマーチ」をスタートさせました。
牧場物語わくわくアニマルマーチの二次創作です。
よろしかったら、目を通していただきますようお願いします。

番外編・奥様はアースマイト１

結婚したアリアとオルファスは、翌日王都へ引っ越した。

「ねえ、新居ってあのアパート？」

「いや、職場が用意してくれたマンションだ」

「マンション？」

「まあ、王都の中だからあまり変わらないな」

着いた先は、以前のアパートのあった場所よりも、自然の少ない町だった。しかし、新婚という事もあり、アリアは張り切って生活をするための準備をした。マンションは２ＤＫだった。寝室は可愛らしいファブリックで統一し、キッチンは自分好みのピンクの調理器具や食器を買い求めた。リビングはオルファスの意向で、シンプルでシックな感じにまとめた。

「ただいま」

「おかえりなさい！」

待ち焦がれていた旦那さまが帰って来た。アリアは玄関にもかかわらず抱きついた。朝からずっと一人ぼっちで寂しかったのだ。

「どうした？」

「ううん、なんでもない」

そう言いながらもアリアはオルファスに回した手を緩めようとはしない。オルファスはふんわりと微笑むとアリアの額にキスを落とした。

「おなかがすいたな。今日の夕食は何だ？」

「ロールキャベツよ。その前にお風呂に入る？」

「そうするよ」

アリアはオルファスに回した手をほどき、キッチンへ向かう。オ

ルファスはそんなアリアを見て笑みを浮かべながら寝室へ向かった。
オルファスが入浴を終えてダイニングへ向かうと、食事の用意が整っていた。
「旨そうだな」
「座って！」
アリアは楽しそうに料理を皿によそうと席に着いた。そして、二人だけの夕食が始まる。
「旨い」
オルファスがそう漏らすと、アリアはにっこりと微笑んだ。

そんな日々が続いたある日、アリアが不調を訴えた。朝、ベッドから起き上がれないという。
「大丈夫か？」
「うん、寝ていれば大丈夫だと思う。ごめんね、何もできてなくて」
「そんなことはいい。何かあったら電話をくれよ」
「わかった」
アリアが不調を訴えることなど今までなかったので心配した。オルファスは、後ろ髪を引かれるような思いで出勤した。

夕方、家に帰ると、アリアはまだベッドで伏せっていた。
「大丈夫じゃないな。医者へ行こう」
アリアは反論せずに素直に従った。
医者に診てもらうと、医者は渋い顔をした。アリアに席を外すように告げた医師はオルファスに病状について見解を述べた。
「奥さんは、メンタル的にまいっています。新婚でこちらへ来られたそうですね？　環境の変化に心と身体がついていかないようです」
「どうしたら？」
「結婚前と同じような環境で生活させることです」
医師の話を聞いたオルファスは頭をひねった。やはり、アースマ

イトのアリアには都会の生活はなじめないのではないだろうか。
「アリア、都会の生活はなじめないか？」
「そ、そんな事ない。心配しないで！」
あくまでも、弱音を吐かないアリアにオルファスは頭を抱えた。

一週間後、オルファスがアリアに告げた。
「明日、引っ越す」
「え？」
「引越しの準備をしておいてくれ」
それだけ告げると、オルファスは出かけていった。オルファスの一方的な宣言にへきえきしながらも、アリアは引越しの準備を整えた。

翌日、引っ越した先は。緑豊かな田舎町だった。こじんまりとした一軒家で、庭は家庭菜園ができそうな大きさがある。
「わあ、素敵！」
アリアは思い切り息を吸い込むと、すがすがしい空気を胸いっぱい吸い込んだ。
「私のため？」
「当たり前だ。アリアにはいつも笑っていて欲しいからな」
「ありがとう！」
アリアはオルファスに抱きついた。オルファスはアリアの額に口付ける。
「この近くには、ダンジョンがあるらしい」
「ほんと？」
アリアの瞳が輝いたのを、オルファスは見逃さなかった。やはりアースマイトは自然がなければ生きていけないらしい。
「行ってもいいけれど、絶対に無茶はするな。俺が帰って来るまでには帰ってきていること。守れるか？」
「ええ、ちゃんとオルファスが帰って来るまでには帰る」

アリアが小指を出すと、オルファスも差し出す。指切りをすると、二人は笑った。

番外編・奥様はアースマイト１（後書き）

完結したのに、見に来てくださっている方々がいて、思わず番外編を書くことにしました。妄想全開、バトルがあるかわかりませんが、見てくださると嬉しいです。よかったら、感想などいただけるとありがたいです。特に、「こうした方がよかった」などというのは大歓迎です。

番外編・奥様はアースマイト2

翌朝、薄暗いうちからアリアは庭へ出て、クワを振るった。昨日買い求めたサクラカブやイチゴの種をまき、ジョウロで水やりをする。

朝、目覚めたオルファスは隣に手を伸ばしたが、アリアはいなかった。起き上がりキョロキョロと辺りをうかがうものの、どこにもいない。ガウンをはおり窓のカーテンを開けると、庭でアリアが水を撒いているのを見つけた。ふっと笑みを浮かべたオルファスは、自分の決断が間違っていなかったことを喜んだ。キッチンへ向かい、やかんに水を入れて火にかける。そして、シャワーを浴びに浴室へ向かった。

浴室から出て行くと、アリアはエプロンをつけて、朝食の支度をしているところだった。

「おはよう、アリア」

「おはよう、お湯ありがとうね」

そう挨拶を交わすと、アリアはオルファスに近づいてキスを落とす。

「もうすぐ、食事ができるから」

アリアはそう告げると、キッチンへ戻る。そんな彼女を見てオルファスは微笑んだ。手早く着替えを済ませると、テーブルに着いた。テーブルではアリアが待っている。二人は今日の予定について語り合いながら食事をした。

「わかっていると思うが、俺が帰って来るまでには帰るんだぞ」

「はい」

アリアの瞳はキラキラと輝いている。絶対にダンジョンへ行くつもりでいるなとオルファスは思った。

オルファスが出勤すると、アリアは行動を開始した。オルファスには内緒で、武器や魔法書を持ってきているのだ。そう思っているのはアリアだけで、オルファスにはお見通しなのだが。引越しの荷物の奥からそれらを出すと、アリアはリュックに収めた。

田舎町の西のはずれまで出ると、道が三方に分かれていた。道標を見る。

北・ギガント山
西・クレメンス洞窟
南・カジミール遺跡

アリアはそのまま西へ進むことにした。深々とした林を抜けると、岩肌にぽっかりと大きな口が開いている。どうやらここが目当ての洞窟らしい。まるで何もかも飲み込んでしまうぞと意思表示をしているかのようだ。久々のダンジョンにアリアの心はざわめき立つ。リュックから剣を取り出すとひゅっとはらった。

洞窟の中は蒸し暑かった。アリアは首筋を流れる汗を拭った。しばらく行くと、畑があった。アースマイトがルーンを育てているのだろうか？　畑にしゃがみこみ作物を見てみる。とても良い出来だった。

「あれ？」

人の声がした。声のするほうを振り向くと、アリアは声を上げた。

「ラグナさん！？」

「やっぱり、アリアちゃんだ。お久しぶりですね」

そこに立っていたのは、王都で自分を助けてくれた中年の男性だった。手にはジョウロを持っている。

「お久しぶりです」

アリアは恥ずかしくて握っていた剣を後ろに隠した。ラグナがそ

れを見逃すはずもない。
「探検ですか？　ここにはアリやハチのモンスターがいます。最奥には巨大花もいますから気をつけてくださいね」
　にっこりと微笑みながら洞窟の説明をすると、ラグナは畑に水を撒き始めた。アリアは黙ってそれを見ていたが、ふと気がついた。
「どうしてラグナさんがここに？」
「この洞窟の西はカルディアなんですよ」
「カルディア！？」
　なんと、義母セシリアの故郷の隣町に引っ越していたらしい。アリアが驚いた様子にラグナは微笑んだ。
「そうだ、まだ時間があるなら家に来ませんか？」
「でも、オルファスが帰って来るまでに戻らないと」
「ああ、一緒にいた彼ですね」
「ええ、私たち結婚したんです」
「そうですか。それはおめでとうございます。大丈夫、帰りはエスケープを使えば」
「あ、でもまだホームを修正していないんです」
「僕が送ってあげますよ。隣町の入り口には行けます」
　強引なラグナにアリアは苦笑いを浮かべた。

番外編・奥様はアースマイト3

ラグナに誘われて、アリアはカルディアへ足を延ばした。カルディアはアルヴァーナによく似ている。町に入ってすぐのところにラグナの家があった。
「素敵な家ですね」
「ありがとう。ミストのものなんだけどね」
そう答えると、ラグナは扉を開けた。家の中はきちんと片付いており、テーブルの黄色いヒマワリが目に付いた。ソファで座っていたあの不思議な女性、ミストが振り返る。
「おかえりなさい。あら、あなた」
「お久しぶりです」
「ダンジョンで会ったんだ。隣町に引っ越してきたそうだよ」
「そう、何もお構いできませんけど座ってちょうだい」
ミストは立ち上がったが、ラグナがそれを制してキッチンへ向かった。アリアは不思議に思った。しばらくすると、ラグナがお茶を持って戻ってきた。
「どうぞ」
「ありがとうございます」
アリアはお茶を口にすると、おいしいとつぶやいた。それを見ていたラグナとミストは顔を見合わせ微笑んだ。
「どうしてダンジョンに？」
「私、結婚してすぐ王都へ来たんですけれど、精神的にまいってしまって」
「そうよね、環境の変化にはなかなかついていけないわね」
アリアはコクリとうなずくと、話を進める。
「それで、オルファスが田舎町に家を借りてくれたんです。ダンジョンが近くにあるって聞いたので」
ラグナは、アリアをじっと見ていたが、話が終わると質問した。

「アリアちゃんはアースマイト？」
「わかるんですか？」
「まあね。でも、今は何もしていないと見たけど」
「はい、彼に剣を捨てろと言われたので、実践はしていません」
ラグナは、そんな状態でダンジョンに入るのは感心しないと言った。それはアリアもわかっていた。　すると、ミストがポンと手を叩いて、ラグナと一緒に回ればいいと提案した。アリアは困ってしまった。ラグナと二人でダンジョンを回ることなど、オルファスが許すはずがない。そんなアリアの気持ちに気付いたのか、今度はラグナが提案した。
「彼も一緒に行けばいい。来週の休日に三人でギガント山にハイキングに行こう」
「三人？」
「僕とアリアちゃんとオルファス君だ」
「ミストさんは？」
「私は遠慮しておくわ」
ふふふっとミストは笑みを浮かべた。

＊

その日の夕食、アリアはラグナに会ったことをオルファスに話して聞かせた。
「へえ、そうか。カルディアの近くだったんだ」
「それでね、私の入った洞窟っていうのが、セシリアさんが迷子になったところなんだって」
「へえ」
オルファスは今日二回目の「へえ」をつぶやいた。
「今度の休日に、ラグナさんと私とオルファスで、ギガント山へハイキングに行きましょうって」
「いいけど」

アリアと二人きりで休日を過ごしたかったオルファスは少々おもしろくなかった。しかしアリアが楽しみにしているようなので承諾した。

番外編・奥様はアースマイト４

前日の夜、アリアとオルファスはハイキングの準備に余念がなかった。アリアはキッチンで明日の弁当やおやつの用意をしている。オルファスはというと、暖炉の前で剣の手入れをしていた。

「アリアは剣を持つつもりなのか？」

「うん、草くらいは掃えるでしょ」

腰に差した短剣をちらつかせたアリアにオルファスは微笑んだ。しかし、ダンジョンでは何が起こるかわからない。アリアに剣を返した方が良いのだろうか。オルファスは、婚約したときにアリアから取り上げた剣を見つめていた。それに気付いたアリアがオルファスの横にちょこんと座った。

「私、魔法が使えるし。オルファスが守ってくれるんでしょう？」

「当たり前だ」

オルファスは剣を置くと、アリアを抱き寄せる。アリアもオルファスの胸に顔をうずめ、手を背中に回した。

自分はアリアを守るためにずっと剣の鍛錬をしているのだ。もうあの時みたいにはならない。そう決意する。

何か思いつめているようなオルファスを、アリアは見上げた。オルファスが闘志をメラメラと燃え上がらせているようなのだ。なんだか、ただのハイキングが大事になっていようとは、カルディアのラグナは思ってもいないだろう。そんなオルファスに肩の力を抜いてもらおうと、アリアは話しかけた。

「明日のお弁当は張り切って作るから」

アリアの楽しそうな声に、拍子抜けしたオルファスは間の抜けた返事をした。

「楽しみだな。何を作ってくれるんだ？」

「魚の照り焼きにだしまき卵でしょ。おひたしにお漬物におにぎり」

「おにぎりは鮭の塩焼きを入れて欲しいな」

そう答えたオルファスはアリアの額に口づけを落とす。
「二人で出かけたかった」
「ごめんなさいね。断われなくて……」
アリアの返事に、オルファスは苦笑を漏らす。毎日一緒にいるのに、それでもまだアリアを独占したいのだ。
「いや、初めて入るダンジョンだ。ラグナさんが一緒の方が心強い」
「そうね。私、オルファスと一緒ならどこでもいい」
オルファスは、思わずアリアを抱きしめる。自分と同じ想いを抱いている妻が愛おしくて仕方が無かった。

＊

翌日、二人は準備を整えると、ラグナとの約束の場所へ向かった。ギガント山のふもとにラグナは一人で待っていた。
「おはようございます。今日はよろしくお願いします」
「おはよう、オルファス君、アリアちゃん。じゃあ、行こうか」
ラグナは足元に置いたリュックを担ぐと歩き出した。オルファスとアリアも後に続いた。

ギガント山を登り始めると、いろんなモンスターが顔を出す。ラグナが一緒なので唐突に襲ってくることはない。
「ラグナさんって、ここを制圧したんですか？」
「制圧？　物騒な物言いだね。ここはもう帝国軍の力は及んでいないからね。モンスターたちものんびりしているよ」
「いや、やはりラグナさんだからでしょう。見てくださいよ」
オルファスはブーツにぶつかってくるリスのような赤毛のモンスターを指差した。それを見たアリアは大きな声を出した。
「チロリだ、可愛い！」
リュックから仲良しグローブを取り出した。そして、チロリと呼んだモンスターを撫ぜ始めた。じきにチロリは懐き、アリアの肩の

上に乗った。口をもごもごと動かして木の実を食べている。オルファスは呆れたように言った。
「アリア、家にモンスター小屋はないぞ」
「帰りには放すから。良いでしょう？」
上目遣いでお願いされると、嫌とは言えない。そんな二人の様子をラグナは見て微笑んでいた。
「さあ、行こうか」
ラグナに促がされ二人は歩き始める。前を歩くラグナを確認すると、オルファスはアリアの手を取った。
だんだん足場が狭くなってきた。それでもオルファスはアリアの手を離そうとはしない。前後になって進んでいく。何かがアリアの頭をかすめた。
「きゃあ！」
頭上を見ると、フラワーが風の刃を飛ばしている。肩の上のチロリが落ちそうになる。アリアはオルファスとつないだ手を離すと、チロリをつかまえようとした。そのときバランスを崩した。
「アリア！」
オルファスが手を伸ばしたが間に合わない。アリアはチロリと共に谷底へ落ちていった。

番外編・奥様はアースマイト5

目が覚めると、チロリが心配そうにアリアを見ていた。アリアは手を握ってみる。動いた。足にも力を入れてみる。動きそうだ。そっと起き上がろうとしたが、背中に痛みが走り起き上がることが出来なかった。

「しくじっちゃった」

アリアは空を見上げてつぶやいた。ここにいることをオルファスたちに知らせなければならない。アリアは右手を空に向けると、魔法を発動する。

「ファイアーボール」

火の玉は空に昇っていった。気付いてくれるといいのだけれど、そう祈りながらアリアは手を下ろす。もう、魔法を発動するためのルーンアビリティも残り少ない。チロリがアリアの首元で丸くなる。動けるところを見ると、チロリは無傷のようである。

「ごめんね、心配かけて」

アリアはチロリに話しかける。チロリはただ寄り添ってくれる。動けない今、そばにいてくれるだけで心強いものだ。きっと、今頃オルファスは心配してくれているのだろうと思うと胸が痛む。そして自身も彼と離れていることで不安に思うのだ。

しかし、ファイアーボールを発動したことが仇となった。モンスターを引き寄せてしまったらしい。チロリがアリアの前に立ち毛を逆立てて、モンスターを威嚇する。次の瞬間、チロリは吹き飛ばされてしまった。

「ああっ！」

アリアはモンスターを見つめた。モンスターが一歩一歩近づくたび、死が近づいているのを悟る。

（さようなら、オルファス）

＊

その頃、ラグナとオルファスは谷を下っていた。ラグナが先導しながら、谷を降りていく。オルファスは悔やんでいた。谷底へ落ちていくアリアを助けることが出来なかった。

「くそっ！」

オルファスの声に気付いたラグナが振り返った。

「オルファス君、あれは不可抗力だ。あんまり自分を責めるなよ」

「でも、またアリアを危険な目に遇わせてしまった」

拳を握り締めるオルファスに、ラグナは彼の背中をポンポンと叩いた。

「アリアちゃんは賢いし、運も良いだろう？　きっと無事だよ」

「はい……」

その時だった。谷底から火の玉が上がる。

「あれは、ファイアーボール！」

「アリア？」

二人は顔を見合わせると、先を急いだ。

「この辺りのはずなんだが」

ラグナは首をかしげた。アリアが落ちた辺りとファイアーボールが放たれた場所は、間違いなくここだと確信していた。しかし、アリアの姿が見当たらない。

「いったい、どこへ？」

「移動したという事は歩いているという事かな」

「しかし、あそこから落ちたんですよ？」

オルファスとラグナは崖の上を見上げた。普通の人なら到底無傷ではすまないだろう。いくらアリアがアースマイトだからといっても、多少の怪我は負っているはずだ。二人は、もう少し探す範囲を

広げてみることにした。
オルファスが茂みの中を探していると、ピンクのリボンが引っかかっていた。アリアが身につけていたものだ。オルファスは、辺りを探したがアリアの姿はなく、茂みの先に血痕が残されていた。
「アリアっ！」
オルファスの叫びが谷底に轟いた。

オルファスの声にびっくりしたラグナが駆け寄ってきた。そこにはピンクのリボンを握り締めて涙するオルファスの姿があった。
「それは、アリアちゃんの」
オルファスは黙ってうなずいた。ラグナは辺りを見回したが、アリアはいない。その代わりにチロリを発見した。アリアが手懐けたチロリだった。ラグナはチロリを抱き上げた。チロリは怪我をしていた。ラグナがチロリに手を当て、回復魔法をかける。すると、チロリは目覚めた。ラグナの腕の中でキョロキョロと辺りを見回す。何かを見つけたのか、腕の中から飛び降り、走り出した。
「オルファス君、後を追うよ」
ラグナはそう告げると、チロリを追って走り出す。オルファスも慌てて追いかけた。

番外編・奥様はアースマイト６（前書き）

モンスターの外見などゲームと違うかもしれませんが、ご了承願います。

番外編・奥様はアースマイト6

アリアは目を覚ました。辺りは赤やピンクや黄色の花々が咲き乱れている。しかし薄暗かった。

（ここって、天国なのかしら？）

そっと起き上がってみた。背中も痛くない。やっぱり死んだから無痛なのねと思う。痛みがなくなると、他の事に関心がいく。「オルファス」と最愛の夫の名前を呼んでみる。もう、彼の手を取ることは叶わなくなったと思うと涙があふれてきた。

しくしくと泣いていると、足音が聞こえてきた。アリアは涙をぬぐいそちらに目をやる。近づいてきたのは、最後に見たモンスターだった。

『目覚めたか』

モンスターはアリアの頭の中に直接話しかけてくる。あのモンスターが現れたという事は生きているという事なのだろうか。

「どうして？　私、死んだんじゃないの？」

『死なせはしない。おまえは俺の花嫁だ』

「えっ！？」

目の前のモンスターに告げられ、アリアは驚きを隠せなかった。そのモンスターは赤いうろこをまとったドラゴンだ。

「あなたの名は？」

『グリモア』

「グリモア、モンスターと人は結ばれないわ」

『では、同じ姿になれば良いのか？』

そう聞き返すと、グリモアは人型となった。赤い長髪に堀の深い顔立ち、鋭く光る眼光、筋肉質な大きな身体にアリアは圧倒された。

アリアは手を胸の前で組み、首を横に振った。

「だめ、私には愛を誓い合った人がいるもの」
『そんなことは関係ない』
そう口にすると、グリモアはひざまずきアリアの手を取った。鋭く光る瞳の奥に見え隠れする炎が何なのか、アリアにはわからない。
「なぜ、私なの？」
『それはおまえがアースマイトだからだ』
「アースマイトだから？」
『知らぬのか？　アースマイトとモンスターは同じなのだ』
「嘘よ」
『嘘ではない。アースマイトが最初に作られ、その後モンスターが作られた。元は同じもの』
アリアは呆然とした。だから父はフレクザィードと融合していたのかと疑問が氷解した。

アリアがそんなことに思いを馳せていると、グリモアに抱きしめられた。アリアはびくりと身体を強張らせて叫んだ。
「いや、離して！」
アリアは手でグリモアの身体を押し返した。グリモアは動じずに、にやりと笑った。
『身体は回復したようだな』
「そういえば……あなたが治してくれたの？」
グリモアは黙ってうなずいた。そして目を細めて、アリアの瞳を覗き込んだ。その熱い視線に、アリアは抵抗するのをやめてしまった。
『ずっと、おまえを見ていた。アルヴァーナにいる頃からだ』
「アルヴァーナ？」
『そうだ。フレクザィードは我が兄弟だ』
フレクザィードという名前にアリアはおびえた。
「じゃあ、私を恨んでいるのね」
恐ろしげに自分をうかがうアリアを見て、グリモアは静かに首を

横に振る。
『恨んでなどいない。フレクザィードが敗れたのはおまえが強かっただけのことだ』
そうつぶやくと、グリモアはアリアを抱きしめる手に力を込めた。
『ここへおまえを探しにアースマイトとエルフが来るだろう。未練を残さぬようおまえの目の前で殺す』
「だ、だめ！」
アリアは血相を変えた。あのときの恐怖がよみがえる。またオルファスを死の淵へ追いやるなど考えられなかった。
「二人は見逃して。何でもいう事を聞くから！」
アリアはグリモアにすがって懇願するが、聞き入れてもらえるはずもない。グリモアはアリアを大きな水晶で出来た檻の中に閉じ込めた。

グリモアは、水晶の中で泣き崩れるアリアを見て複雑な思いを抱いた。思い続けていた相手がエルフを思い泣いている。
グリモアがアリアを見かけたのは、薄紅色の花の咲く季節だった。トリエステの森で無邪気に遊ぶアリアを始まりの森から見ていた。種が違うにも関わらず、アリアの微笑みはグリモアを魅了した。それから数年後、グリモアは転生しギガント山のモンスターの頂点に上り詰める。そして密かにアリアを待っていた。しかし、いくら待てどもアリアはカルディアには来なかった。
しかし今、チャンスがめぐってきたのだ。アリアが心を寄せる相手が憎らしい。その相手を倒し、アリアを我がものにすると決めた。

番外編・奥様はアースマイト7

アリアの目の前にいろいろな果物がどさりと置かれた。見ると、グリモアが檻の前であぐらをかいて座り、リンゴをかじっている。
『食べろ』
アリアはじっとグリモアを見つめていたが、空腹に勝てずにリンゴに手を出した。朝から何も食べていないのだ。ポケットからハンカチを取り出しリンゴを拭く。そしてリンゴに歯を立てる。しゃりっという音がした。
「おいしい」
そう漏らすと、グリモアは笑みを浮かべた。そして、『もっと食べたい物はあるか』とアリアに訊ねた。アリアは首を静かに横に振った。
「グリモアは一人なの？」
『そうだ』
「寂しくない？」
アリアの質問にグリモアは怪訝そうな顔をした。寂しいとは何なのかグリモアにはわからない。
『おまえは寂しいのか？』
「ううん。オルファスがいるから寂しくない」
アリアの言葉に、グリモアはむっとした。グリモアの中に嫉妬の炎が頭をもたげる。しかし、アリアを怯えさすのはいやだった。それなので、アリアの言葉を逆手にとることにした。
『そうだな、ずっとおまえがここにいてくれたら寂しくない』
アリアは口をつぐんでしまった。そんなアリアを見て、グリモアはイラっとした。
『いずれおまえは一人ぼっちだ。俺のそばにいるしかなくなる』
そう宣言すると、グリモアは立ち上がりどこかへ行ってしまった。

残されたアリアは齧りかけのリンゴを持つ手を膝の上に置いた。それにしても、不可解なのはグリモアの行動である。恐ろしいのか優しいのかわからない。

アリアはもう一方の手で水晶の檻に触れてみる。魔法を発動してみたが、何も起こらなかった。身体は回復しているが、ルーンは減ったままのようだ。グリモアというモンスターは、頭が良いらしい。アリアはため息をついた。

＊

夜の帳が下りる。洞窟の天井に開いた穴からは、たくさんの星がキラキラと瞬いていた。アリアは檻の中から星を眺めていた。やがて丸い月が顔を出す。洞窟内は月明かりでほんのりと明るくなった。

洞窟内を冷たい冷気が通る。ギガント山がいくら夏の気候だといっても、夜、それも洞窟内は冷え冷えとする。アリアが身体を両手で抱きかかえて身震いしていると、グリモアが檻に近づいてきた。

『寒いのか？』

「ええ」

アリアが答えると、グリモアは檻の中へ入ってきた。そしてアリアを抱きかかえた。

「いや！」

人のなりをした男にその身を預けるのはためらわれたのだ。すると、グリモアはその姿を人型からモンスターへと戻した。

『これなら気にならないだろう？』

アリアは赤のドラゴンにすっぽりと抱きかかえられた。それでも緊張はするし恐ろしい。しかし、グリモアは知らん顔して眠ってしまった。規則的な寝息が聞こえてくる。

アリアはじっとグリモアを観察した。数々のモンスターを仲間にしたが、ドラゴンは持ったことがない。立派な角に固そうな鱗に覆

われた皮膚、それに大きく裂けた口。自分に回された大きな腕と、その先に生える尖った鍵爪に見入ってしまった。こんな鍵爪を振り下ろされたら致命傷になるだろう。

しかし、すうすうと気持ち良さそうに眠っているドラゴンは可愛く思えてしまう。仲良しグローブはオルファスに預けたリュックの中だ。でも、ドラゴンを仲間にすると言ったら、オルファスはきっと怒るだろうと考えていると楽しくなってきた。あれこれ思いをめぐらせていたアリアだが、グリモアの体温で温められたせいか、まぶたが重くなってきた。

グリモアがふと目を覚ますと、腕の中でアリアが眠っていた。ふっと笑みをこぼすと、グリモアはその身体を人型に変え、アリアの髪に頬ずりをした。

『モンスターのままでは、このうろこでおまえを傷つけてしまうからな』

腕の中で眠るアリアを見て、グリモアはなんとも言えない心地よさを感じていた。

番外編・奥様はアースマイト8

チロリに先導されたラグナとオルファスは、ギガント山のふもとの洞窟にたどり着いた。チロリはわき目も振らず洞窟へと入って行く。二人は後に続いた。

しかし、簡単には先に進めない。二人の前には、さまざまなモンスターが立ちはだかる。

「簡単には通してくれそうもないですね」

「そうだね。オルファス君、準備はいいかい？」

「いつでも」

二人は背中合わせのまま、剣を抜き構えた。

＊

ラグナとオルファスは夜をダンジョンで迎えた。焚き火をして、アリアの作ってくれた弁当を口にすると、オルファスはうつむいたまたしてもだ。自分がそばにいながら、彼女を危険にさらしてしまった。腹立たしかった。顔を苦痛に歪ませるオルファスを見て、ラグナは声をかけた。

「オルファス君、すまなかった」

「いえ、ラグナさんのせいではありません。事故ですから」

オルファスは尊敬するカルディアの勇者に精一杯の許しを与えた。ラグナはコップに注いだ葡萄酒を口に含ませると、ほうっと息を吐いた。

「この辺りでは、モンスターはおとなしいのだが、僕のあずかり知らぬところで何かが起きているのかもしれない」

「そうですね。アリアはモンスターを惹きつけるところがありますから」

オルファスがそう答えると、ラグナはククッと笑みを漏らした。

「明日は、朝一番で発つよ。この先は昔このダンジョンのボスが君臨していた場所だ」
「わかりました」
ラグナは焚き火の前でゴロリと横になった。オルファスもそれに倣い、眠りについた。

＊

翌早朝、二人は出発した。そして着いた先で見たものは、水晶に閉じ込められたアリアと、その横に立つ鋭い瞳の男だった。

オルファスが叫んだ。
「アリア！」
「オルファス！」
アリアが夫の名を叫ぶと、グリモアは哀しそうにアリアを見つめた。そして檻越しにアリアの手を取った。
「アリアをどうする気だ」
『俺の花嫁にする』
グリモアはアリアの手の甲に口づけを落とした。それを見たオルファスが怒鳴った。
「バカな事を言うな！　アリアは俺の妻だ」
『そんなことは構わぬ。きさまを殺して手に入れるまで』
そう口にすると、男はその姿を変貌させる。真っ赤なうろこをまとったドラゴンとなった。ラグナはその姿を見て叫んだ。
「グリモア！」
『久しぶりだな、アースマイト。俺はアリアを花嫁とする』
「何を馬鹿なことを」
グリモアはラグナの言葉も聞かず、その裂けた口から紅蓮の炎を噴いた。ラグナはそれを交わすと、剣を構える。そして呪文を唱え

だす。そのときグリモアの尾がラグナに向かって飛んできた。そこへオルファスが割って入り、尾を力いっぱいハンマーで打ち返した。
「ありがとう、オルファス君」
呪文を唱え終わったラグナは、両手を胸の前で突き出した。すると、彼の手から水柱が出現し、グリモアを取り巻いた。それは渦となりグリモアを飲み込んでいく。
『小癪な』
グリモアの口の中が光で満ちたかと思うと、破壊光線が飛び出した。ラグナとオルファスが避けると、グリモアはオルファスめがけて突進していく。そして、その大きな口で噛み付こうとした。間一髪オルファスは横に逃げる。すかさずラグナは次の魔法を発動した。隕石がグリモアめがけて落ちていく。グリモアは身体を回転させながら、降ってくる隕石を跳ね除けた。
「ちょっとはマシになったようだね」
ラグナがそう口にすると、グリモアはぎろりとにらみ、風の刃を繰り出した。カッターの刃のような風がラグナを襲う。ラグナも負けじと風の刃を繰り出した。風の刃同士がぶつかり合い爆ぜるように消滅した。
肩で大きく息をしているラグナは次の魔法を発動する。地鳴りがしたかと思うと大地が揺れ、グリモアがふらついた。すかさず、ラグナは切りかかる。何度も何度も剣を繰り出すと、グリモアが耐え切れず膝を着いた。ラグナはグリモアの背にまたがり剣で一突きした。グリモアは断末魔の叫びを上げると、その場に倒れこんだ。
グリモアは水晶の檻に閉じ込めたアリアを見た。そして手を伸ばすが、もう動くこともままならない。それでもなんとか檻のそばまで移動すると、檻に向かい息を吹きかける。すると彼女を取り巻く水晶が粉々に砕け散った。
それを見届けたラグナはグリモアにとどめを刺そうとした。しか

し、それを制したのはアリアだった。
「やめて！」
アリアの声にラグナは振りかざした手を止めた。アリアはグリモアに近寄り、その身体に手を当てた。
「グリモア」
『無念だ。もし、人に生まれかわったら、そのときは』
そうアリアに語りかけると、グリモアの息は絶えた。アリアの瞳から涙がこぼれ落ちた。
オルファスがアリアを抱きかかえ、その場を離れた。ラグナはグリモアの心臓に剣をつきたてる。グリモアは光となって始まりの森へと帰って行った。
オルファスに抱きかかえられながら、その光景を見ていたアリアは顔をゆがめた。そしてオルファスの胸の中で泣いた。

＊

我が家に帰ったアリアは、ソファでオルファスに抱きかかえられている。オルファスの胸に顔を寄せ、生きている証となる鼓動を耳にする。
「グリモアが私の事を知っていたの」
「そう」
オルファスは自分の胸に顔をうずめるアリアの背中をポンポンと叩いた。
「グリモアは悪い奴じゃなかった。寂しかっただけだと思う」
「生まれかわったら、奴を選ぶ？」
「ううん、グリモアより先に見つけ出してね」
「もちろん」
自分を見上げるアリアの頬に、オルファスは手を添えた。灰色の瞳を潤ませる妻にそっと口づけを落とす。

オルファスが口づけの余韻に浸っていると、アリアがボソリとつぶやいた。
「私もっと強くならなくちゃ」
アリアの決意を目の当たりにして、オルファスはため息をついた。
どうやらアースマイトの夫に平穏は無いらしい。

番外編・奥様はアースマイト８（後書き）

＊＊

「奥様はアースマイト」終わりました。お付き合いくださりありがとうございました。次は「番外編・Ｗｈｅｅｌ　ｏｆ　Ｆｏｒｔｕｎｅ」の予定です。
よろしければ、「ここが面白くない」などの批評をいただけるとありがたいです。

番外編・Wheel of Fortune 1

グリモアとの戦いの後、オルファスの仕事の関係上、二人はアルヴァーナに住まいを移した。子宝にも恵まれ平和な日々を過ごしていた。

「いってきます！」
「いってらっしゃい。二人とも気をつけていくのよ」
「はーい！」
オルファスは寝室からあくびをしながら出てきた。
「アルとリルは？」
「学校よ。夕べは遅くまで書き物をしていたのね」
「ちょっとね。今日はリルの誕生日だろう？」
「ええ、だから早く帰ってきてね」
アリアはそうお願いすると、オルファスの頬におはようのキスを落とした。

夜、家族四人で末娘のリルの六歳の誕生日を祝う。テーブルの上には、赤いイチゴの乗った生クリームたっぷりのショートケーキや、魚の姿焼きにスープにパスタにサラダが並んでいる。
「誕生日おめでとう、リル」
「ありがとう、パパ、ママ、アル」
リルは顔をほころばせて喜んだ。両手には皆に贈られたプレゼントがいっぱいだ。
「開けてもいい？」
「いいよ」
オルファスが許可すると、リルは椅子を下りて暖炉の前にプレゼントを置いて中味を開け始めた。父と母からはピンクのワンピース、

一つ年上の兄のアルからは髪飾り、祖父母からは可愛いリュックサックだった。
「わあ、可愛い！」
リルはワンピースを身体に当てたり、髪飾りを頭につけたり、リュックを背負ったりしてとても嬉しそうだ。そんな娘を見て、アリアとオルファスは顔を見合わせて微笑むのだった。
「この娘に幸せがもたらされますように」
＊
アルヴァーナのダンジョンは、アリアが若い頃に制したことで安全になっている。パレルモ神殿もそうだ。フレクザィードは始まりの森に還っている。
翌日リルとアルは祖父カイルに連れられて、パレルモ神殿に来ていた。
「おじいちゃんは、ここで採掘をするから遊んでいなさい。遠くに行くんじゃないぞ」
「はーい！」
アルとリルは手をつないで神殿の下への階段を下りていく。アルはリルの手を離すと、渓谷の地下神殿へ入って行く。リルはアルについていこうとしたが、ふと隣のダンジョンが気になった。立ち止まり小首をかしげて腕を組み、うーんと考え込んでいる。結局何かにひきつけられるように隣の地下神殿へ入った。
地下神殿は寒かった。一面が氷の世界である。リルはぶるぶると身体を震わせた。トコトコと歩みを進めるリルに何者かが声をかけた。
『アリア』

「アリア？」
リルはその声に答えた。
『おまえはアリアではないのか？』
「アリアはママだよ。私はリル」
すると、リルの目の前に大きな赤いドラゴンが姿を現した。険しい目に大きく裂けた口元、鋭い鍵爪、しかしその赤い瞳は濁りがない。
「わあ！　大きい」
リルは臆せず、トコトコと赤いドラゴンに近づいていく。
「ねえ、背中に乗っていい？」
『構わぬ』
リルは必死に登ろうとするが、なにせ小学一年生になったばかりで小さくてよじ登れない。見かねた赤いドラゴンはリルの服をくわえて自分の背に乗せた。
「わあ、高いね」
リルはドラゴンの首に手を回し叫んだ。
『こんなところへ何しに来たのだ？』
「おじいちゃんが、神殿に採掘に来てるの」
『カイルが？』
「おじいちゃんを知っているの？」
『まあな。アリアは――ママはどうしている？』
「牧場にいるよ」
『そうか』

リルは赤いドラゴンといっぱいおしゃべりをした。しばらくして、アルがリルを呼びに来た。
「もう帰らなくちゃ。また遊びに来ていい？」
『ああ、来るがいい』
リルは赤いドラゴンに手を振って帰って行った。赤いドラゴンはその後姿を見送りながら、遠い過去に思いを馳せていた。

『アリア』

赤いドラゴン――グリモアが思いを寄せたアースマイト。一度はその手にしながらも自分のものに出来なかった。あれから十年が経った。グリモアは氷山の地下神殿の主として生まれかわっていた。アルヴァーナのダンジョンの主となったけれど、グリモアは自分からアリアの元へ行こうとはしなかった。始まりの森へ還るとき、グリモアは見たのだ。エルフに抱かれて涙するアリアの顔が脳裏に焼きついて離れない。

今、彼女に瓜二つの娘が自分の前に現れたのだ。懐かしい姿にグリモアは感無量だった。

しかし生まれかわるのが早すぎた。どうして神はこんなに早く自分を転生させたのかわからなかった。

番外編・Wheel of Fortune 2

それからリルはちょくちょく氷山の神殿へ遊びに来た。一緒にダンジョンを駆け回ったり、花畑で花を摘んだり、グリモアの背中に乗って空中散歩を楽しんだりしていた。グリモアはリルの面倒をよく見た。孤独に神殿でうずくまっているグリモアにとって、リルはたった一人の友達だ。リルが遊びに来ると楽しいし時間はあっという間に過ぎていく。そしてリルが帰ると、何か落ち着かない。アリアが言っていた「オルファスと一緒だから寂しくない」という言葉を多少なりとも理解できた。

ある日、リルがグリモアにおねだりをした。

「ねえ、リルのおうちに遊びに来て」

『リルの家？』

「うん、皆に紹介したいの」

グリモアは考えた。自分がリルと仲良くしているのを知ったらアリアはどう思うだろうか。

「ねえ、来てよ」

自分の羽を引っ張りねだるリルの言う事を聞けぬはずがない。グリモアは承諾した。

『明日、行けばよいのか？』

「うん、お日さまが真上に来る頃に牧場で待ってるね」

満面の笑みを浮かべて手を振って帰るリルを、グリモアは見送った。

翌日の正午、リルは家の前の畑でグリモアを待っていた。

「リル、ご飯よ」

「もうちょっと待って。ママ、もうすぐリルのお友達が来るから」

そう言って、ダンジョンの方を眺めるリルにアリアは苦笑した。

その数分後、空がかげった。何者かが宙を舞っている。リルは手を振りながら大きな声で叫んだ。
「ここよ、グリモア！」
「グリモア！？」
アリアはリルの横に舞い降りたモンスターを見た。赤いドラゴン――グリモアだった。
「ママ、リルのお友達のグリモアだよ」
リルが嬉しそうにグリモアにまとわりついている。アリアはめまいがした。娘がよりによってグリモアを仲間にしたとは思わなかった。
グリモアは懐かしそうにアリアを見る。十年ぶりに見る彼女は、相変わらず美しく気高く見えた。
『アリア』
「グリモア、生まれかわったのね」
困惑の色を隠さないアリアに、グリモアはため息をついた。やはり、過去の過ちは時間が過ぎても色あせることはなく、さらに疑念を呼ぶのだ。しかし、リルとの関係を保ちたかったギルモアは、アリアに語りかけた。
『ああ。心配するな。おまえをさらおうなんてもう考えていない』
二人の会話を聞いていたリルは、不思議そうにグリモアを見つめた。
「ママとグリモアはお友達なの？」
『古い知り合いだ』
グリモアはリルに言い聞かせた。幼いリルに過去のことを話して聞かせてもわかるはずもない。余計な誤解を招くだけだ。きっとアリアが昔のことを話せて聞かすだろう。そうなればリルはもう神殿には来なくなる。
「ねえ、おうちでご飯を食べよう」と自分の羽を引っ張るリルにグリモアは言った。

『今日はもう帰る。また遊びに来い』
「えー！？　せっかく来たのに？」
『ママが聞きたいことがあるようだ。じゃあな』
グリモアはリルを遠ざけると、羽ばたいてダンジョンへと帰って行った。すかさずアリアはリルに近寄り抱きしめた。
「リル、ママにお話してくれるかしら？」
リルは、アリアに根掘り葉掘り聞かれた。リルは悪い事をした覚えはないので、素直に答えた。
「仲良しグローブは使っていないのね？」
「うん！」
仲良しグローブを使わずにモンスターを仲間にするなど、考えられないことだった。

その夜、仕事から帰って来たオルファスに、リルとグリモアの関係について伝えた。
「大丈夫なのか？」
「多分。グリモアはリルや私をどうこうする気はないみたい」
「早いうちにリルに仲良しグローブを使わせた方がいい。そうすればただの仲間だ」
オルファスの言葉は、アリアには腑に落ちなかった。リルとグリモアの関係は普通ではない。お互いの信頼関係で成り立っている。それを仲良しグローブで変化させて良いものだろうか？

番外編・Wheel of Fortune 3

翌日、リルが遊びに来た。グリモアはびっくりした。寝そべったまま、頭をもたげて念を送る。
『ここに来てもいいのか？』
「うん。どうして？」
『アリアに何か聞かなかったか？』
「ううん。いってらっしゃいって言っただけだよ」
自分を見てニコニコと微笑むリルを見て、グリモアは不思議に思う。アリアは自分の言葉を信じてくれたのだろうか。

それからもリルはグリモアのところへ遊びに行った。ある日のこと、リルがグリモアを自分の親しい人間に会わせようとした。そのことにグリモアは閉口した。
『リル、この姿で人間に会うのはまずい』
「そう？　リルは構わないよ」
ニコニコして答えるリルに、グリモアは呆れた。モンスターの姿のままでは、ただ怯えさすだけだ。リルのように、この姿を見ても平気な人間は少ない。
『ではこうしよう』
グリモアはその姿を人型に変えた。その姿を見てリルは頬を赤く染めたのだった。グリモアはリルの手を取ると歩き始める。リルはぼうっとしながらグリモアに引っ張られていった。

リルはグリモアを連れて、祖母のマナの雑貨屋へ来た。
「あら、リル、こんにちは」
「おばあちゃん、こんにちは！」
挨拶をすると、リルは大きく手を広げるマナに抱きついた。マナがしゃがみこんで、リルの肩にやさしく手を置いた。

「今日はお友達と一緒なのね」
「うん、グリモアっていうの」
「まあ。リルと仲良くしてくれてありがとう」
マナはにっこりと微笑みかけた。グリモアは十歳ぐらいの少年に見えるのだ。赤い髪にくりっとした大きな瞳、小さく結んだ口は美少年と言っていいだろう。グリモアは黙ってお辞儀をした。

マナは二人を二階の居間に上げ、お茶とお菓子を出した。二人は並んで座る。リルがクッキーを一つつまんで食べる。グリモアを見ると、手を膝の上に置いたままだった。リルはクッキーを一つつまむと、グリモアに差し出した。グリモアが不思議そうに見つめるので、リルは自分の口を大きくあけて、グリモアにも同じように口をあけるように催促した。グリモアは言われるがまま、口を開ける。リルはグリモアの口の中に小さなクッキーを入れてあげた。そして、モグモグと咀嚼する真似をしてみせる。グリモアも真似をして口を動かす。すると、目を大きく見開いた。
「おいしい？」
グリモアはこっくりとうなずいた。二人の様子を見ていたマナが微笑んだ。
「おばあちゃんのお菓子はどれもおいしいんだよ」
自慢げに話すリルを嬉しく思いながら、マナはグリモアを見た。彼は黙って菓子を食べている。
「グリモアはどこに住んでいるの？」
しゃべらないグリモアの代わりにリルが答える。
「おばあちゃん、グリモアはね、ダンジョンにいるの」
「ダンジョン？」
マナは不思議そうに聞き返す。その後も、根掘り葉掘り訊ねてくるマナに、グリモアが念を送り、リルがずっと答えている。
突然、グリモアは食べるのをやめると立ち上がった。リルも慌てて立ち上がる。祖母の質問攻めに閉口しているのかもしれない。

「おばあちゃん、ご馳走様」
お礼を言うと、リルはグリモアの手を取って出て行った。そんな二人を見て、マナは「不思議な子ね」と思うのだった。

リルはグリモアの腕をツンツンと引っ張りながら訊ねた。グリモアの機嫌を損ねたのかと心配なのだ。
「面白くない？」
『人と話は出来ないから疲れるんだ。リルにするように念を送れれば良いが、それをするとたいていの人間は驚く』
「そっか、ごめんね」
申し訳なさそうに謝るリルに、グリモアは笑みを浮かべた。
『気にするな』
「じゃあ、うちに行こうよ。ママだったら平気でしょう？」
グリモアは少し困った顔をした。多分、アリアの方が嫌な顔をするんじゃないだろうかと思うからだ。昔自分がしたことを思えば、いい気がするわけはないはずだ。

すると、向こうからアリアが歩いてきた。リルはアリアに駆け寄り、その腕の中へ飛び込んだ。
「ママ、グリモアとおうちで遊んでもいい？」
アリアは視線を前方に移した。そこに立っているのは優しそうな面差しの少年だ。アリアの知っているいかめしい姿のグリモアではなかった。やはり生まれかわったばかりなのか若い。それよりも、その雰囲気の変化に驚いた。
「いいわよ。ママはおばあちゃんの所へお使いに行ってくるからね」
「はい！」
リルはグリモアの元へ駆け寄り、手を引っ張った。グリモアはアリアに念を送る。
『いいのか？』
「いいわよ。いつもリルと遊んでくれてありがとう。この子ったら

すっかりあなたに懐いてしまって」
『俺は構わぬが、そっちが嫌なんじゃないのか？』
「昔のことでしょ」
そう答えると、アリアはリルの頭を撫ぜて歩いていった。グリモアが、その後ろ姿をボーっと見ていると、またもや腕を引っ張られた。
「行こう、ねっ？」
グリモアはこっくりとうなずくと、リルに引っ張られて歩いていった。

番外編・Wheel of Fortune 4

そしていくらかの歳月が流れ、リルは十六歳になった。グリモアとの関係も続いており、リルはダンジョンを飛び回っていた。飛び回っていたといっても、鍛錬をしているわけでなく、ダンジョン内の畑の世話や、薬草などを採集している。もちろん、グリモアと一緒だ。

グリモアはリルといるときは人型になる。下手に触ると、そのするどい鍵爪や固いうろこで彼女を傷つけてしまうからだ。そんなグリモアも立派な青年になっていた。

そして時々、リルはグリモアを誘って町を歩いた。リルは彼と町を歩くのが好きだった。リルにとってグリモアはただのモンスターではないのだ。

そんなある日のことだった。神殿跡で居眠りをするグリモアに、リルは話しかけていた。

「グリモア、よその土地に行ってみない？」

『よその？』

グリモアは大きな頭をもたげると、目をトロンとさせたまま聞き返した。

「ええ、私ね、いろいろな世界を見て回りたいの」

『アリアが心配する』

「いいのよ。ママだって私の年ぐらいにダンジョンを制覇したんだし」

グリモアは黙ってしまった。リルの説得は少し強引過ぎる。アリアは住んでいる地域のダンジョンを制覇したのだ。リルがこの土地を離れればアリアが悲しむだろう。しばらく考えた後、グリモアは口を開いた。

『アリアに許可をもらうことだ。許可をもらえたらついて行ってや

っても良い』
そう答えると、リルは手を握り締めてうつむいた。グリモアがそれに気付いた。
『どうかしたのか？』
「いつも、アリア、アリアって。グリモアにとって私よりママが大事なの？　私はあなたにとって何なの？」
『リル』
グリモアは驚いた。リルがそんなことを言うなんて思いもよらなかった。

リルとアリアを天秤にかけることなどしたことはない、リルはリルなのだ。でも、今のリルは若い頃のアリアにそっくりだった。グリモアが欲しくてたまらなかった頃のアリアに。しかし、リルはアリアではない、そう自分に言い聞かせてきた。彼女は幼い時からの友人なのだ。

「もういい、さようなら！」
そう口走るとリルは神殿を後にした。グリモアは呆然としたが、明日になればけろっとして遊びに来ると思っていた。
しかし、待てど暮らせどリルは姿を現さなかった。

リルはその日からふさぎ込んで部屋にこもってしまった。心配したアリアがリルの部屋を訪れた。
「リル、入るわよ」
リルは答えなかったが、アリアは中に入ると、ベッドで布団をかぶるリルの横に椅子を持ってきて座った。
「ママとグリモアの間に何があったの？」
布団から顔をのぞかせて自分を見つめるリルの目は真剣だった。うすうすは気付いていた。リルがグリモアに思いを寄せていること。よく町を連れ立って歩いている二人を見かけた。グリモアを見つめ

るリルはとても幸せそうだからだ。
アリアは自分とグリモアの因縁をリルに話して聞かせた。リルは黙って聞いていた。
「ママはパパのことを愛していたから、グリモアのことは受け入れられなかったの」
「グリモア、可哀相ね」
アリアは娘の頭を撫ぜた。
「リルはグリモアが好きなの？」
「うん。でも、グリモアはママのことばっかり気にするの」
「そうかしら。グリモアはリルのことを大事に思ってくれていると思うわ」
「どうして？」
「だって、あなたたち契約していないじゃない。モンスターと契約しないで仲良くなることなんてありえないのよ」
そうだ、確かに自分は仲良しグローブをグリモアに使っていない。
「もっと自信を持ちなさいね」
そう告げると、アリアは部屋を出た。そして、運命ってわからないわねと思うのだった。

番外編・Wheel of Fortune 5

リルが来なくなって一週間が過ぎる。グリモアはまんじりともせず氷山の神殿で待っていた。そして考えていた。
リルは、アリアのことを口にすると怒り出す。自分の母親なのになぜだろうと思う。リルは、グリモアにとって目の中に入れても痛くない存在だ。なんでもいう事を聞いてやりたいと思うし、彼女の笑顔を見ると、とても嬉しい。昔アリアに抱いていた想いとは違う。リルは自分にとって何なのだろう。

「こんにちは、グリモア」
ひょっこりとリルがやって来た。この間の事は忘れたかのように見えた。
『今までどうしていた？』
「えっとね、風邪を引いて寝込んでいたの。あのね、お願いがあるの」
リルは、両手を前で合わせた。
「明日の流星祭に一緒に参加して欲しいの」
『流星祭？』
「十二月の聖夜に星を見るの。見晴らしのいいところなら場所はどこでもいいわ」
『わかった。明日、牧場へ迎えに行こう』
「ほんと？　じゃあ九時に外で待ってるね」
いう事だけ言って帰っていくリルの後ろ姿を見送りながら、グリモアはホッとしていた。

夜九時、リルとアリアは家の前でグリモアを待っていた。すると、程なくグリモアが飛んできてリルの前に降り立った。
「こんばんは。じゃあ、ママ、行ってきます！」

「行ってらっしゃい。グリモア、リルをよろしくね」
『承知した』
グリモアはリルに背中へ乗るように告げた。リルはひょいっとグリモアの背中に乗ると、腕を首に回した。そして、飛び立って行った。アリアは二人を見送った。

ギルモアの背中でリルははしゃいでいた。
「すごい！　お月様があんなに近いわ」
そんなリルの様子にグリモアは嬉しかった。そして、山の頂上へ舞い降りた。リルはグリモアの背から飛び降りると、あたりをキョロキョロと見回した。
「ここは？」
『ギガント山、前世の俺が住んでいたところだ』
リルはアリアの話に出てきた場所だとわかった。
「ねえ、人型になってくれる？」
リルのお願いに、グリモアはうなずいてその姿を人型に変身させた。リルはグリモアの腕につかまり、空を見上げた。
「あのね、流星に願い事をすると叶うって言い伝えがあるの」
『リルは何を願うのだ？』
「内緒」
そう答えると、リルは空へ視線を戻す。グリモアはそんなリルの横顔を見た。アリアがそばにいるような錯覚を覚えていた。

その時だった。二人の頭上を旋回するものがあった。巨大な鶏ホッホだった。どうやら彼らの縄張りに入ってしまったらしい。グリモアはその姿をモンスターに変え、リルを身体の後ろに隠す。
『邪魔だ、向こうへ行け！』
しかしホッホは彼らのそばを離れようとはしない。グリモアは紅蓮の炎を吐き出した。それはホッホに命中し、ホッホは真っ逆さまに落ちていった。それを見ると、グリモアは人型に戻った。

『大丈夫か？』
「うん」
そう答えると、リルはグリモアに抱きついた。グリモアはびっくりしたが、その小さな身体に手を回した。
「グリモア、私――」
リルが言葉を続けようとしたとき、二人のそばに落雷が落ちた。

グリモアが空を見上げる。空中にいたのはフレクザィードだった。
「……フレクザィード、生まれかわっていたのか」
「当たり前だ。この世界を我がものにするために地獄のそこから甦ったのだ」
フレクザィードはそう口走ると、グリモアの腕の中のリルを見た。
「その娘、あの憎きアースマイトの子供だな」
『おまえには関係ないだろう。立ち去れ！』
グリモアが怒鳴ると、フレクザィードが鼻で笑った。
「誇り高きドラゴンが人間ごときにうつつを抜かすとは笑わせる」
グリモアはリルの腰から剣を抜き取ると、リルに告げた。
『ここから早く逃げろ。アリアが命がけで倒した相手だ。それにリルを狙っている。俺が食い止める間にアリアの元へ』
「いや！　一緒にいる」
言う事を聞かないリルに、グリモアは眉をひそめる。
『リル、おまえが目の前で奴にやられたら俺はどうすればいい？大事な者を守るのは雄の役目だ』
「大事な者？」
グリモアは、空いている手でリルの頬に触れる。そして切なげに見つめた。
『愛している、リル。さあ行け！』
リルは夢を見ているようだった。相手にされてもいないと思っていなかったのに、愛を告げられたのだ。

リルはグリモアに言われたとおり、牧場に向かってエスケープした。そして、母に事の次第を伝えると、自室に飛び込んだ。物入れから聖剣を取り出し携えた。そして、飼育小屋に飛び込み、シルバーウルフにまたがると、ギガント山を目指した。

番外編・Wheel of Fortune 6（前書き）

気持ち悪いかもしれません。苦手な方はお控え下さい。

番外編・Wheel of Fortune 6

到着したリルの目に入ったのは悲惨な光景だった。グリモアがフレクザィードに踏みつけられていたのだ。
「グリモア！」
『なぜ、帰って来た』
「だって」
リルはそうつぶやくと、グリモアをじっと見つめる。その身体はボロボロになっていた。そして唇を噛むと、ゆっくりと聖剣を抜いた。

フレクザィードはにやりと口角を上げた。
「今こそ、積年の恨み晴らしてくれるわ！」
リルは美しい顔を歪めた。正直、あのフレクザイードに勝てる自信はない。でもやるしかない。今グリモアを助けられるのは自分だけである。
剣を構えながら、魔法を発動する。シャイン（光の弾）を身体にまとい、切りかかった。フレクザィードはリルめがけて炎を吹き出す。それをかわしながら、ちょこまかと走り、小さなダメージを与える。するとフレクザィードは、その巨体をジャンプさせて衝撃波を放つ。それに当てられたリルはよろめいた。やはり、あまり戦闘を経験していないリルでは歯が立たなかった。
フレクザィードはリルを尻尾で殴り始める。とうとうリルは人形のように吹っ飛んだ。
『リル！』
グリモアは胸が押しつぶれそうだった。愛するものが痛めつけられる光景が、こんなにも残酷なものだと初めて知った。

「こんなことなら、ママのいう事を聞いて修行に励むんだったな」
もうもうと砂煙の上がる中、リルは独り言を漏らすと身体を起こした。血のにじんだ口の端を服の袖でぬぐう。自分の服を見てため息をついた。大好きなピンクのワンピース――流星祭のためにおめかししてきたのだ。その服もずたずたである。
『リル、逃げろ！』
グリモアは傷ついた身体を起こして叫んだ。リルはグリモアを振り返り、静かに微笑む。
そして立ち上がり剣を構えると、フレクザィードに向かっていった。しかし、何度も叩きつけられた。ボロ雑巾のようになりながら、リルはなおも立ち上がろうとする。
とうとうフレクザィードの尻尾に絡め捕られてしまった。そのまま眼前に持ち上げられたリルが叫んだ。
「放して！」
フレクザィードはにやりと笑みを浮かべると、リルの顔を舐めあげた。
「きゃあ！」
その舌のざらつきに、リルの全身に鳥肌がたつ。今度はグリモアが叫んだ。
『やめろ、フレクザィード！』
フレクザィードは、これみよがしにリルを舐めあげる。リルが悲鳴を上げる。それを耳にして、苦痛に顔をゆがめるグリモアを見て楽しんだ。
「人間とはうまいのかと思ったがそうでもないな」
ぐったりとして戦意を喪失したリルを見て、フレクザィードは満足そうにうなずいた。そしてリルの身体をグリモアのほうへ放り投

げた。リルはゴロゴロと転がり止ったが、もうピクリとも動かなかった。

グリモアは倒れているリルのそばに這って行った。そして身体を人型に変えると、傷だらけになった小さな手に自分の手を重ねた。

『大丈夫か』

リルは力なく首を横に振った。グリモアがリルの手をぎゅっと握る。

『どうして戻った』

「だって、グリモアと一緒にいたかった」

息も絶え絶えにリルは告げた。

リルを愛している。フレクザィードがリルを標的にしたとき、はっきりとわかった。アリアに対する感情は寂しさゆえの独占欲。リルに対しては愛おしさ、切なさを感じずにはいられない。そして、自分の身よりも彼女が心配なのだ。

しかしこのままでは二人ともフレクザィードにやられてしまうだろう。愛するものを守ることが出来ない自分が情けなかった。

フレクザィードはジリジリと二人に近づいてくる。

リルがつないだ手にぐっと力を込めた。

「私も始まりの森に逝ける？」

リルの決心に、グリモアの目から涙がこぼれた。

『……ああ。リル、一緒に行こう。タミタヤの魔法のかかったその剣で命を絶てば逝ける』

「本当？　嬉しいよ、もう離さないでね」

グリモアはリルを胸に抱き寄せた。腕の中には傷だらけだが、嬉しそうに微笑んでいるリルがいる。グリモアはリルの手から聖剣を取ると、その切っ先を自分たちに向けた。

番外編・Wheel of Fortune 7

「諦めてはだめ！」
その凛とした声に、グリモアは顔を上げる。アリアだった。息子のアルも一緒だ。

アリアは剣を構えると、フレクザィードに向かい吐き捨てた。
「よくも大事な娘をこんなにしたわね」
フレクザィードはアリアの姿を見つけると、目を吊り上げて怒りをあらわにした。
「アースマイト！　こちらこそ、積年の恨み晴らしてやる！」
そう叫ぶと、フレクザィードは口から炎を吐き出した。アリアはそれを交わし、呪文を唱える。ウォーターレーザーをお見舞いした。ものすごい量の湯気があたりに立ち込める。フレクザィードは身体を回転させ始める。アリアはすかさず、石柱を立てた。石柱に阻まれて、身動きできなくなったフレクザィードにアリアは言い放つ。
「いつまでたっても、お馬鹿さんね」
アリアが応戦している間にアルが呪文を唱える。
「ドラグキャリバー！」
アルの手の中から白い光があふれ出る。それは竜巻のように渦を巻きながらフレクザィードを飲み込む。フレクザィードは悲鳴を上げた。すかさず、アリアとアルは剣で止めを刺す。圧倒的な強さだった。

アリアは自分がグリモアに囚われた時より、鍛錬を重ねてきたのだ。そして、次代を継ぐ息子アルに自分の全てを叩き込んできた。また大事な人が傷つかないように。
哀れ、フレクザィードは転生したばかりなのに、己の野望のため光となって消滅した。

アリアとアルは、リルたちに駆け寄った。
「派手にやられたわね。アル、リルに手当てを」
「はい」
アリアはグリモアを、アルはリルにメデュケーション（回復魔法）を施した。
「ママ、アル、ありがとう」
少し回復したリルが礼を述べた。グリモアはアリアに向かい、謝罪の言葉を口にする。
『すまなかった。リルを危険な目に遭わせて』
「いいのよ。私、さっき聞いちゃったんだけど、一緒に死ねるって事は、二人はそういう仲なのね？」
アリアの言葉に、リルとグリモアは顔を見合わせた。
「とにかく帰りましょう。怪我を治さないとね。グリモア、悪いけれど人型のままでいてね」
そう言うと、アリアとアルは二人を抱えてエスケープして牧場へと帰った。

牧場の家で、リルとグリモアは身体を休めている。
居間ではアリアとオルファスが二人のことで話し合っていた。
「リルとグリモアを一緒にさせてあげたいの」
「モンスターと生きろというのか？」
アリアはオルファスの手に自分の手を重ねた。
「あの二人は共に死を選ぼうとしたのよ」
そう告げられると、オルファスは黙るしかなかった。オルファスにとっては、二十年前アリアをさらった憎いモンスターである。生まれかわったとはいえ、今度は娘を奪おうとしているのだ。父親としては複雑だ。でも、グリモアの気持ちは痛いほどわかる。命を投げ出せる相手など、そう巡り会えるものでもない。
娘はグリモアと共に生きることを望んでいる。反対したところで

家を出て行くだけだろう。だったら好きにさせればいい。
「わかったよ」
オルファスはアリアの手を握り返した。

一週間後、グリモアはリルに黙って帰って行った。
「ママ、グリモアは？」
家の前の畑で仕事をしているアリアの元へ、リルが息せき切って駆けてきた。
「神殿へ帰るって」
アリアの言葉が終わるか終わらないかのうちに、リルは歩き出した。
「リル、待ちなさい」
アリアに止められてリルは振り返った。そして、家に入るように言われたリルは、渋々アリアの後をついていった。

アリアはリルをソファに座らせた。その隣に自分も座りリルの手を取った。
「これからどうするの？」
「世界中を見て回りたい」
「グリモアは知っているの？」
リルはコクリとうなずいた。
「ママとパパが許してくれたら、一緒に行っても良いって言ってくれた」
「それは一緒に生きるって意味なの？」
リルはアリアをじっと見つめ、コクリとうなずいた。アリアはリルを抱きしめながら、髪を撫ぜた。
「いつのまにかこんなに大きくなって、もう巣立ってしまうのね」
「ママ、ごめん」
「謝らなくていいわ。あなたが幸せならパパとママはいいの」
アリアはリルの額にキスを落とす。そしてリルを解放した。

「グリモアに話して来るね」
リルは、赤くなった目をこすりながら出かけていった。
リルは地下神殿までやって来た。グリモアは台座で居眠りをしている。リルはグリモアの前に回りこみ気持ち良さそうに寝入っているモンスターを覗き込んだ。
「また寝てるの？」
グリモアは顔を上げ、リルを見ると相好を崩した。リルはグリモアの前で正座をした。
「あのね、ママが旅に出てもいいって。一緒に行ってくれるでしょ？」
グリモアは黙ったままだ。リルは不安に駆られて、グリモアに詰め寄る。
「何で黙っているの？」
「俺はおまえを守りきれない」
そうつぶやいたグリモアは顔を背けた。
その言葉を聞いて、リルはだんだん腹が立ってきた。守って欲しいなんて思っていない。共に生きたいだけなのだ。
「そんなの、関係ない！　私はグリモアと一緒にいたいの」
激高するリルを目の前にしてグリモアは困り果てた。大事だからこそ、手に入れるのはためらわれるのだ。
「リル……」
リルはグリモアにすがり、訴えた。
「お願い、私を一人にしないで――」
リルはグリモアの身体に手を置いたまま泣き崩れる。グリモアはそんなリルを目の当たりにして困惑した。
「俺はモンスターだ」
「そんなのわかってる」
「では契約しろ」
「契約？」

「そうだ」
リルは思い出した。モンスターと契約する。それはアースマイトとしては当たり前のことだ。しかし、リルにとってグリモアはモンスターではない。愛する人なのだ。
「モンスターとの契約は出来ない」
「なぜだ？」
「……グリモアを愛しているから。契約なんて形で縛りたくない」
唇を噛みしめて語るリルに、グリモアは心を打たれた。そして、その姿を人型に変えて、リルを抱きしめた。グリモアの腕の中でリルは目をしばたたかせた。
「わかった。俺の伴侶として迎えよう」
「ほんと？」
「ああ。愛している、リル」
リルの瞳から涙が溢れ出す。やっと、想いが叶ったのだ。
「私も愛しています」
その言葉にグリモアの心は打ち震える。胸にこの上もない至福の瞬間が訪れた。独りではないという事がこんなにも幸せなことなのだと知った。

数日後、リルはアルヴァーナを旅立った。町の人々は見た。赤い髪の青年と手をつないだ幸せそうなリルの姿を。

パラレルワールド・囚われのアリア　1

一　アルスの一日

アリアとオルファスがパレルモ神殿へ旅立って二ヶ月が過ぎようとしていた。

アルスは登校前に農作業をしているところである。水やりをゴブリンパイレーツのコブクロに、収穫をハイオークのオクジに手伝ってもらっていた。二頭とも、もちろんモンスターだ。そして自身はモンスターのえさとなる牧草を刈っている。

そよ風にたなびく青い牧草を見ながら、アルスは姉アリアのことを案じていた。

（お姉ちゃんたち、頑張っているのかな……）

アリアとオルファスは、八年前に失踪した父カイルを探しに行ったのだ。それから二ヶ月、まだ二人は戻らない。

母マナが水を汲みに家から出てきた。水を汲むその後姿は小さく見える。

アリアが旅立ってから、マナはひどく元気がない。アルスが話しかけると笑ってくれるものの、一人になるとハンカチを握り締めてうつむいている。

父カイルに続き、アリアもいなくなったマナの気持ちを思うと、アルスはいたたまれなかった。でもたった十二歳の自分にはどうすることもできない。ただ、アリアたちがカイルを連れて、無事に帰って来ることだけを祈っていた。

登校時間になり、アルスはマナの手を引いて家を出た。畑ではモンスターたちがお手伝いの真っ最中である。

「コブクロ、オクジ、いってきまーす！」

アルスが声をかけると、モンスターたちは返事をするかのように雄叫びを上げた。
アルスは、心優しい少年である。カイルの残した荷物の中から仲良しグローブを取り出し、モンスターを仲間にした。そして、愛情をいっぱい注ぎ、世話をし、とても仲良くしている。モンスター小屋に入ると、モンスターたちが我先にとアルスに寄ってくるほどである。
アルスのモンスター好きに、マナはあきれた。最初は恐ろしかったのだが、アルスによく懐いている彼らを見て慣れてきたのだった。
「今日も、みんな元気なのね」
「うん」
マナはアルスを見ながら微笑みかける。アリアがいなくなってから、アルスは随分しっかりしてきた。以前はアリアの後ろをくっついていた彼だったが、一人になって、何もかも自分でするようになったし、泣き言も言わなくなった。彼なりに、今の状況を把握しているのだろう。現実を受け入れられずにいるのは、自分だけかもしれない。もっと強くならなければ……。マナはアルスの手をぎゅっと握り返した。

学校に着くと、マナは職員室へ、アルスは教室へと入っていった。
「おはよう」
「アルス、おはよう」
カノンとロイは卒業していて、今はアリア、オルファス、リーン、ラムリア、ムーとスー、それにアルスの七人が学校に通っている。しかし、アリアとオルファスは欠席だ。アルスの顔を見かけた双子がかけ寄ってきた。
「アルス、今日の帰り遊ぼうなの」
「ごめん、鍛錬するんだ」
申し訳なさそうに謝るアルスに、双子はさみしそうな表情を浮かべたが、すぐ笑顔になって励ましてくれた。

「そうか、ごめんね。頑張って」
「ありがとう」
アリアがいなくなってから、アルスはみんなと遊ばなくなった。
滞りなく授業は終わり、給食の時間である。アルスは給食の時間が好きだ。なぜなら、給食を配膳してくれるのが、彼の祖父ダグラスであるからだ。
「おじいちゃん、こんにちは」
ダグラスはアルスを見ると、頭をガシガシとなぜる。筋骨隆々の祖父は、娘である母と全然似ていない。
「こんにちは、アルス。いっぱい食べて大きくなるんだぞ」
アルスは元気よく返事をして、食事を受け取った。今日はカレーである。ツヤツヤとおいしそうなライスの上に、香辛料の香りが食欲をそそるカレーがたっぷりとかかっている。カレーを持って席に着くと、テーブルの上の籠盛りになったタマゴを一つ取る。テーブルの角でこつんとひびを入れて、カレーの上でパカっとタマゴを割った。
「カレーの上にお月さまが出てきたね」
向かいの席に座っていたリーンがつぶやいた。アルスはリーンを見た。この人は、自分と同じ男なのだろうか？　ちっとも男っぽくなくて、見かけも言う事も可愛らしい。アルスは、うんと返事を返し、笑みを浮かべた。
「わあ、アルス、ムーもそれやるのー」
「スーも」
双子がアルスの両隣に座り、アルスのようにタマゴを手に取ると、パカっと割りいれる。カレーの上に新たなお月さまが出た。三人は、黄身を崩しながら、カレーと少し混ぜて口に入れた。
「おいしいね」
「うん、まろやかなの」
「そうそう！」

おいしそうに食べている生徒たちを見て、ダグラスは腕組みをしながらうなずいていた。

腹ごしらえを済ませたアルスは、友達と別れて武道場でロイに稽古をつけてもらう。なぜ学校を卒業したロイに剣術を教えてもらっているのか？

剣術を教えてくれたアリアがいないので、アルスは武道場でやみくもにモンスター相手に戦った。そして何度もアルヴァーナ病院へ運び込まれていた。そんなアルスの話を双子から耳にしたロイが、剣術を教えてくれることとなったのだった。

＊＊＊

鍛錬を終えて、家に戻ったアルスは、残った農場の仕事を片付けて、母と夕食を食べる。二人きりの静かな食事。アリアがいた頃は笑いが絶えなかった。

アリアが、アルスの皿からミートボールを一つ横取る。

「あーっ！　お姉ちゃん、それ僕のだよ！」

「アルスがもたもたしているのがいけないのよ」

アルスは、母に助けを乞うが、母はにこにこ笑っているだけである。アルスは、反撃に出た。アリアの皿には、彼女の好きなポテトが残されている。

「いただき！」

フォークでポテトを突き刺したと思ったら、フォークは何も無いテーブルを差していた。

「私から盗ろうなんて十年早いわ」

勝ち誇ったようなアリアに、アルスは地団太を踏む。

「お姉ちゃんのバカ！」

毎日がこんな風だった。姉がいたから、父がいないことのさみしさを感じずにいたのである。今にして思えば、気を使ってくれていたのだろう。

アルスは、ポテトコロッケを口に入れた。

「おいしいね」

「ありがとう。アルス、明日は何が食べたい？」

「ええと、グラタン！」

「わかったわ」

マナはニッコリして、食事を再開する。今日のおかずにはアリアの好きだったポテトコロッケだった。無意識のうちに作ってしまうらしい。そんなマナはアルスに食べたい物を聞いてくれることはあまりない。アルスは、それでも構わなかった。自分は、母の手料理を毎日食べられる。過酷なダンジョンで戦っているだろうアリアを想うと、贅沢だよねと思った。

食事を済ませると、二人は銭湯へ出かけた。

パラレルワールド・囚われのアリア　1（後書き）

アルスを主人公に書いたお話です。当初アリア編とアルス編を書いていたのですが、アリア編がメインになりました。せっかくなので載せたいと思います。似たような内容になりますが読んでいただければ幸いです。

二　裸の付き合い

銭湯に入ると、番台にはカノンが座っていた。
「マナ先生、こんばんは。アルス、元気？」
「うん」
二人に声をかけると、カノンは番台から降りてきて、アルスをぎゅっと抱きしめた。カノンはとうに学校を卒業しているが、いまだに会うたびにアルスを抱きしめる。カノンの腕の中で縮こまっているアルスが、小さな声で訴えた。
「あ、あの、カノン、もう抱きつかないでくれない？」
「ええーっ！？　どうして？」
カノンは信じられないという顔をしている。うつむいてモジモジしながら、アルスは更に小さな声で答えた。
「え、えーと、恥ずかしいから……」
もう、アルスも十二歳で、男と女の違いもわかっている。次第に真っ赤になっていくアルスに、男湯の脱衣所で片づけをしていたロイが口を挟んだ。ロイとカノンは結婚していて、ロイはカノンの手伝いをしに来ている。
「アルスもやっと目覚めたか？」
「ロ、ロイのバカ！」
慌てふためくアルスを、ロイはニヤニヤして見ている。
それにしてもカノンは、アルスの苦悩がわかっていないようである。アルスが生まれたときから、なにかとカイルの家に立ち寄っては、アルスの遊び相手になっていたカノンにとって、アルスはいつまでたっても可愛い者であるからだ。
「アルス……、私は気にしてないから大丈夫よ」
「僕が気にするの！」

アルスはそう言い放つと、男湯へ駆け込んで行った。
逃げていくアルスを見つめながら、カノンがポツリとつぶやいた。
「アルス、反抗期かしら？」
「カノン……」
とんでもない勘違いを続けるカノンにロイは呆れた。こりゃ、アルスが大人っぽくなるまで、勘違いは続くなと思った。
（よし、明日の鍛錬はスペシャルコースだ）
ロイは結構やきもち妬きである。カノンのせいで自分の鍛錬メニューが加減されていることを、アルスは知らなかった。

アルスは脱衣所で服を脱ぐと、浴室へ移動した。中には既に先客が居る。
「リーン」
「やあ、アルス」
リーンはにこやかな笑みを浮かべて、アルスを迎えた。アルスは急いで身体を洗い、お湯に浸かっているリーンの横に入った。
「いいお湯だね」
「そうだね。アリアたちは？」
リーンの問いに、アルスは首を横に振った。
表向きには、アリアとオルファスは王都へホームステイしていることになっている。リーンは、二人が神殿へ旅立ったのを知っている数少ないうちの一人だ。二人が旅立って、ショックを受けているのはアルスだけではなく、リーンもである。
リーンはアリアに恋心を抱いていた。それなのに、アリアはオルファスと行ってしまったのだ。多分勘のいいオルファスが、アリアについて行ったのだとは想像がつくが、何も知らなかった自分が情けなかった。
そんなリーンの気持ちを知る由もないアルスは、ぶしつけな質問をした。
「ねえ、リーンってラムリアの彼氏なの？」

「ち、違うよ。ただの幼馴染だよ」
狼狽するリーンに、ラムリアの言っていることと違うなと思いながら、アルスは質問を続ける。
「ふうん。じゃあ、恋したことある？」
「まあね。なんでそんな事聞くの？」
リーンはアルスを見つめた。
アルスは天井を見上げながらぼんやりしていた。アリアの様子、ロイと結婚したカノン、リーンに思いを寄せるラムリア、自分の事を好きだというムーとスー。アルスには、よくわからない感情だ。
「恋ってどんなものなのかなと思って」
「そうだなあ。僕の経験で言うとね」
アルスは身を乗り出して、聞く体勢を作る。リーンはアルスのそんな態度に苦笑しながら語り始めた。
「いつも、その子の姿を目で追っているんだ。その子が笑っていると嬉しくなるし、沈んでいると、どうしたんだろうって心配になる」
「ふうん」
不可解な顔をしているアルスに、今度はリーンが質問した。
「アルスは好きな子はいないの？」
「好きな子……いっぱいいるよ。みんな好きだもん」
「そっか、アルスはまだ恋してないんだね」
「そうなのかな？」
リーンは、優しげに微笑んだ。
「そうだよ。ああ、のぼせてきたよ、お先に」
そう言って浴室から出て行った。
（恋か、僕もいつかするのかな？）
天井からしたたるしずくを見ながら、アルスはぼんやりと考えた。

三　帰って来たオルファス

銭湯を出て家へ戻ると、マナは明日の支度をし、アルスは外に出て星空を眺めていた。今日は満月だった。東の空の地上近くにある月は、オレンジがかっていてとても大きい。月明かりに照らされて、思ったより外は明るかった。何もない平穏な毎日。カイルとアリアがいないことを除けば……。

すると、背後から何かを引きずるような物音がした。振り返ると、それは人影だった。

「誰？」

「アル……ス」

その声に聞き覚えがあった。アルスは人影に駆け寄った。

「オルファス？　オルファスでしょ？　どうしたの？　お姉ちゃんは？」

それは、アリアとともにパレルモ神殿へ旅立ったオルファスだった。身体はぼろぼろで、左腕を押さえ、苦しそうな表情をしている。

「アリア……が……つかまった」

アリアの名を発すると、オルファスはばったり倒れた。

「オルファス！　ママ、ママ、大変だよ、来てー！」

家の中にいるマナを呼びながら、アルスはアリアの身に何かあったのだと知った。

満身創痍のオルファスは、三日三晩生死をさまよった。そしてオルファスが帰ってから三日後、アルヴァーナ病院から連絡があり、アルスとマナは急いで病院に向かう。

病室には、バレットとセシリアとジェイクが来ていた。アルスとマナはベッドで横たわるオルファスに近寄った。

「マナ先生、アルス、すまない。アリアは俺をかばって」
マナは口を手で覆い目を見開いた。涙ぐむオルファスに、アルスは身を乗り出してたずねた。
「お姉ちゃんはどうしてるの？」
オルファスはゆっくりと悪夢を語りだした。

パレルモ神殿の最奥で、ラスボスであろう赤き竜と対決したときのことだった。二人は善戦したが、赤き竜の力は絶大で倒せなかった。もうだめだと死を覚悟したとき、アリアがオルファスに魔法書を託したのだ。
「これをアルスに届けて」
「アリア、だめだ。お前も一緒に」
アリアは首を横に振った。
「私があいつをひきつけているうちに逃げて」
アリアは、神殿で手なずけたシルバーウルフを呼び出して命じた。
「オルファスを飼育小屋まで！」
シルバーウルフは雄叫びを上げると、オルファスを乗せて走り出した。
「アリア！」
アリアはにこりと笑みを浮かべ、赤き竜に向かって行った。
シルバーウルフが突然立ち止まり、オルファスは振り返った。彼の目に飛び込んできたのは、水晶に閉じ込められたアリアの姿だった。

――覚えておけ、また我に歯向かうようなら、この女のようになる。死なせはしない。ずっと水晶の中で、我が世界を破滅に導くのを眺めておればよい

赤き竜の思念がオルファスの頭に流れ込んできた。その直後、アリアの思念も流れてきた。

――オルファス、逃げて

シルバーウルフは再び走り出す。オルファスは前を向いた。涙が止まらなかった。愛する女を助けられない非力な自分が情けなかった。

オルファスは、アルスにリュックから魔法書を取り出すように頼んだ。アルスが魔法書を取り出すと、それを見たバレットがつぶやいた。

「ドラグキャリバーか」

アリアが持ち出した魔法書……使いこなすことが出来なかったらしい。バレットはアルスから魔法書を取り上げると、オルファスに質問した。

「アリアは水晶に閉じ込められているんだな？」

「はい」

「カイルは？」

「赤き竜が言うには、体内にカイルさんの魂があるせいで、復活を妨げられていると。でも、封印はそう長くは持たないとも言っていました」

「そうか」

バレットは考えこんだ。

オルファスの話を聞いたマナはめまいを起こしそうだった。カイルがモンスターの体内に？　アリアが水晶の中に閉じ込められた？

マナには想像のつかないことばかりである。頭がおかしくなりそうだった。マナはバレットににじり寄る。

「カイルは、助からないの？」

「いや、まだわからない。魂で押さえつけているという事だろう。分離させることが出来るんじゃないか？　石版のかけらをもう少し

集めてみよう」
　するとオルファスが、アルスにリュックから袋を出すように頼んだ。袋からは石版のかけらが出てきた。
「この石版は神殿で採取した物です」
　バレットは石版のかけらを受け取った。
「これは調べておく。オルファス、しっかり身体を休めろ。準備が整い次第、アリアを助けに行くことになる」
　オルファスは黙ってうなずいた。バレットはマナの肩に手を置いた。
「マナ、しっかりしろ。カイルの居所がわかったんだ。アリアも生きている」
「ええ」
　マナは、顔を覆って泣きながら返事をした。

　マナとアルスは病院をあとにし、手をつなぎ家へ帰る。帰り道、マナは一言も発しなかった。マナの頭の中はアリアとカイルのことでいっぱいだった。自分の愛するものがモンスターに囚われている。どうしていいのかもわからない。
　そんな空気を打ち消すかのように、アルスが話し出した。
「ママ」
「なに？」
「僕、お姉ちゃんを助けに行く」
「アルス……。お前まで行ってしまうの？」
　マナは立ち止まって、アルスを抱きしめた。私の大事なものがまた居なくなってしまう。
「ママ、心配しないで。僕が赤き竜をやっつけて、パパとお姉ちゃんをつれて帰る」
　マナはアルスを見つめた。彼の瞳に宿る決意を見た気がした。自分がいつまでもメソメソしていてはいけない。これは抗うことのできない運命、カイルの血を分けた子らも、その運命から逃れられな

いのだろう。自分が反対しても行ってしまうに違いない。それならば笑って送り出してあげるのが、母である自分の務めではあるまいか。

「そうね、アルスならきっと大丈夫。パパもアリアもママに黙って行ってしまったけれど、アルスは違うわ。約束よ、必ず帰ってきてね」

「もちろん！」

アルスは元気よく返事をした。

四　周りの人々とともに

翌日、アルスは登校するとバレットに会いに行った。職員室のドアを開けると、バレットは机で書き物をしている最中だった。
「先生、僕にあの魔法のことを教えてください」
バレットは、ゆっくりと身体をアルスの方へ向けて、手を彼の肩に置いた。そして、探るようにアルスの瞳をのぞき込んだ。
「アルス、わかっているのか？　下手をすれば、お前もアリアのように囚われてしまうんだぞ？」
バレットは、事の重大さをわかっていないだろうアルスの気持ちをおもんぱかって忠告する。しかし、アルスの決意は固かった。
「わかってます。でも、パパとお姉ちゃんを助けられるのは僕しかいないんでしょ？」
「アルス……」
「僕、アースマイトだから。行かなくちゃ」
バレットはアルスを抱きしめた。アリアに続き、まだ十二になったばかりのアルスまでもが運命に翻弄されていく。まだ、遊びたい盛りだろうに。同時に、何もしてやれない自分を恥じた。
アルスを解放したバレットは、彼の目をじっと見据えて話し出した。
「アルス、俺は石版の解読は出来るが、実践は教えられない。魔法はアースマイトにしか使えないようだ」
「はい」
「だが、作戦を練ることは出来る。一人で抱え込むな。皆で知恵を出し合って、アリアとカイルを助け出そう」
「はい！」
アルスは、バレットから姉が託した魔法書を受け取った。バレッ

トの説明によると、ドラグキャリバーというのは、ネイティブドラゴンを封印するために古代のアースマイトが編み出した封印魔法らしい。その封印は千年の間保たれ、封印が切れる頃、このアルヴァーナにアースマイトがやってくるのだそうだ。
「カイルはなんらかの力により、アルヴァーナにつかわされたんだろう。しかし記憶を失っていたことで、ドラグキャリバーを手に入れることができないまま、赤き竜と対峙することとなってしまった。アリアもまたドラグキャリバーを使いこなせず、赤き竜に囚われてしまった」
バレットはアルスに諭した。
「ドラグキャリバーを完璧に使いこなせるようになれ」
「はい」
魔法の発動の仕方は姉から教わっている。あとは練習あるのみだ。

＊＊＊

アルスは、今日もロイに剣術の稽古をつけてもらっている。剣を交えながら、ロイはアルスに質問した。
「アルス、えらく張り切っているな」
「うん」
「何かあったのか？」
ロイの問いに、アルスはうつむいていたが、顔を上げるとニコッと笑みを浮かべながら答えた。
「何にもないよ。……ただ、強くなりたいんだ」
「そうか」
以前のアルスとは違う。気迫がみなぎっているのだ。多分、アリアのダンジョン巡りと関係があるのだろう。アリアはホームステイだと聞いているが、本当のところはどうなのか怪しいものだ。しかし、アルスが言う気がないものを、聞き出すのはいかがなものかと思う。ロイはそんなアルスに提案した。

「武道場で練習もいいが、実際にダンジョンへ行って実践した方がいい。明日からはダンジョンに行こう」
「付き合ってくれるの？」
アルスは身を乗り出した。一人じゃ行ってはいけないと、アリアに固く止められていたからだ。
「アルス一人じゃ、何かあった時困るだろう。俺がお墨付きを与えるまでは一人で行くなよ」
「うん！」
アルスは小躍りして喜びを表した。ロイはそんなアルスを見て、相好を崩した。

翌日、連れて行かれたのはトリエステの森だ。
「がんがんやっつけて、どんどん進むぞ。お前には時間がないんだろう？」
ロイの言葉にアルスは舌を巻いた。見透かされている。しかし、ありがたい。説明できないのだから。アルスはロイとともに、連日ダンジョン制覇に励んだ。

そして毎日の鍛錬の合間に、オルファスの元へ通い、パレルモ神殿での話を聞いた。そして、モンスター別の攻略法を研究した。経験の浅いアルスにとって、データは必須だ。
「パレルモ神殿の最奥までたどり着く頃には、かなりの鍛錬になる。アルスは魔法を完璧に使えるように練習してくれ」
「うん」
「特に、ドラグキャリバーだ。アリアはあれを発動することが出来なかった。戦う最中、アリアにカイルさんが思念を送ってきたらしい。ドラグキャリバーを使えって」
「わかったよ、いっぱい練習する」
「頼む」
オルファスはアルスに託した。自分だけではアリアを救うことは

出来ない。アルスのアースマイトとしての力を借りなければ……。
アリアをこの手に取り戻すために。

アルスは、午前中は牧場の仕事をこなし、午後からは、ロイに剣術の稽古をつけてもらったり、バレットに魔法書の説明を受けたりして、学校の授業には出なかった。
そんなアルスをムーとスーはひどく心配した。双子は、オルファスが病院に担ぎ込まれたときに、大人たちがアリアとオルファスについて、話しているのを聞いてしまったのだ。ただ、その様子から他人には話していけないことだという事は自覚していた。もうすぐアルスが、アリアが帰ることが叶わなかったダンジョンへ行ってしまう。二度と会えなくなるかもしれない。

双子は、放課後やってくるアルスを待ち伏せた。
「アルス」
「ムー、スー、何か用？」
「用がなかったら、声かけちゃいけない？」
怒ったような双子にアルスはひるんだ。
「そ、そんな事ないよ」
「今日はアルスに渡したいものがあったの」
そう言って、双子は包みを差し出した。開けていいかとアルスがたずねると、双子はうなずいた。包みから出てきたのはお守りだった。
「これ……」
「お守り。アリアを助けに行くんでしょう？　私たち、アルスがアリアを助け出すことを祈ってるよ」
双子は目に涙を浮かべていた。アルスはお守りをぎゅっと握り締めた。
「必ず、お姉ちゃんを連れて帰る。帰ってきたらまた一緒に遊ぼう」
「うん、待ってるね」

三人は固く手を握り合った。七夕の夜、誓ったこと。三人はずっと仲良しでいる。アルスは誓う。必ず姉と父を取り返し、アルヴァーナに戻ってくる。

＊＊＊

オルファスが帰ってから二月後、アルスとオルファスはパレルモ神殿へ旅立つことにした。そして、ここは学校の図書室である。アルスとオルファスとバレットは作戦会議を開いていた。

オルファスが描いたパレルモ神殿の地図を広げ、進路を確認する。これで、寄り道せずに最短ルートでアリアの元まで行けるだろう。そして、モンスターの様子や属性を確認する。それを聞いて、バレットが助言した。アルスは必死に頭の中にそれらを叩き込んでいく。

作戦会議が終わり、アルスはオルファスと一緒に学校を出た。

「アルス、セレッソを見ていかないか？」

「うん」

校庭の片隅で咲くセレッソの薄紅色の花を見ながら、オルファスは言葉を洩らした。

「アルス、本当にすまない」

「どうしたの？」

「アリアのことだ。俺だけおめおめと帰ってきて、今度はお前を連れて行くことになって……」

済まなそうにうなだれるオルファスに、アルスはにこりと笑みを浮かべた。

「気にしないでよ。お姉ちゃんはオルファスを助けたかった。それでいいじゃない。絶対に竜を封印してお姉ちゃんを取り戻そうね。きっと、待ってるよ、オルファスのこと」

「そうだな、お前の姉さんは泣き虫だからな」

アルスは、何で知っているのとでも言いたげに、オルファスを見

た。
「そうなんだよ、本当は泣き虫なんだよ。僕、ベッドで泣いてるお姉ちゃんをよく見たよ。どうしたのって聞くと、なんでもないよって言うだけなんだ」
「アルス、よく知っているな」

オルファスは、ダンジョンで過ごした二ヶ月を思い出していた。夜中にふと目が醒めたオルファスは、アリアが焚き火の前で膝を抱えて、すすり泣いているのを見た。そしてアリアのそばに寄った。彼女の身体が小刻みに震えている。
そっと肩に手を置くと、アリアが顔を上げた。涙でぐしょぐしょだった。ひざまずいて、どうしたのかと声をかけると、アリアは何も言わずに顔をゆがめるだけだった。そんなアリアの身体をオルファスはぎゅっと抱きしめる。そして、お前は一人じゃないぞと語りかけた。
すると、オルファスに回された腕をぎゅっとつかんで、アリアは小さな子供のようにワンワンと泣き始めた。
「恐いの」
アリアはそう言った。

「アリア、泣いているだろうな。早くそばに行ってやらないと」
オルファスは、手のひらに落ちてきた薄紅色の花びらを見つめながら、はるか地下深くに囚われている愛しい女に想いをはせた。

家に帰ったアルスは、マナに明日出発することを告げた。マナは瞳からあふれ出す涙をぬぐい、笑顔を見せた。
「いってらっしゃい。お弁当作らなくっちゃね。おかずは何が良いかしら？」
アルスは、泣くのを我慢して明るく振舞っている母に胸をつかれた。

「ママ！」
アルスはマナに抱きついた。母のふんわりとした甘い匂いがアルスの鼻をくすぐる。
「まあまあ、アルスったら、小さい子みたいよ。アルスならきっと大丈夫。ママは信じてるわ」
「うん、絶対、パパとお姉ちゃんと一緒に帰って来る」
母の腕に抱かれながら、アルスは決意を新たにした。

五　僕は、アースマイト

翌日、二人はパレルモ神殿の入り口に立っていた。アルスは、自身が飼っていたものと、アリアがオルファスを託したシルバーウルフを連れてきた。オルファスは懐かしそうにシルバーウルフを撫ぜる。シルバーウルフはオルファスに従属の姿勢をとった。アリアの信頼を受けるオルファスを認めたのだ。

「行こう」

「うん」

二人は、シルバーウルフに乗って移動する。一度パレルモ神殿に入っているオルファスのおかげで、迷うことなくダンジョンを進むことが出来た。そして驚くべきはアルスの戦いのセンスだった。アリアよりも断然技の切れが良く、身軽なせいか動きも速い。魔法も適材適所を得ている。データ収集のおかげで、効率的にモンスターを倒していく。アリアが二月かかった最奥到達が一月で完了した。

「明日いよいよ最奥だ」

「うん。オルファスが道案内をしてくれたおかげだね」

薄暗い洞くつの中、焚き火を囲みながら、二人は語り合っていた。

「この奥にいるお姉ちゃんを感じるんだ」

「わかるのか？」

アルスはコクリとうなずくと、焚き火に木をくべた。パチパチと木がはぜ、メラメラと炎が上がっている。アルスは意識を集中させ始めた。

「お姉ちゃんの意識はない、パパの魂の波動はわずかだけど感じる」

「カイルさんは危ないってことか？」

心配そうなオルファスの問いに、アルスは首を横に振る。

「赤き竜の力が強くなっているからだと思う。パパの魂自体は変わらないよ」
「封印が解けるってことか？」
「うん。完全に解ける前に封印する」
オルファスは、アルスをしげしげと見た。アリアが泣き虫アルスと言っていた頃とは違う。随分たくましくなった。そして頼りになる。十五の自分が十二のアルスを頼るのはおかしな話だが、それを納得させるだけの能力がアルスにはある。
そんなことを考えていたオルファスに、アルスが質問を浴びせた。
「ねえ、オルファスにとって、お姉ちゃんはなんなの？」
オルファスは、一瞬戸惑った表情を見せたが、アルスをしっかり見据えて答えた。
「……大事な人だ」
「大事な人？」
よくわからないというようなアルスに、オルファスは顔を赤くしながらも真面目に答えた。
「アルスも、俺ぐらいの歳になればわかるだろう。さあ、もう寝よう。明日が最後だ」
「うん、おやすみなさい」
「おやすみ、アルス」
二人はそれぞれの寝袋に潜り込んだ。
大事な人、それはリーンの言う好きな人のことだろうか？　アルスは一生懸命考えたが、やはりよくわからない。では姉は自分にとってどんな人だろう。甘えさせてくれる人、尊敬する人、そしてなくてはならない人。オルファスの言う大事な人ってそういう意味なのかもしれないと、おぼろげながら理解した気になるアルスだった。

＊＊＊

翌朝、シルバーウルフを飼育小屋へ返したアルスたちは、最奥へ

の扉を開ける。目に飛び込んできたのは真っ赤な身体を横たえた竜と、その脇に立つ水晶柱だ。水晶の中には目を閉じたアリアが立ったような形で閉じ込められていた。琥珀の中に閉じ込められた虫の化石のような感じである。その姿は、戦いでボロボロのままの姿だった。

「お姉ちゃん！」

アルスは駆け寄ろうとしたが、オルファスに抑えられた。オルファスを見ると、顔は苦痛にゆがみ、唇を噛みしめていた。アルスは、はっと我に返る。冷静にならなければ、赤き竜に勝てない。しかし、この竜に勝てるのだろうか？

アルスは竜をじっと見た。大きな赤いからだにきめの整ったキラキラしたうろこ。立派なツノに、長いひげをたくわえ、その眼光は鋭く冷たい光を宿している。きれいだなとアルスは思った。

「また、来たのか。愚か者たちめ。この女のようにしてくれるわ！」

赤き竜は火を噴いた。アルスとオルファスはそれをかわした。何を思ったのか、アルスは竜に取引を持ちかけた。

「ねえ、僕と友達にならない？」

竜は、口の端をあげたが、アルスの提案を拒否した。

「たわけたことを言う小童だな。人間などと仲間になるなどありえない」

アルスは少し哀しそうな顔をしたが、竜をきっと睨みつけると、ハンマーを突きつけ宣戦布告した。

「残念だよ。パパとお姉ちゃんは返してもらうね」

「やってみるがいい」

竜は薄ら笑いを浮かべた。そしてアルスに向かってくる。アルスは手を上に突き上げ集中した。そして最大級のファイアーボールを竜におみまいする。竜がひるんだ間に背後に回りこみ、竜の背を思いっきりハンマーでかっ飛ばした。水の槍を取り出し、竜の尾を串刺しにして大地に縫い付ける。そしてすかさず石の魔法で、竜の周りに石柱を立て囲った。竜の動きを止めたところで、呪文を唱える。

「ドラグキャリバー！」
アルスの手から、清浄の紫の光が飛び出し、竜を飲み込んだ。
「こ、これは……、きさま、我を封印するか！？」
「そうだよ、おとなしくして。すぐ終わるから」
そう言って、アルスはオルファスに目配せする。二人で力をなくした竜に切りかかる。
「やめろ！　やめてくれ！」
竜の叫びが響き渡る。
「さよなら」
アルスは左手を竜に向けて、ウォーターレーザーを放った。竜は断末魔の叫びを上げて、光となって散った。

オルファスが剣を投げ捨て、水晶のアリアに駆け寄った。水晶はパラパラと砕け散り、アリアが倒れてきた。オルファスはアリアを受け止めた。
「アリア！」
アリアは目を覚まさない。顔は後ろに仰け反り、手はだらりと下がったままだった。オルファスの瞳が涙であふれた。
「アリア……」
アリアの頭を腕で支え、震える手で彼女の額にかかる赤い髪をかき上げた。目、鼻、頬、唇、その太く長い指でいとおしむ様になぞる。そして人形のようなアリアを抱きしめた。
（間に合わなかったのか……）
涙が、アリアの顔に降り注いだ。
その時だった。だらりと垂れ下がっていたアリアの手が、ぴくりと動いた。
「お姉ちゃん？」
アルスは二人に近づいた。そして姉の手を取った。アリアはゆっくり目を開けた。
「オルファス、……アルス」

「お姉ちゃん、竜は倒したよ」
アリアはその言葉を聞くと、手をぎゅっと握り返した。
「さすが、私の弟ね」
そして、オルファスに目線を移した。アリアはなんともいえない嬉しそうな笑みを浮かべた。
「オルファス、助けに来てくれたのね」
「当たり前だろう。……待たせたな」
オルファスは愛情に満ちた眼差しでアリアを見つめ、彼女の髪を手で何度も何度も梳いた。

しばしの沈黙の後、オルファスが口を開いた。
「アルス、カイルさんを元に戻せないのか？」
声をかけられたアルスは、オルファスを見て口を開いた。
「出来ると思う。オルファスの持ってきてくれた石版から召喚魔法が見つかったんだ」
そう言うと、アルスは胸に手を当て呪文を唱える。
「ゲートリジェクト」
しばらくの静寂の後、どこからともなく光が飛んできた。目を背けたくなるようなまばゆい光の中から現れたのは、幻の父だった。
「アルス」
「パパ？」
アルスは、一歩一歩カイルに近寄って行った。大きく手を広げて父が待ってくれている。
「パパ！」
アルスはカイルの胸に飛び込んだ。
「アルス、よくやったな」
カイルはアルスの頭をガシガシと撫ぜた。アルスはワンワン泣き始める。そんなアルスをカイルは抱きしめた。
アリアがオルファスの腕を解いて立ち上がり、二人の元へ歩いていく。

「パパ」
「アリア、よく頑張ったな」
「うん……」
カイルはアリアを抱き寄せる。三人は抱き合って再会を喜んだ。
四人はすぐアルヴァーナへ帰った。カイルとアリアとアルスは家に戻る。オルファスはバレットへ報告に行った。
「先生」
「オルファス！　戻ったのか」
「はい。アリアとカイルさんを救出しました」
「そうか。良かった」
バレットは涙ぐみながらオルファスの肩を叩いた。
「ご苦労だったな。詳しいことは明日聞く。今日はもう帰って休め」
「はい。失礼します」
帰っていくオルファスを見送りながら、バレットは歓喜の涙が止まらなかった。

六　それぞれの明日

赤き竜が封印されたことで、アルヴァーナの町に頻繁におきていた地震はぴたりと収まった。

チュンチュンと小鳥のさえずりがする。窓から差し込む光がアルスの顔を照らす。「んー」と、大きく伸びをすると、辺りをキョロキョロ見回した。誰もいない。アルスは慌てた。急いで、服に着替え、下へ行くと、母が鼻歌を歌いながら朝食を作っている。その隣では、姉が手伝っていた。

（夢じゃなかったんだ）

昨日の激闘が嘘のような穏やかな朝の風景。アルスはそっと二人に近づいた。

「ママ、お姉ちゃん、おはよう」

「おはよう、アルス。もうすぐ朝ごはんだから、お外のパパを呼んできてちょうだい」

「はい、ママ」

「その前に、顔を洗うのよ」

「わかってるよ、お姉ちゃん」

アルスは洗面所へ飛び込んで急いで顔を洗うと、ドアを開けて外へ出た。朝日がまぶしくて、思わず手で傘を作ってしまった。畑を見回すと、父が水やりをしている。アルスは父に駆け寄った。

「パパ、おはよう。朝ごはんだって」

「おはよう、アルス」

父は水やりの手を止めてあいさつを返してくれた。アルスは父の手を引っ張って家へ連れて行く。

家族四人がテーブルに着いた。今日は、父の好きなオムレツであ

る。
「おいしいね。マナの料理はやっぱりおいしいよ」
「まあ、あなたったら。ありがとう」
父に褒められて、母は大変嬉しそうである。
「今日は学校だったね」
「ええ、ごめんなさいね。せっかく帰ったばかりなのに家を空けて」
「いや、構わないよ。町の人たちにあいさつしてくるから」
すると、アルスが食べ終わるやいなや、アリアは席を立った。
「ママ、今日は友達と約束しているから先に行くね。行こう、アルス」
「うん。じゃあね、パパ」
アルスはアリアに急かされて、急いでリュックを背負って、家を飛び出した。
「お姉ちゃん、どうしてママを置いてきたの？」
「アルス、パパとママを二人きりにしてあげなきゃ」
「そっか」
アリアの言葉を、なんとなくわかった気がしたアルスだった。

久しぶりに通う学校への道のり、アルスはあっという間にアリアを追い越した。
「お姉ちゃん、遅い！」
「アルスが速すぎるのよ！」
まったく、子供は成長が早いわねなどと、年寄りじみたことを考えるアリアは走るのをやめてしまった。
一人走ってきたアルスは、学校の入り口のところで、オルファスに会った。
「おはよう、オルファス」
「おはよう、アルス。アリアは？」
「後から来るよ」
そう答えたアルスはそのまま校舎目指して走っていった。後から

歩いてきたアリアに、オルファスは微笑みかけた。
「もう学校に来て大丈夫なのか？」
「ええ、ずっと閉じ込められてたんだもの。じっとしているのはもううんざりよ」
手を空に向かって突き出し大きく伸びをしたアリアに、オルファスは言葉を漏らした。
「じゃあ、毎日デートしてやる」
「してやる？　上から発言ね」
首をすくめたアリアに、オルファスは手を胸の前に持ってくると、うやうやしくお辞儀をした。
「失礼。毎日お相手していただけますか、アリアさん」
「ええ、喜んで」
二人は顔を見合わせて噴き出した。

アルスが教室に入ると、みんなが寄ってきた。
「アルス、帰ってきたんだ！」
「うん、またよろしくね」
すると、ムーとスーが、アルスの手を取った。
「アルス、約束よ。今日は遊ぼうね」
「いいよ、何する？」
「かくれんぼ」
「えーっ！？　勘弁してよ」
かくれんぼには、苦い思い出がある。アルスが顔をゆがめた。
「冗談だよ」
アルスをからかった双子は楽しそうに笑った。

＊＊＊

あれから、何度目かの春を迎えた。
アリアは学校を卒業し、同じく卒業したオルファスの研究の旅に

ついて行くことにした。アリアがそのことを告げた夜、カイルはひどく落胆した。事実上、アリアをオルファスに獲られるわけである。
さびしがるカイルをマナは慰める。じきに孫の顔が見られるわと。それを聞いたカイルはますます落ち込んでしまった。マナはそんなカイルの肩に手を乗せた。離れ離れだったのは私もでしょうと。マナの言葉にカイルは破顔する。そうだね、マナとの時間を楽しむことにするよと答えた。

アルスは九年生になり、元気に学校に通っている。家の仕事を手伝いながら、ムーとスーと遊んでいる。ただ、このごろは変化があって、スーと一緒にいることが多い。
「スー、ダンジョンへ行こう」
「うん、行こうなの！」
活発なスーとともに、ダンジョン巡りをするのが今の楽しみでもある。二人は手をつないで、ダンジョンを駆け回る。アルスは思った。今なら、リーンの言った事も、オルファスの言った事もわかる気がする。スーと一緒にいたい、スーにずっと笑っていて欲しい、そう思えるのだ。

セレッソの木は、今年も満開の花を咲かせながら、アルヴァーナの町の人々を見守っている。

ＥＮＤ

パラレルワールド・囚われのアリア　6（後書き）

私のつたない小説を読んでいただきありがとうございました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5506i/

薄紅色の花びらの下で

2010年10月8日10時30分発行